秋　田　市

秋田新都市開発整備事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告書

狸崎B遺跡
秋大農場南遺跡

1992.3　秋田市教育委員会

序

秋田新都市開発整備事業に係わる御所野丘陵部の埋蔵文化財につきましては昭和56年度から対処し、計画区域内31ヶ所の遺跡のうちすでに28ヶ所の遺跡の調査が終了し、本年度は２ヶ所の遺跡の発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、鍛崎Ｂ遺跡は旧石器時代、縄文時代、秋大農場南遺跡は旧石器時代、縄文時代、平安時代の複合遺跡であることが判明し、貴重な成果を得ることができました。

調査の実施にあたっては、県、関係機関の指導をはじめ、地元関係者等多くの方々の積極的なご協力をいただき深く感謝申し上げます。

本報告書が文化財保護のため、さらには研究資料として広く活用されれば幸甚に存じます。

平成４年３月

秋田市教育委員会

教育長　長　門　伸　一

例　　言

1．本報告書は秋田市四ツ小屋小阿地（狸崎Ｂ遺跡）、四ツ小屋末戸松本（秋大農場南遺跡）に所在する各遺跡の発掘調査報告書である。

2．本報告書は調査員及び調査補佐員の協力を得て安田忠市が編集した。

3．本報告書の執筆は狸崎Ｂ遺跡、秋大農場南遺跡を安田忠市が、その他は菅原俊行が担当し、菅原が補筆した。

4．発掘調査、整理作業の過程で下記の各氏より指導、助言を賜った。（敬称略）

小林達雄（国学院大学）、冨樫泰時（秋田県埋蔵文化財センター）、林　謙作（北海道大学）、渡辺　誠（名古屋大学）

5．各遺跡の平面図、土層断面図中のＰは土器、Ｓは石（礫）を示し、石器実測図の石鏃、鋸歯縁石器等の外形図にはアスファルト付着物の箇所を示した。

6．発掘調査による出土遺物、実測図、写真、その他の記録は秋田市教育委員会が保管する。

目　　次

序

例言

調査の概要…… 1

　調査に至るまでの経過…… 1

　調査期間と体制…… 2

　調査の方法と経過…… 2

　遺跡の位置と地形・地質…… 3

狸崎B遺跡

　遺跡の概観…… 14

　旧石器時代…… 14

　縄文時代…… 16

　遺構と遺物…… 16

　まとめ…… 44

秋大農場南遺跡

　遺跡の概観…… 72

　旧石器時代…… 72

　縄文・平安時代…… 74

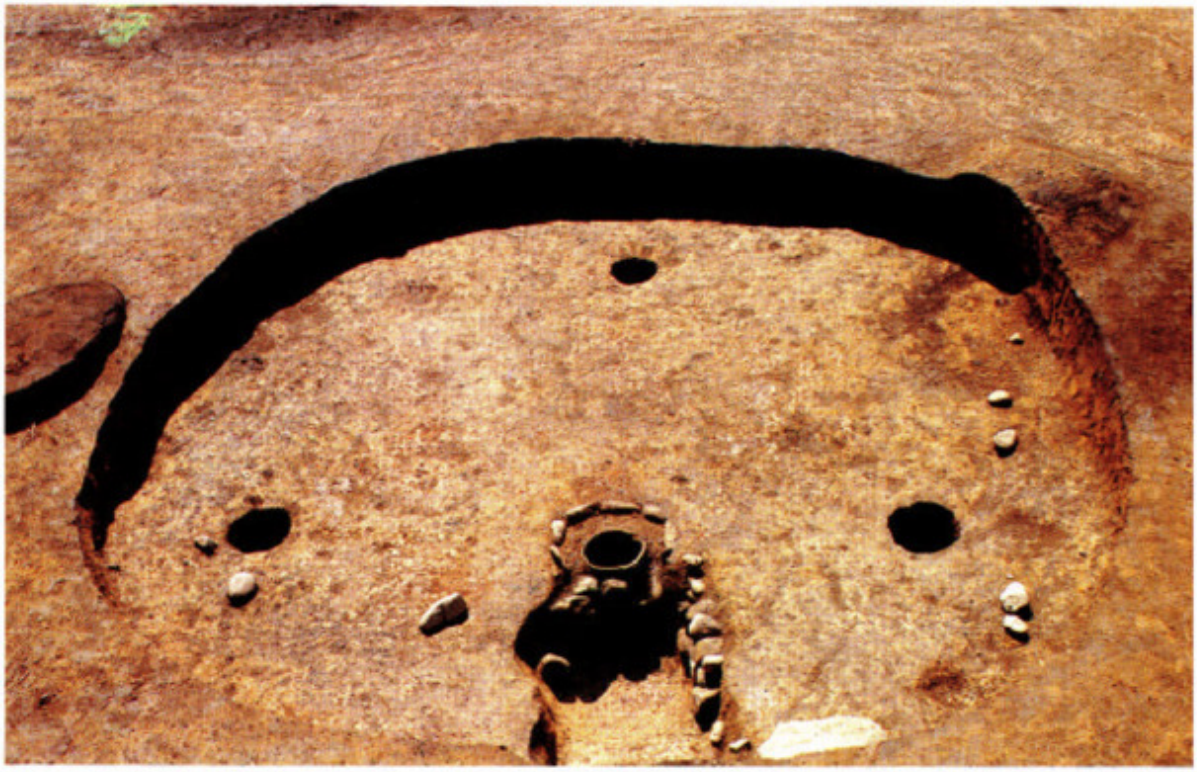
　遺構と遺物…… 74

　まとめ…… 110

御所野台地（南東→）

狸崎Ｂ遺跡　旧石器時代調査状況（南→）

秋大農場南遺跡　西部（東→）



秋大農場南遺跡　２号住居跡（東→）

調 査 の 概 要

調査に至るまでの経過

秋田市南東部地域は、昭和56年６月の秋田空港の開港、東北横断自動車道秋田線秋田インターチェンジ開設予定等、空陸両面の交通の要衝に位置する所であることから、いち速く開発可能性等についての各調査が実施され、県市総合計画においても産業、住宅団地が一体となった総合的ニュータウン＝臨空港新都市として具体的に位置づけられた。

昭和55年に御所野台地全体の分布調査を実施し、約30ヶ所の遺物散布地を確認した。昭和56年度は開発計画区域内の西部工業団地造成に先だち、**下堤Ｄ遺跡**（秋田市「下堤Ｄ遺跡発掘調査報告書」1982年３月、秋田市教育委員会）の発掘調査を行った。昭和57年度は今後の開発計画に対処するため昭和55年の分布調査に基づき、３ヶ月間で遺跡の範囲確認調査を実施し、範囲確認調査の結果に基づき関係機関と協議を重ね、引き続き年度別に計画的な発掘調査を実施することとし、昭和57年度は**下堤Ｇ遺跡、野畑遺跡、湯ノ沢Ｂ遺跡、坂ノ上Ｃ遺跡、坂ノ上Ｄ遺跡**（秋田市「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」1983年３月、秋田市教育委員会）、昭和58年度は**坂ノ上Ｅ遺跡、湯ノ沢Ａ遺跡、湯ノ沢Ｃ遺跡、湯ノ沢Ｆ遺跡、湯ノ沢Ｇ遺跡、湯ノ沢Ｈ遺跡、野形遺跡**（秋田市「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」1984年３月、秋田市教育委員会）、昭和59年度は**下堤Ｅ遺跡、下堤Ｆ遺跡、坂ノ上Ｆ遺跡、狸崎Ａ遺跡、湯ノ沢Ｄ遺跡、深田沢遺跡**（秋田市「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」1985年３月、秋田市教育委員会）、昭和60年度は**地蔵田Ｂ遺跡、台Ａ遺跡、湯ノ沢Ｉ遺跡**、昭和58年度に調査した**湯ノ沢Ｆ遺跡**の北西部（秋田市「秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書」1986年３月、秋田市教育委員会）、昭和61年度は**地方遺跡、台Ｂ遺跡**（秋田市「秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財調査報告書」1987年３月、秋田市教育委員会）の発掘調査を行った。

昭和62年度は、狸崎Ｂ遺跡、地蔵田Ａ遺跡、秋大農場遺跡の調査を実施し、新都市開発計画地区内に所在する27ヶ所の遺跡の調査が一応終了する予定であった。しかし、昭和60年度に調査した地蔵田Ｂ遺跡の保存問題が出てきたため計画の一部見直しがあり、総合公園、医療福祉等複合施設建設予定地にある下堤Ａ遺跡、下堤Ｂ遺跡、下堤Ｃ遺跡の発掘調査が必要になり、昭和61年度に一部表土除去作業を行っていた**下堤Ｃ遺跡**（秋田市「秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書」1987年９月、秋田市教育委員会）の発掘調査を実施することにし、**下堤Ａ遺跡、下堤Ｂ遺跡**（秋田市「秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書」1988年３月、秋田市教育委員会）については調査費の関係で７月から発掘調査を行った。

平成３年度は**狸崎Ｂ遺跡、秋大農場南遺跡**の発掘調査を行った。なお、狸崎Ｂ遺跡については調査期間の関係で、来年度継続調査する予定である。

調査期間と体制

調 査 期 間　平成３年４月18日～８月20日（秋大農場南遺跡）
　　平成３年７月15日～12月17日（狸崎Ｂ遺跡）

調査主体者　地域振興整備公団

調査担当者　秋田市・秋田市教育委員会

調　査　員　菅原俊行、安田忠市、納谷信広（秋田市教育委員会文化振興課）

調査補佐員　小林　都

調査協力員　五十嵐芳郎（秋田考古学協会）

調査作業員　鈴木銀一、鈴木長治、三浦竹治、鈴木市太郎、三浦金司、佐藤春信、加賀谷金一郎、佐々木金治郎、若月春吉、三浦初枝、三浦千枝子、三浦トミエ、三浦タキ、鈴木ウメノ、鈴木鈴子、鈴木博子、熊谷文子、宮田トキ子、伊藤茂子、佐々木久子、高島綾子、会場京子、矢野富美子、鈴木キヨ、加藤エサ子、鹿子沢ミサ、三浦アエ子、石井いさ子、石井京子、三浦トキ子

整理作業員　三浦千枝子、伊藤茂子、宮田トキ子、鈴木博子、三浦秋子、伊藤秀子、鈴木弘子、佐々木暁子

事　務　員　熊谷信子

調査の方法と経過

各遺跡ごとに任意の原点を決めて東西南北（磁北）に基準線を作り、調査区全体に大グリッド（40×40m）を設定し、さらにその中に小グリッド（４×４m）を設定して単位グリッドとした。大グリッドは（１～n）、小グリッドは東西（X軸）に数字（１～10）、南北（Y軸）にアルファベット（A～J）を配し、その組み合せで遺跡番号、大グリッド、小グリッドの順に呼称することとした。

発掘調査は、秋大農場南遺跡が４月18日～８月20日、狸崎Ｂ遺跡が７月15日～12月17日の日程で実施した。また、狸崎Ｂ遺跡、地蔵田Ａ遺跡、秋大農場遺跡は５月27日～７月12日の日程で範囲確認調査を併せて実施し、秋大農場遺跡については出土遺物と遺構の検出がほとんどないことから発掘調査の必要がないと判断した。秋大農場南遺跡は秋大農場遺跡の南側に位置し、比高差は少々あるものの関連遺跡と把握し、秋大農場遺跡の遺跡番号を秋大農場南遺跡へ変更することとした。

狸崎Ｂ遺跡は、旧石器時代、縄文時代の複合遺跡である。表土除去作業は調査区全体を実施したが、旧石器時代、縄文時代の遺構調査は調査区北部のみの実施である。調査期間の都合上で完掘には至らず、来年度継続調査する予定である。旧石器時代の出土遺物は約3,200点で、石器、剥片、石核等である。縄文時代は竪穴住居跡３軒（大木10式期）、他に竪穴遺構、土壙、焼土遺構等の検出である。

秋大農場南遺跡は、旧石器時代、縄文時代、平安時代の複合遺跡である。旧石器時代の出土遺物は340点で、二次加工の認められる剥片が１点のみで、他は剥片である。縄文時代は竪穴住居跡６軒（大木10式期）、土壙、土器埋設遺構、平安時代は竪穴住居跡１軒及び土壙の検出で、他に溝状土壙、焼土遺構等が検出されている。

平成３年度来跡者（順不同、敬称略）

冨樫泰時、小林　克、小林恵美子（秋田県埋蔵文化財センター）、林　謙作（北海道大学）

遺跡の位置と地形・地質

位　置

秋田市街から国道13号線を南下し、仁井田、横山を過ぎ、坂を登ると標高約40m前後の広大な台地が開ける。これはＪＲ奥羽本線四ツ小屋駅方面からもよく見える平坦な台地であり、御所野台地、末戸台と呼ばれている。この台地が秋田新都市開発整備事業計画地域である。

各遺跡の位置については第２図「御所野丘陵部発掘調査遺跡、範囲確認遺跡及び周辺遺跡」を参照されたい。

地形・地質

遺跡の存在する地形は、大別して和田丘陵と末戸台台地に分けられる。和田丘陵は平坦面をあまり持たない。しかし、定高性を持った標高60～150mのかなり開析を受けた老年期地形を示し、地形は第３系鮮新統に属する青色砂質シルト岩（笹岡層）と青灰色塊状泥岩（天徳寺層）、それに中新統に属する暗灰色泥岩（船川層）などからなっている。末戸台台地は標高25～50m強で、その表面は大変平坦である。この台地は和田丘陵と接して数段の段丘を識別できる。これらは内藤[註1]の区分からすると、上位から標高45～50m強の椿台段丘、標高40m強の上野台段丘Ⅰ、標高35m強の上野台段丘Ⅱ、標高25m強の宝竜崎段丘の４段階に分けられる。（第３図）

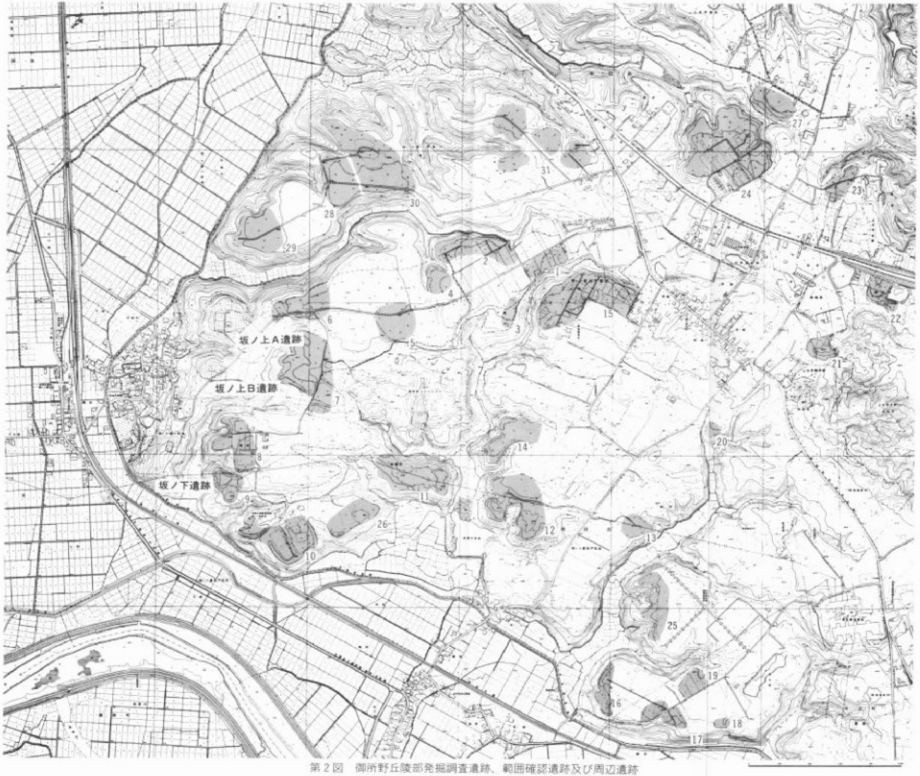
椿台段丘

岩見川右岸末戸台台地では45～50m強の標高をもつ、いわゆる椿台面をその堆積面とする椿台層が厚い礫（最大径10cm前後）、砂、粘土の互層で構成されている。ただ基底高度はわからない。岩相は最上部に１～２mの褐色の粘土質火山灰層があり、次に礫、砂、粘土の互層で、砂礫の部分でしばしばクロス・ラミナ（斜交葉理）がみられ、砂土あるいはシルトは水平な細かい層理をなすことが多い。層厚をみると、礫層はうすく、砂・粘土層が厚い。その下部は第３系の泥岩（船川層）や砂質シルト（笹岡層）となっている。内藤はこの椿台面を関東の下末吉面に対比している。

上野台段丘Ⅰ

末戸台台地で椿台段丘の南側に標高40m強でついている段丘が上野台段丘Ⅰと呼ばれている。表層の１～２mの粘土質火山灰層を除くと、段丘堆積物は最大径20～30cmの礫層であり、厚さは５

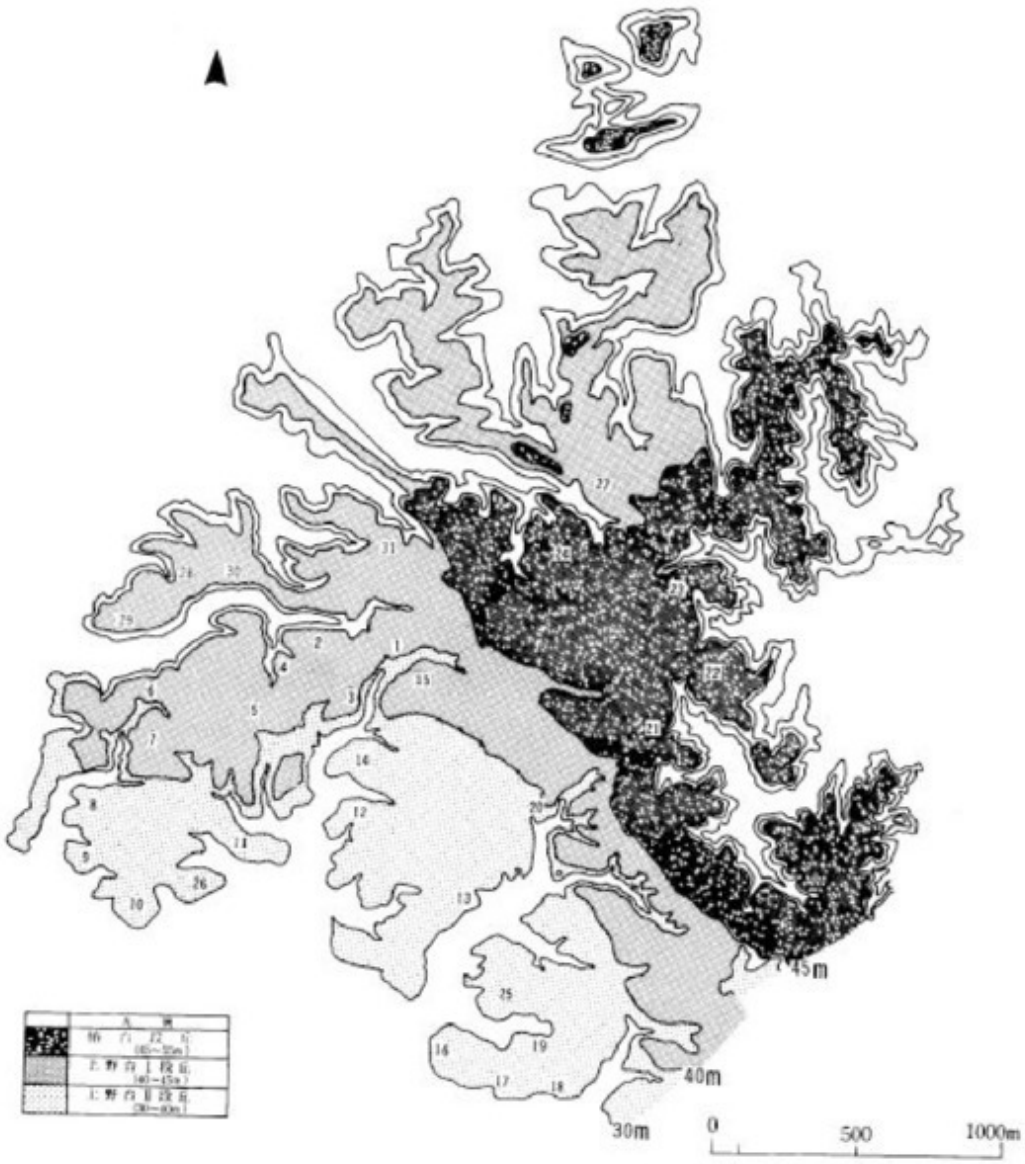
第１図　遺跡の位置



第２図　御所野丘陵部発掘調査遺跡、範囲確認遺跡及び周辺遺跡

御所野丘陵部　遺跡一覧表

			範囲確認調査			発掘調査遺跡		
遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	面積㎡	地目	調査年度	調査面積㎡	内容
1	下堤E	秋田市四ツ小屋小阿地字下堤	縄文	5,625	畑	S59	3,340	縄文(中期)集落
2	下堤F	〃　〃	〃	14,375	〃	S59	2,950	縄文(前、中期)集落
3	下堤G	〃　〃	旧石器、縄文(中)	5,000	山林原野	S57	1,550	旧石器、縄文(前、中期)集落
4	坂ノ上C	〃　四ツ小屋小阿地字坂ノ上	縄文	6,000	〃	S57	1,000	縄文(中、晩期)
5	坂ノ上D	〃　〃	〃	14,060	〃	S57	1,500	縄文(中、晩期)
6	坂ノ上E	〃　〃	〃	15,000	〃	S58	5,000	縄文(中期)集落、9～10c製鉄炉
7	坂ノ上F	〃　〃	〃	37,810	〃	S59	18,800	縄文(中期)集落、弥生住居跡
8	鹿崎A	〃　四ツ小屋小阿地字鹿崎	縄文(晩)	13,750	畑、山林原野	S59	1,910	縄文(前、晩期)土壙墓、弥生住居
9	鹿崎B	〃　〃	縄文	11,250	原野	H3	3,000	旧石器、縄文(中期)集落
10	地蔵田A	〃　四ツ小屋末戸松本字地蔵田	旧石器、縄文、平安	30,000	畑			
11	地蔵田B	〃　〃	縄文(中、晩)、弥生	25,000	山林原野	S60	12,000	旧石器、縄文(中期)集落、弥生集落掘木跡
12	湯ノ沢A	〃　四ツ小屋末戸松本字湯ノ沢	縄文	21,555	〃	S58	3,000	縄文(中期)、弥生住居跡
13	湯ノ沢B	〃　〃	縄文(前、中)	5,000	〃	S57	2,340	縄文(中期)集落、平安住居跡
14	湯ノ沢C	〃　〃	縄文(中、晩)、弥生	11,565	〃	S58	4,100	縄文(中期)、集落
15	湯ノ沢D	〃　〃	縄文(中)	35,000	畑	S59	3,220	縄文(中期)、集落
16	湯ノ沢E	〃　〃	縄文	7,500	〃	S58	1,920	縄文(後期)
17	湯ノ沢F	〃　〃	縄文、土師、須恵	5,310	〃	S58、60	4,400	弥生土壙、平安墓(40基)
18	湯ノ沢G	〃　〃	縄文(後)	1,300	原野	S58	400	縄文(後期)
19	湯ノ沢H	〃　〃	縄文	5,940	畑	S58	720	縄文(前、中、晩期)住居跡
20	野畑	〃　上北手御所野字野畑	縄文(中)	1,875	山林	S57	640	縄文(中期)集落
21	野形	〃　上北手御所野字野形	土師、須恵	5,940	山林原野	S58	980	平安住居跡、窯跡
22	深田沢	〃　上北手古野字深田沢	縄文、平安	6,875	畑	S59	3,320	平安建物跡、住居跡
23	台A	〃　上北手古野字台	〃	8,440	〃	S60	2,000	縄文(中期)集落
24	地方	〃　上北手猿田字堤ノ沢	縄文(晩)	54,670	畑、原野	S61	11,500	縄文(中期)集落、(晩期)土壙墓
25	湯ノ沢I	〃　四ツ小屋末戸松本字湯ノ沢			苗圃	S60	5,700	弥生
26	秋大農場南	〃　四ツ小屋末戸松本字地蔵田			原野	H3	3,000	旧石器、縄文(中期)集落、平安住居跡
27	台B	〃　上北手猿田字寺ノ沢			山林原野	S61	1,150	縄文(中期)
28	下堤A	〃　四ツ小屋小阿地字下堤			原野	S62	11,000	縄文(中期)集落、平安集落
29	下堤B	〃　〃			〃	S62	5,100	縄文(中期)集落、平安集落
30	下堤C	〃　〃			〃	S61、62	17,700	平安集落
31	下堤D	〃　〃			〃	S56	17,000	旧石器、縄文(前～晩期)集落、平安住居跡



第３図　段丘及び遺跡の位置

m程度で、その下部は第３系となっている。

上野台段丘II

末戸台台地では上野台段丘Ｉとの比高が５ｍ強である。段丘堆積物の岩相は、上野台段丘Ｉとほぼ同様で、層厚は５ｍ前後である。内藤によれば、厚い礫層の下部は椿台層に当るとしている。狸崎Ｂ遺跡、秋大農場南遺跡はこの上野台段丘IIに位置する。

段丘堆積物の特徴は、上野台Ｉ、II面では最大径30cm前後の亜円礫を主体とする。ほぼ一様な礫層をもち、河川堆積物で、厚さも加味すると岩見川などによる河成の侵食段丘面と考えられる。椿台、上野台Ｉ、II面の各面をおおっている層厚１～２ｍのシルト分を含んだ粘土質火山灰層は、男鹿半島の寒風山が起源と一応考えられている(註2)。この粘土質火山灰層の表面細粒物質の風化状態をみていくと、椿台、上野台Ｉ、II面では黒色土の下の細粒物質のうち、上部50～100cmが明褐色を呈し、下部は灰色で、境は漸移する。また、土壌面を見ると、椿台、上野台Ｉ、II面をおおう土壌はいわゆる高岡２統に属していると考えられ、比較的大きい円礫を混入していて、黒色土層を厚く堆積させている。この層中には火山ガラスを混入しており、火山灰が関係しているものと推定される。

註１　「秋田県岩見川流域およびその周辺の段丘について」内藤博夫　1965年　第４紀研究第４巻第１号

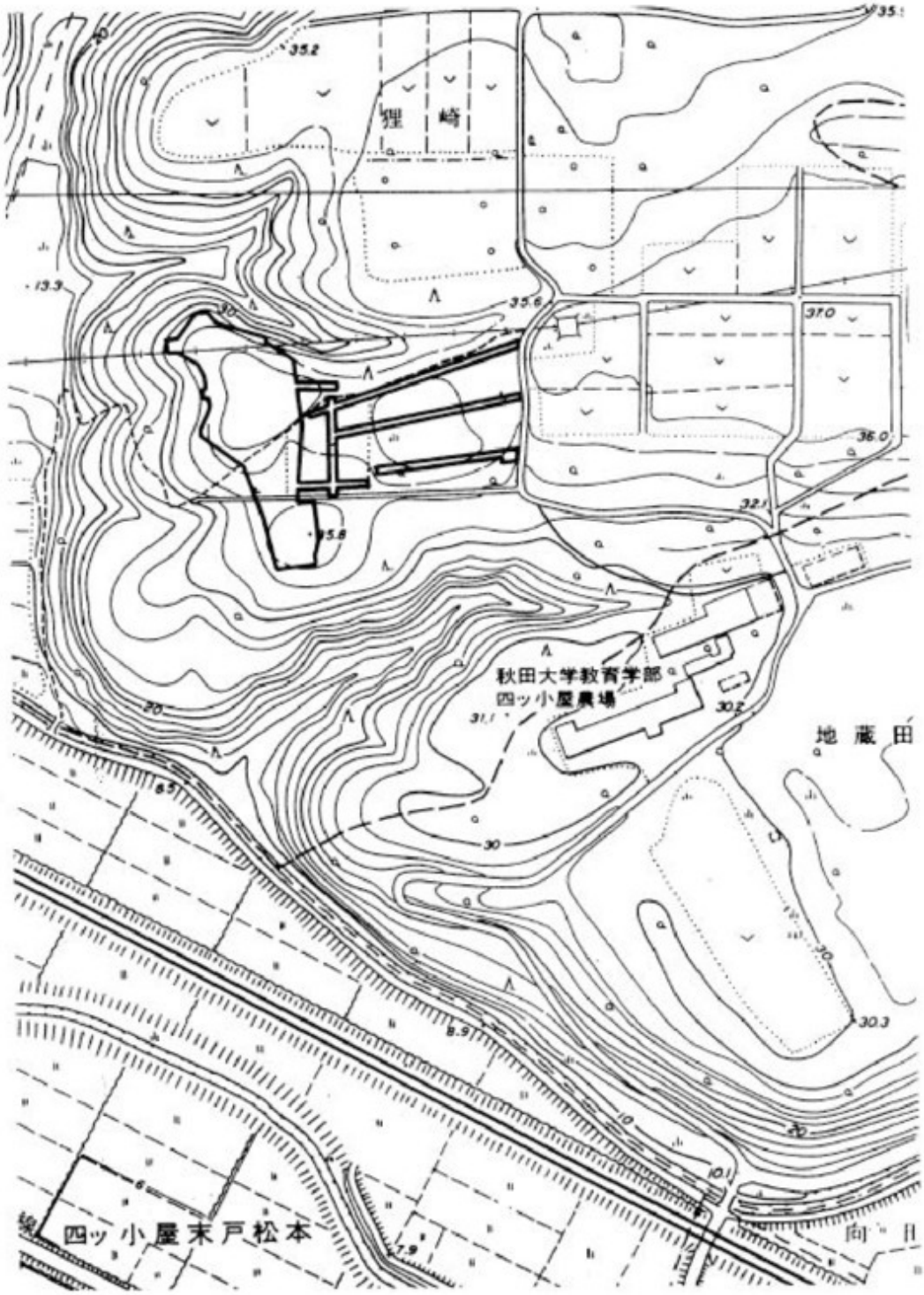
註２　「地形、表層地質・土壌、秋田」　経済企画庁土地分類基本調査　1966年

「八郎潟の研究」　秋田県教育委員会　1965年

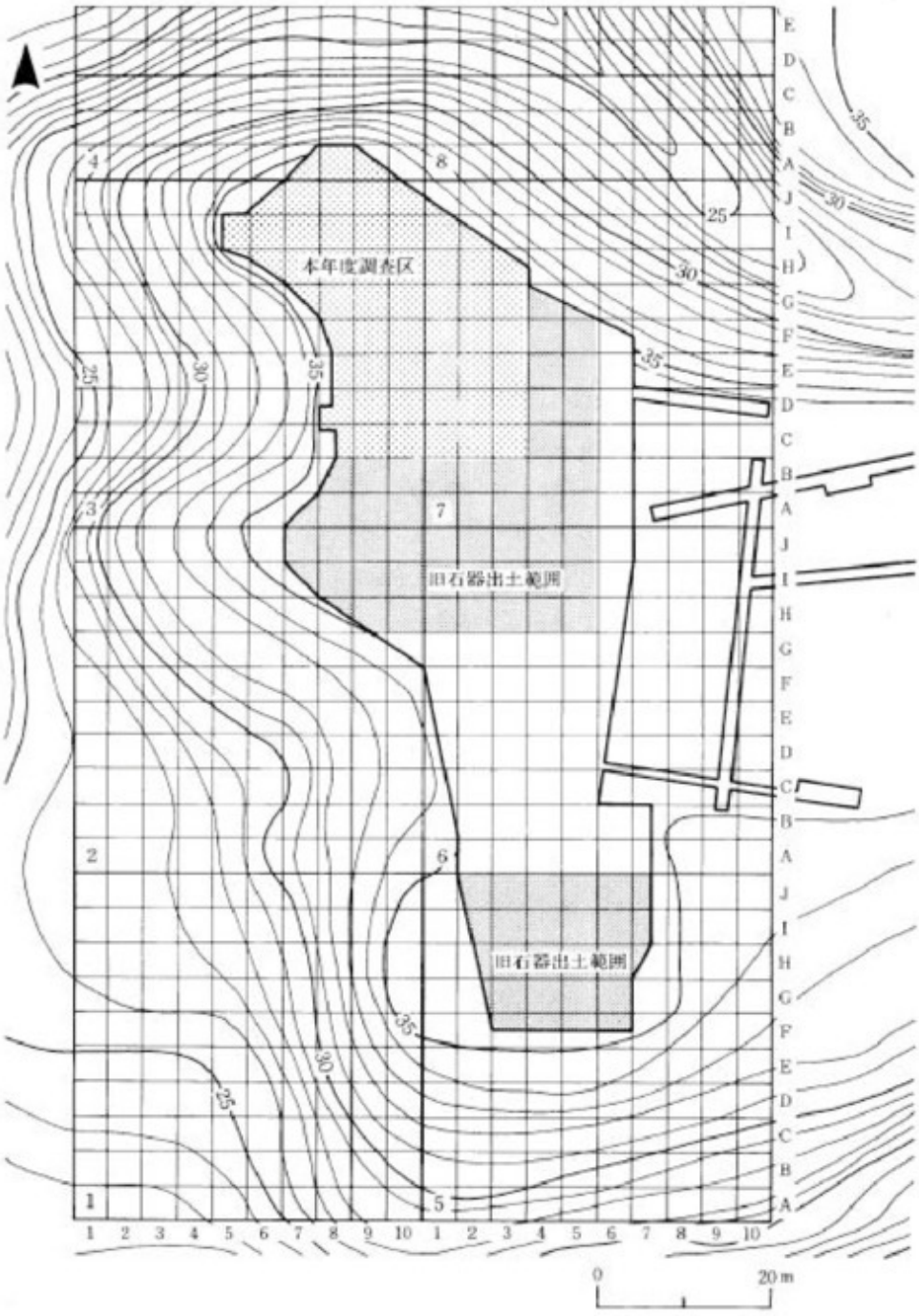
「火山活動と地形」　村山　磐　大明堂

「秋田県男鹿半島一の目潟の火山噴出物について」　林　宏　地質学雑誌第61巻第717号　1955年

狸崎（むじなざき）B遺跡


狸崎
秋田大学教育学部
四ツ小屋農場
地蔵田
四ツ小屋末戸松本
向
35.2
35.6
37.0
36.0
32.1
31.1
30.2
30.3
13.9
15.8
8.5
8.9
7.9
10.1
0
100m

第1図　遺跡周辺の地形


本年度調査区
旧石器出土範囲
旧石器出土範囲
4
8
25
30
35
25
30
35
3
7
2
6
35
30
25
1
5
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
E D C B A J I H G F E D C B A J I H G F E D C B A
0
20 m

第２図　グリッド配置図

遺跡の概観

御所野台地の南側、ＪＲ奥羽本線四ツ小屋駅から南東へ600ｍの地点である。南と北側から沢が入り込んで舌状をなし、標高は約35ｍである。

調査の結果、旧石器時代、縄文時代の複合遺跡で、遺構は縄文時代の竪穴住居跡、竪穴遺構、土壙、その他に焼土遺構等が検出された。

隣接する遺跡は北側約100ｍに縄文時代前・晩期、弥生時代の「狸崎Ａ遺跡」、南東約300ｍに旧石器時代、縄文時代中期、平安時代の「秋大農場南遺跡」、東側約500ｍに旧石器時代、縄文時代中期、弥生時代の「地蔵田Ｂ遺跡」等の関連遺跡が所在する。

旧石器時代

本台地で発掘調査された旧石器時代の遺跡は、「下堤Ｄ遺跡」、「下堤Ｇ遺跡」、「地蔵田Ｂ遺跡」である。また、「下堤Ａ遺跡」からはナイフ形石器、石刃が各１点ずつ、「坂ノ上Ｆ遺跡」からは縦長剝片が１点出土している。昭和55年の分布調査で石刃が出土している「地蔵田Ａ遺跡」は、平成５年度に発掘調査が予定されている。

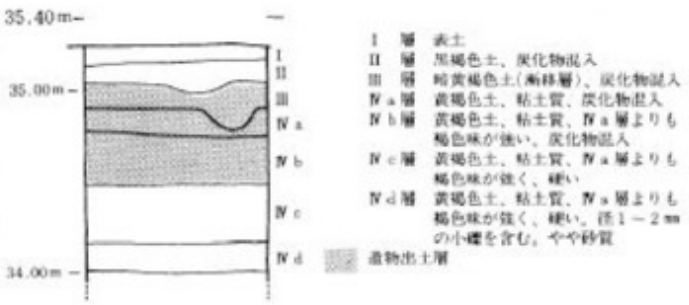
本遺跡は調査面積が広範囲であり、調査期間の都合上完掘には至らず、来年度継続調査する予定である。従って本報告は来年度とし、今年度は概報にとどめたい。

層位

本遺跡は標高約35ｍで、地形区分では上野台段丘Ⅱにあたる。遺跡はこの上野台段丘Ⅱの中では中位に位置する。遺物はⅢ層（暗黄褐色土、ローム漸移層）、Ⅳ層（黄褐色土、ローム層）からの出土である。

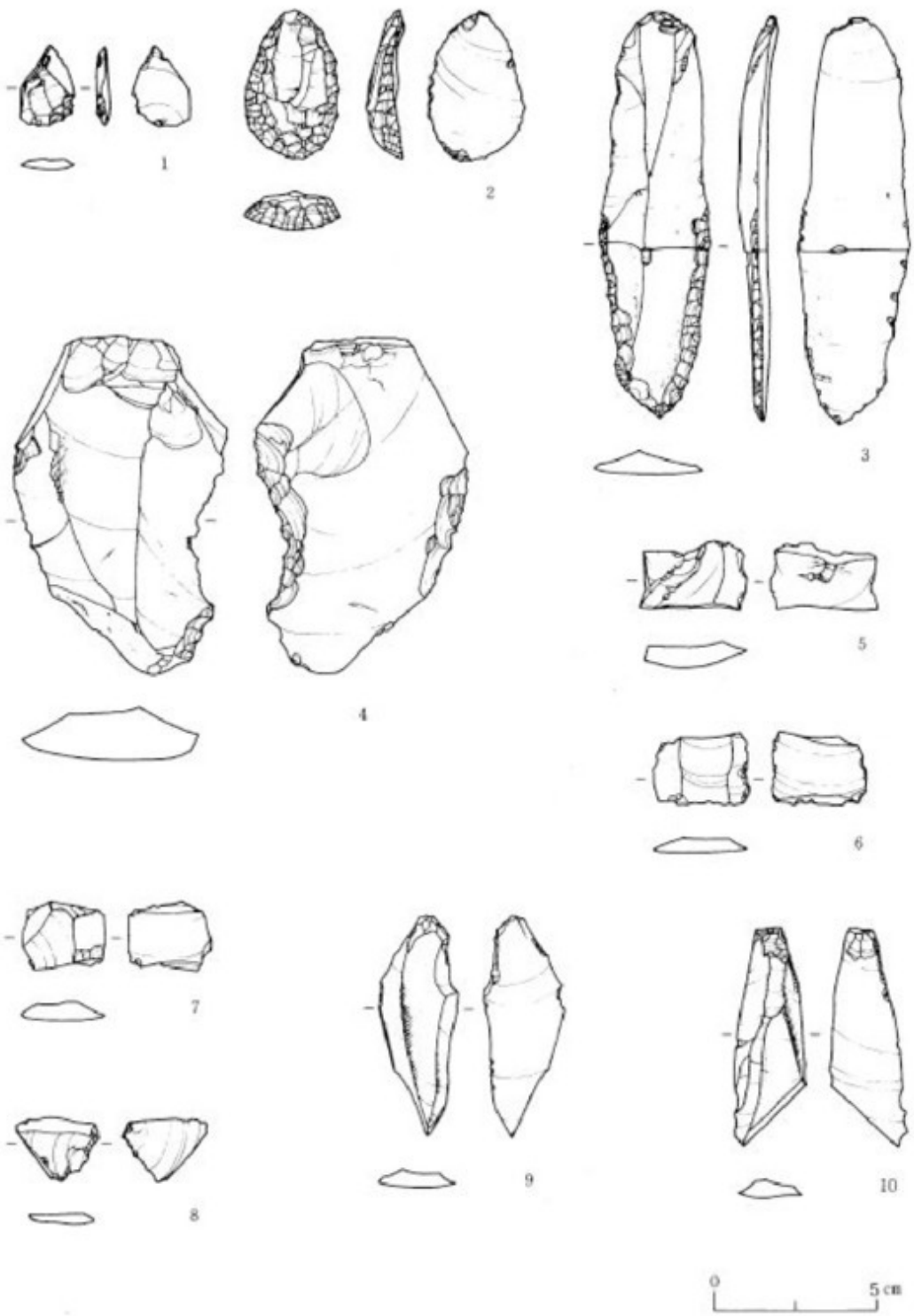
出土遺物（第４、５図１～18）

出土総数は約3,200点で、石器、剝片、石核等が出土している。石器の器種は、ナイフ形石器（１）、掻器（２）、削器（３）、抉入石器（４）で、５～18は使用痕及び二次加工のある剝片である。２、３は片面調整により刃部を作り出し、４の裏面には光沢が認められる。５～７は縦長剝片の両端を切断するものである。12は縦長剝片に調整を施したものであるが、剝片と剝離調整には時間差が認められる。

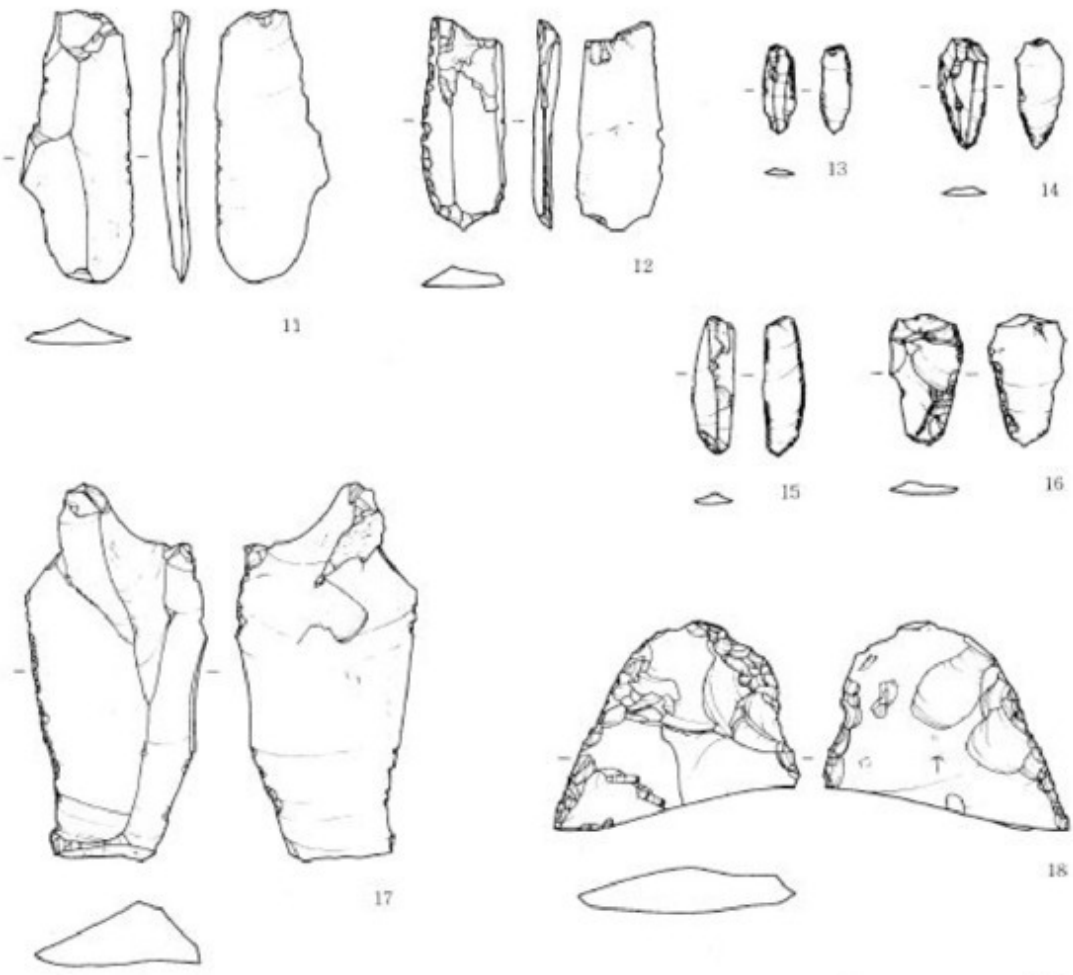


（７－３Ｅグリッド）

第３図　土　層　図



第4図　旧石器時代出土遺物



第５図　旧石器時代出土遺物

縄文時代

遺構と遺物

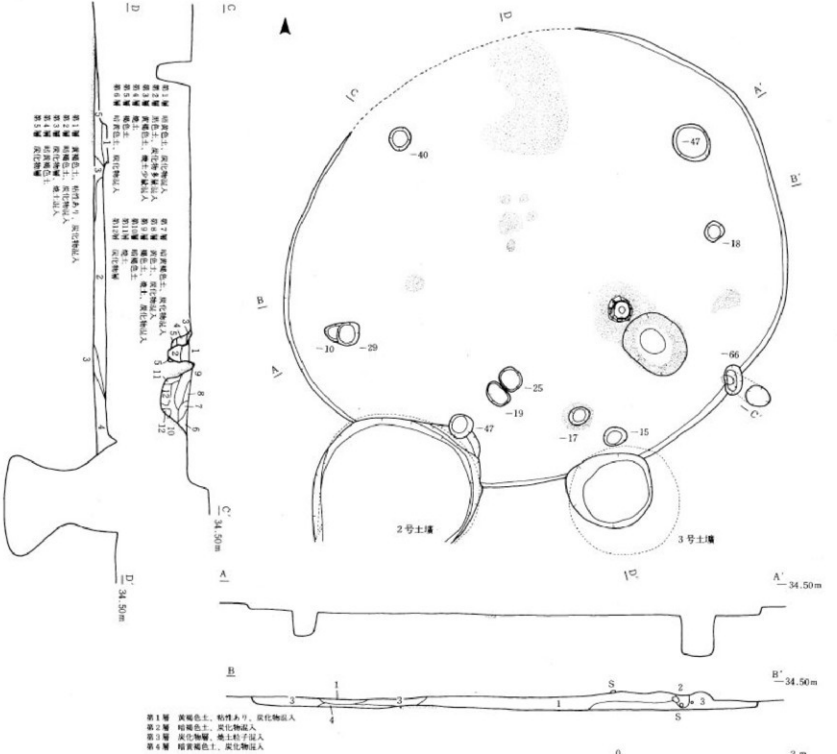
調査期間の都合上完掘には至らず、来年度も継続調査する。従って、本年度は調査区北部の検出遺構及び遺構内出土遺物と、調査区遺物包含層出土遺物についての報告である。

竪穴住居跡

１号住居跡（第６図）

調査区の北側で検出された。

プランは長軸5.9m、短軸5.1mの精円形を呈し、２号・３号土壙に切られている。確認面からの



第1層　黄褐色土、粘性あり、炭化物混入
第2層　暗褐色土、炭化物混入
第3層　炭化物層、地土粒子混入
第4層　暗黄褐色土、炭化物混入

第6図　1号住居跡

深さは10cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは11個検出され、主柱穴は深さ40cm以上の3個である。炉は土器埋設部、掘り込み部からなる。土器埋設部は底部を欠く深鉢形土器を埋設し、周辺は強く火熱を受けて赤変している。掘り込み部は側面が火熱を受けて赤変しているが、底面は火熱を受けていない。床はほぼ平坦で堅いが、住居中央部は特に堅い。また、火熱を受けて赤変している部分も数箇所認められた。

出土遺物

土器（第10図1～3、第11図6～14）

3は炉埋設土器、6は炉掘り込み部覆土、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を有するもの、集脈状文を施すもの、地文のみのものである。1は頸部がすぼむ小形の土器で、口縁部が欠損する。地文はLR単節斜縄文（縦位回転）である。2は深鉢形土器の下部で、地文はLR単節斜縄文（縦位回転）である。3は口縁部が外反する深鉢形土器である。山形口縁を2ヶ所に配し、この山形口縁の頂部直下には孔が認められる。胴部文様は4単位構成で、「ノ」字状の磨消帯は地文部よりも浮き出るものである。磨消帯は胴部中程でそれぞれ連絡しているが、この部分は「ノ」字状の稜線となっている。また、この下方にはうず巻文が施され、中には刺突文が加飾されている。地文はRL単節斜縄文（縦位回転）である。

石器（第19図1、2、第20図9）

1は掻器である。片面調整により刃部を作り出し、石質は硬質頁岩である。2は削器である。片面調整で、石質は硬質頁岩である。9は石皿状石器である。板状で、全面が磨れている。石質は安山岩である。

2号住居跡（第7図）

調査区の北側で検出された。

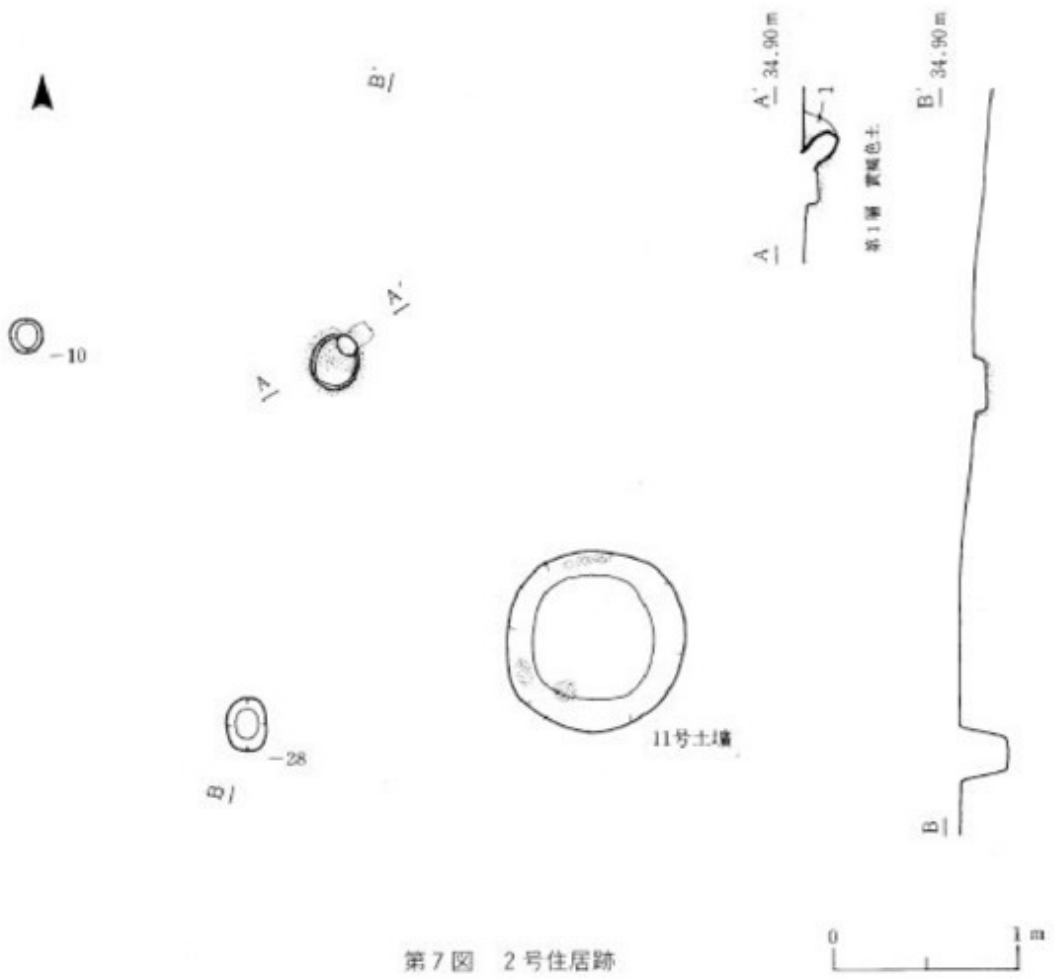
ピットと炉の検出で、プラン及び規模は不明である。ピットは2個のみの検出で、主柱穴は不明である。炉は土器埋設部と掘り込み部からなる。土器埋設部は鉢形土器を斜位に埋設し、周辺が強く火熱を受けて赤変している。掘り込み部は底・側面が火熱を受けて赤変している。床はほぼ平坦である。

出土遺物

土器（第10図4）

4は炉埋設土器である。口縁部が緩く外反する鉢形土器で、平縁口縁である。稜線によって区画された楕円形の磨消文が縦位に施されるもので、4単位構成である。地文はLR単節斜縄文（縦位回転）である。

3号住居跡（第8図）



第7図　2号住居跡

調査区の北側で検出された。

プランは長軸2.4m、短軸2.2mの楕円形を呈し、確認面からの深さは10cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは1個のみの検出である。炉は石囲土器埋設炉である。深鉢形土器の胴部を埋設し、数個の石で囲っている。周辺は火熱を受けて赤変している。床はほぼ平坦で堅いが、住居中央部が特に堅い。

出土遺物

土器（第10図5、第11図15～18）

5は炉埋設土器、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を有するもの、地文のみのものである。5は深鉢形土器の胴部である。「U」字状の磨消帯が胴部中程でそれぞれ連絡する。磨消帯は沈線

区画の部分と沈線と刺突文で区画する部分とが認められる。また、胴部中程には刺突文が加飾されている。

石器（第20図10、11）

10、11はくぼみ石で、いずれも両面にくぼみ部をもつものである。

竪穴遺構

1号竪穴遺構（第9図）

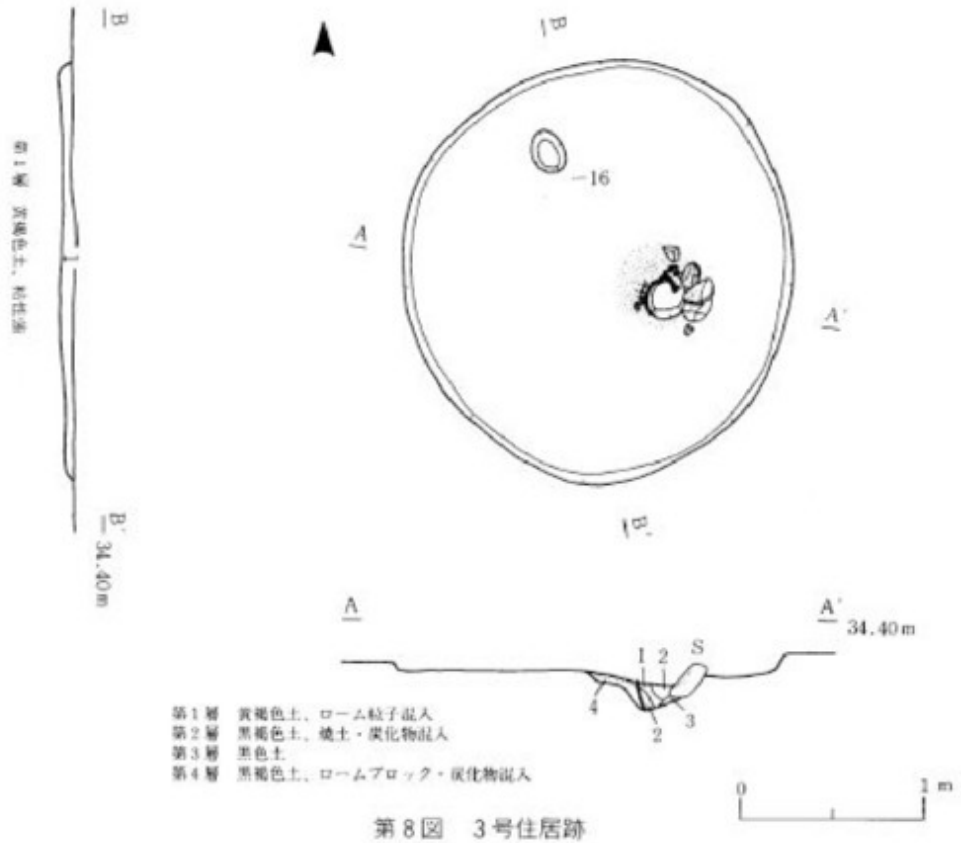
調査区の北側で検出された。

プランは長軸2.3m、短軸2.1mの楕円形を呈し、確認面からの深さは30cmで、壁は緩く立ち上がる。ピットは1個のみの検出である。底面は丸みがあり、西側には段が付く。

出土遺物

土器（第11図19～34）

全て覆土出土である。沈線区画の磨消帯を有するもの、葉脈状文を施すもの、地文のみのもので



第8図　3号住居跡

ある。31～34は底部で、31は網代痕、32～34は笹葉痕である。

土製品（第23図１、２）

１、２は再利用土製品である。土器片を再利用したもので、円形ないしは楕円形を呈するものである。

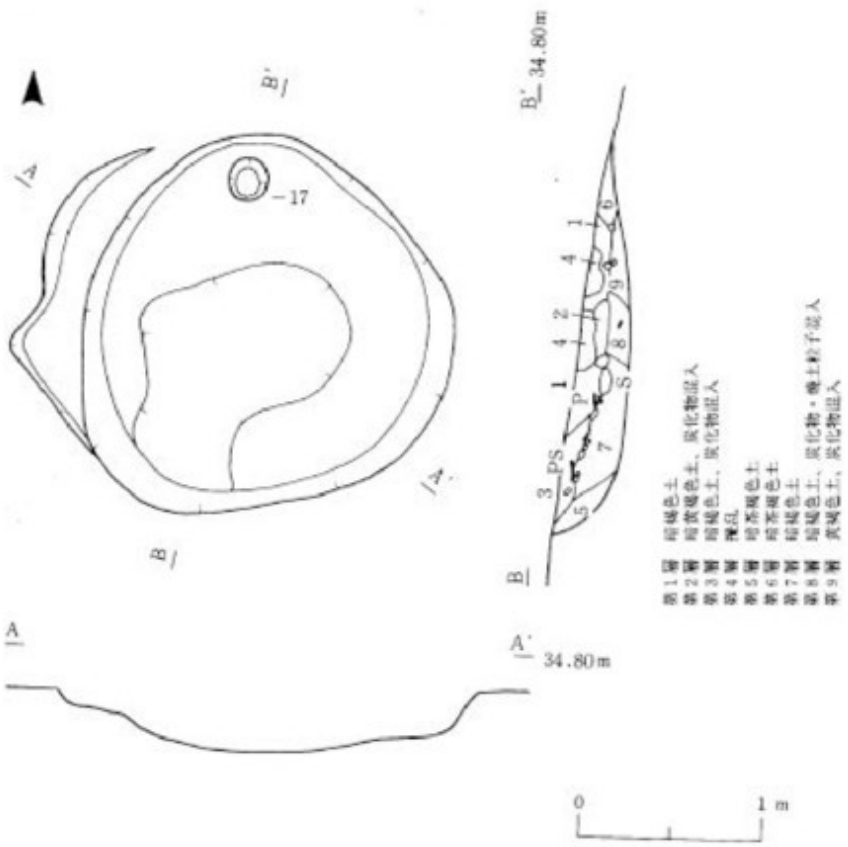
石器（第19図３、第20図12、13）

３は削器である。片面調整で、石質は硬質頁岩である。12、13は磨石である。13は４面が磨れているもので、柱状をなす。

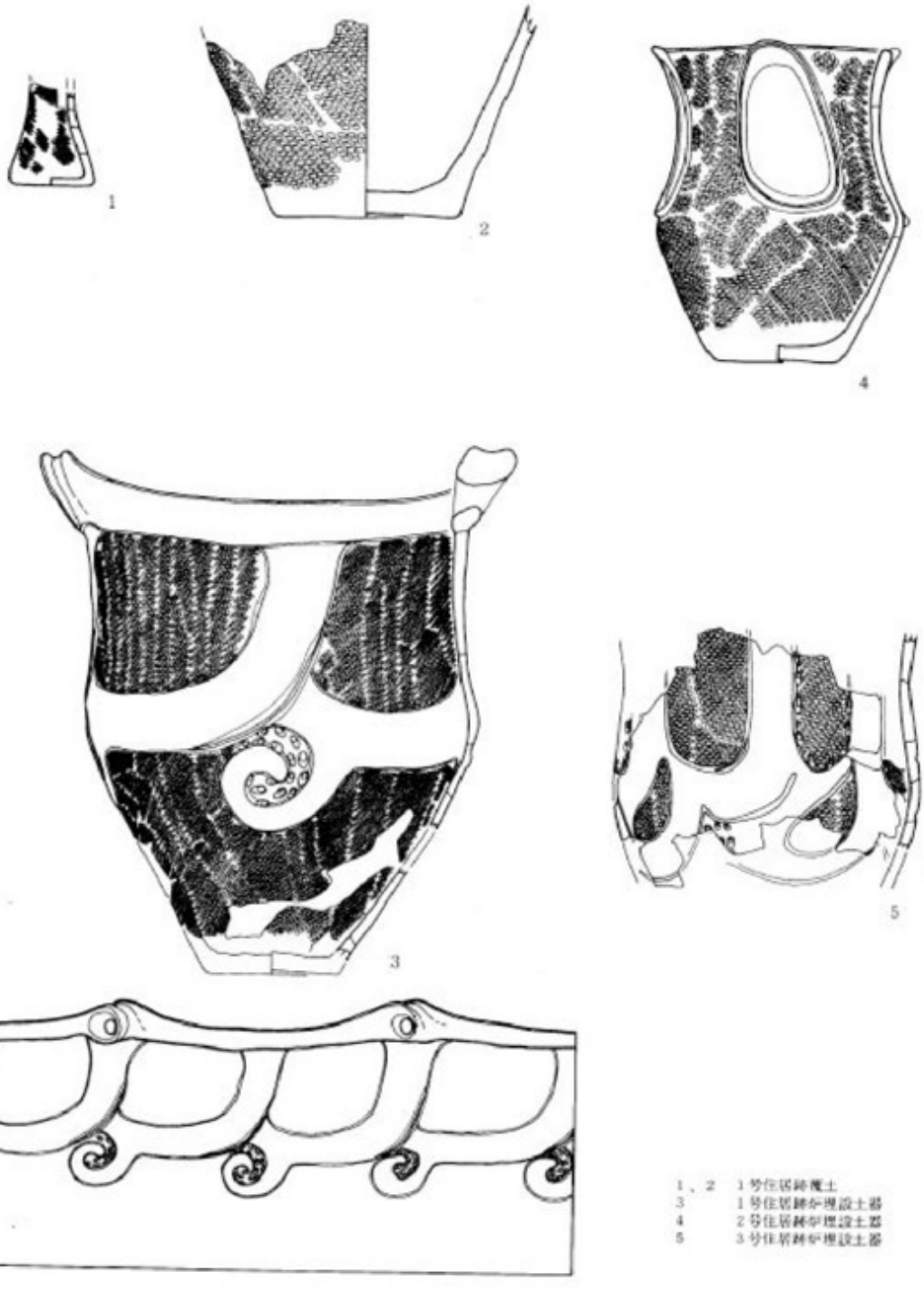
焼土遺構（第17図）

調査区の北側で検出された。

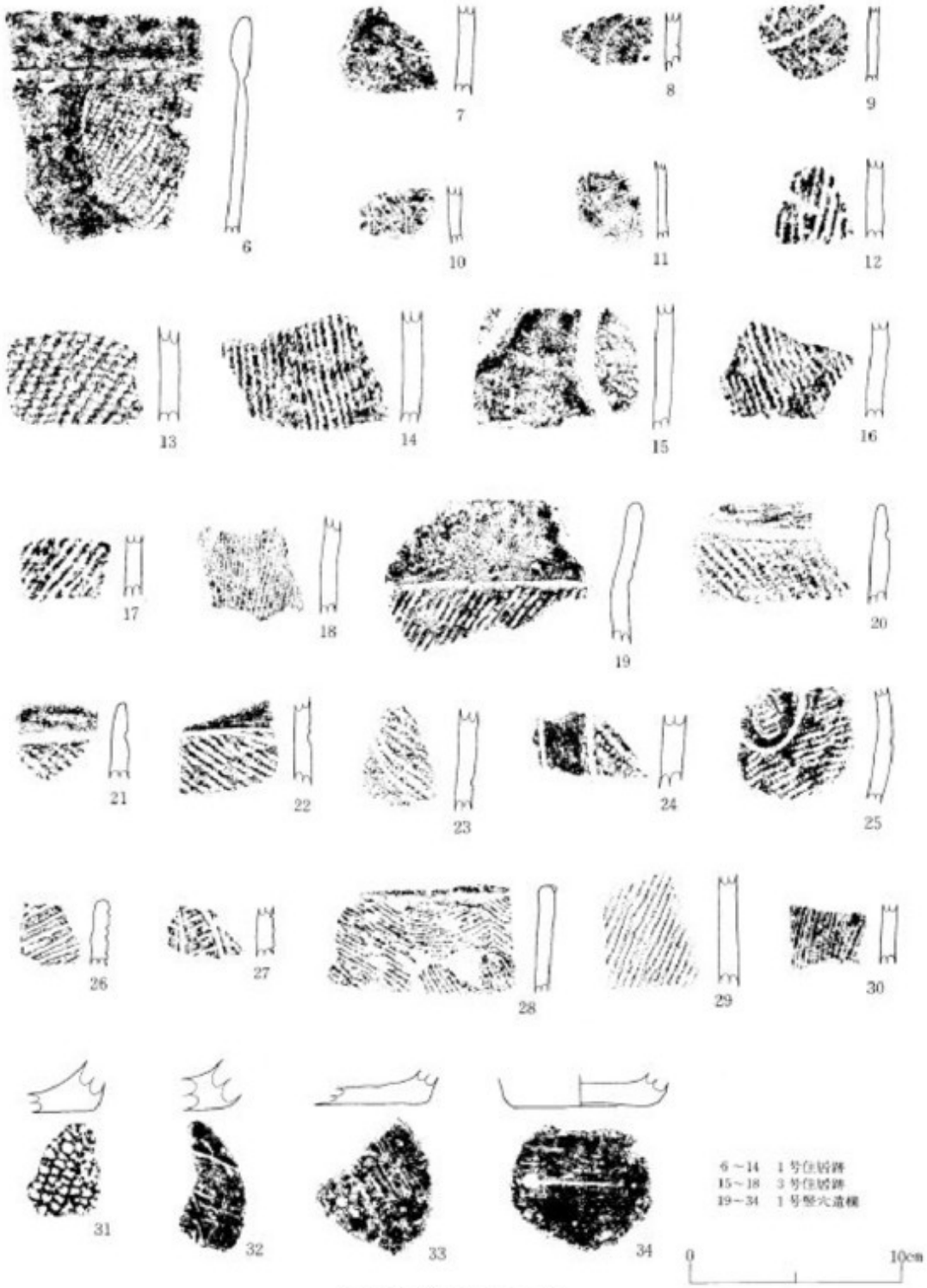
６基検出され、全てローム面での確認である。焼痕は径35～85cmの円形及び楕円形を呈し、強く火熱を受けている。



第９図　１号竪穴遺構



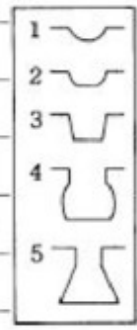
第10図　遺構内出土土器

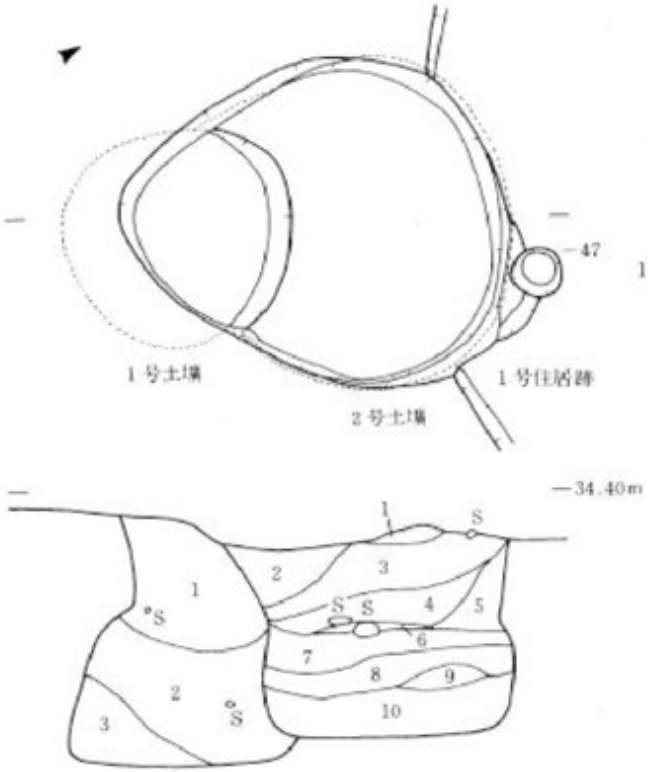


第11図　遺構内出土土器

土 壙 一 覧 表

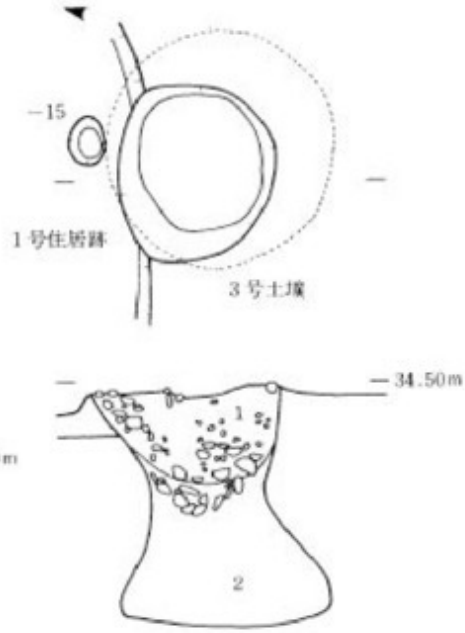
番号	規模(cm) 長軸	短軸	深さ	平面形	断面形	出土遺物
1	推定100	推定70	138	楕円形	5	第19図4（掻器）
2	190	推定160	110	楕円形	4	第18図36、37(縄文)、第19図5（ヘラ状石器）
3	100	85	130	楕円形	5	第18図38、39(縄文)、第20図14(石皿状石器)
4	112	55	15	楕円形	1	
5	105	96	35	楕円形	3	第18図40(縄文)、第19図6（石鏃）
6	146	123	120	楕円形	5	第18図41～44(縄文)
7	83	63	25	楕円形	2	
8	50		34	円形	3	第16図35、第18図45、46(縄文)
9	170	163	83	楕円形	3	
10	143	123	150	楕円形	4	第18図47～57(縄文中期末)
11	103	95	33	楕円形	1	第18図58(縄文)
12	120	108	120	楕円形	5	第19図7（削器）
13	172	171	147	楕円形	4	
14	83	70	130	楕円形	5	
15	100	86	25	楕円形	2	
16	90	73	18	楕円形	2	
17	138	83	12	楕円形	2	
18	148	83	39	楕円形	3	
19	56		16	円形	1	
20	95	82	45	楕円形	2	第18図59、60(縄文)、第19図8（石鏃）
21	62		16	円形	1	
22	140	112	15	楕円形	2	第18図61～65(縄文)



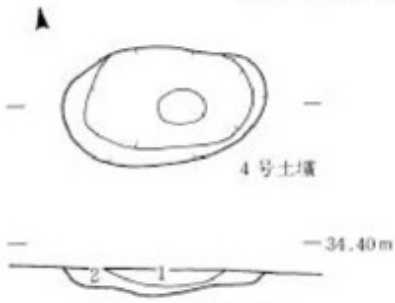


第1層　暗黄褐色土、炭化物・2～5cmの礫多量混入
第2層　暗黄褐色土、炭化物・2～5cmの礫多量混入、第1層よりやや軟質
第3層　黄褐色土

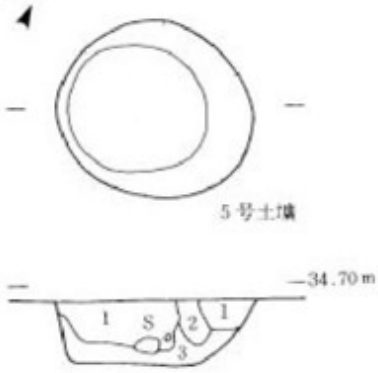
第1層　暗褐色土、2～3cmの礫混入
第2層　暗黄色土、2～3cmの礫混入
第3層　黄褐色土、2～3cmの礫・砂粒・炭化物混入
第4層　暗黄褐色土、炭化物少量混入
第5層　極暗黄褐色土、炭化物少量混入
第6層　焼土
第7層　礫層、2～10cmの礫多量混入
第8層　黄色土、炭化物混入
第9層　暗黄色土、炭化物混入
第10層　暗黄褐色土、炭化物混入



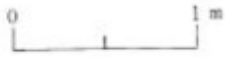
第1層　暗黄色土、2～15cmの礫多量混入
第2層　暗黄褐土、第1層より褐色味あり、上層に2～15cmの礫多量混入



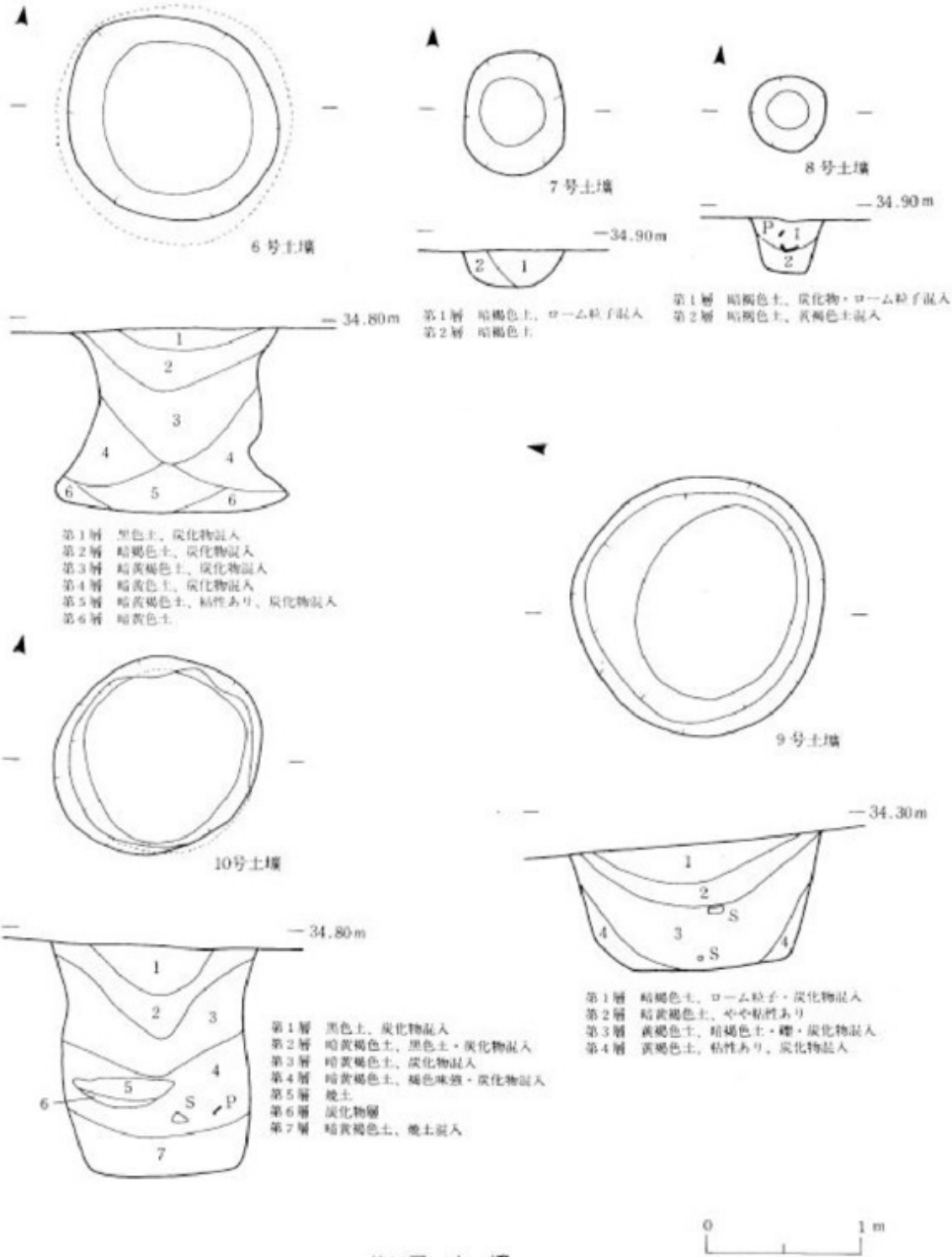
第1層　黒色土、炭化物混入
第2層　暗黄褐色土



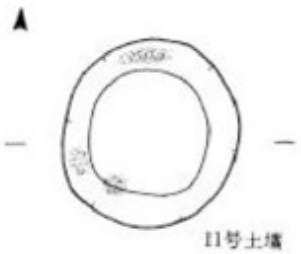
第1層　暗褐色土、炭化物混入
第2層　黒色土
第3層　暗黄褐色土、炭化物混入



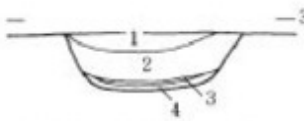
第12図　土　壙


6号土壙
34.80m
1
2
3
4
4
6
5
6
第1層　黒色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土、炭化物混入
第3層　暗黄褐色土、炭化物混入
第4層　暗黄色土、炭化物混入
第5層　暗黄褐色土、粘性あり、炭化物混入
第6層　暗黄色土
7号土壙
34.90m
2
1
第1層　暗褐色土、ローム粒子混入
第2層　暗褐色土
8号土壙
34.90m
P
1
2
第1層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第2層　暗褐色土、黄褐色土混入
9号土壙
34.30m
1
2
S
4
3
S
4
第1層　暗褐色土、ローム粒子・炭化物混入
第2層　暗黄褐色土、やや粘性あり
第3層　黄褐色土、暗褐色土・礫・炭化物混入
第4層　黄褐色土、粘性あり、炭化物混入
10号土壙
34.80m
1
2
3
4
5
6
S
P
7
第1層　黒色土、炭化物混入
第2層　暗黄褐色土、黒色土・炭化物混入
第3層　暗黄褐色土、炭化物混入
第4層　暗黄褐色土、褐色味強・炭化物混入
第5層　焼土
第6層　炭化物層
第7層　暗黄褐色土、焼土混入
0
1 m

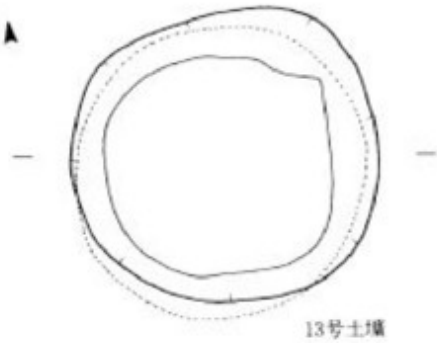
第13図　土　壙



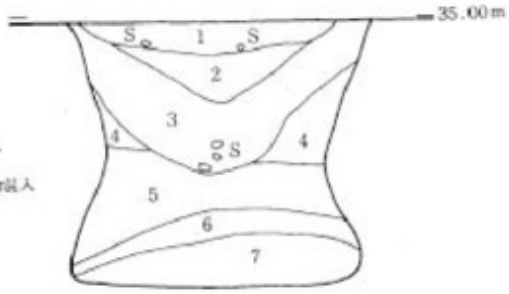
11号土壙



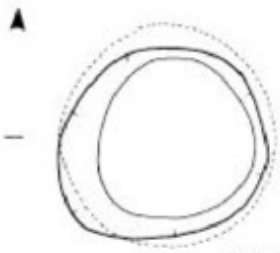
第1層　黒色土、炭化物混入
第2層　暗黄褐色土、炭化物混入
第3層　焼土
第4層　暗黄色土



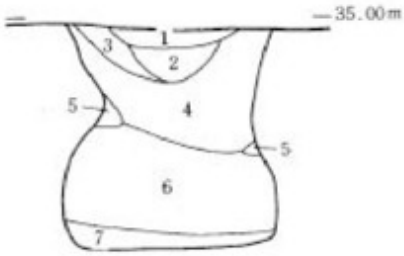
13号土壙



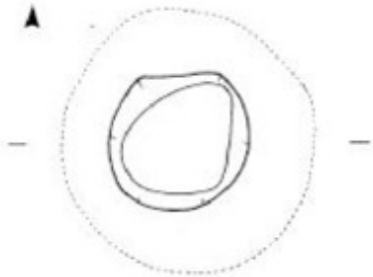
第1層　暗褐色土、ローム・炭化物混入
第2層　黒色土、ローム混入
第3層　暗黄褐色土、焼土粒子・炭化物混入
第4層　暗黄褐色土
第5層　黄褐色土
第6層　暗黄褐色土、第4層より暗い
第7層　黄褐色土、粘性強



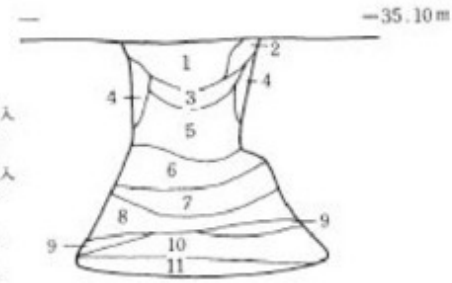
12号土壙



第1層　暗黄褐色土、炭化物混入
第2層　黒色土、炭化物混入
第3層　暗黄褐色土、炭化物混入
第4層　暗黄色土、炭化物混入
第5層　ローム
第6層　暗黄褐色土、炭化物混入
第7層　暗黄色土、炭化物混入

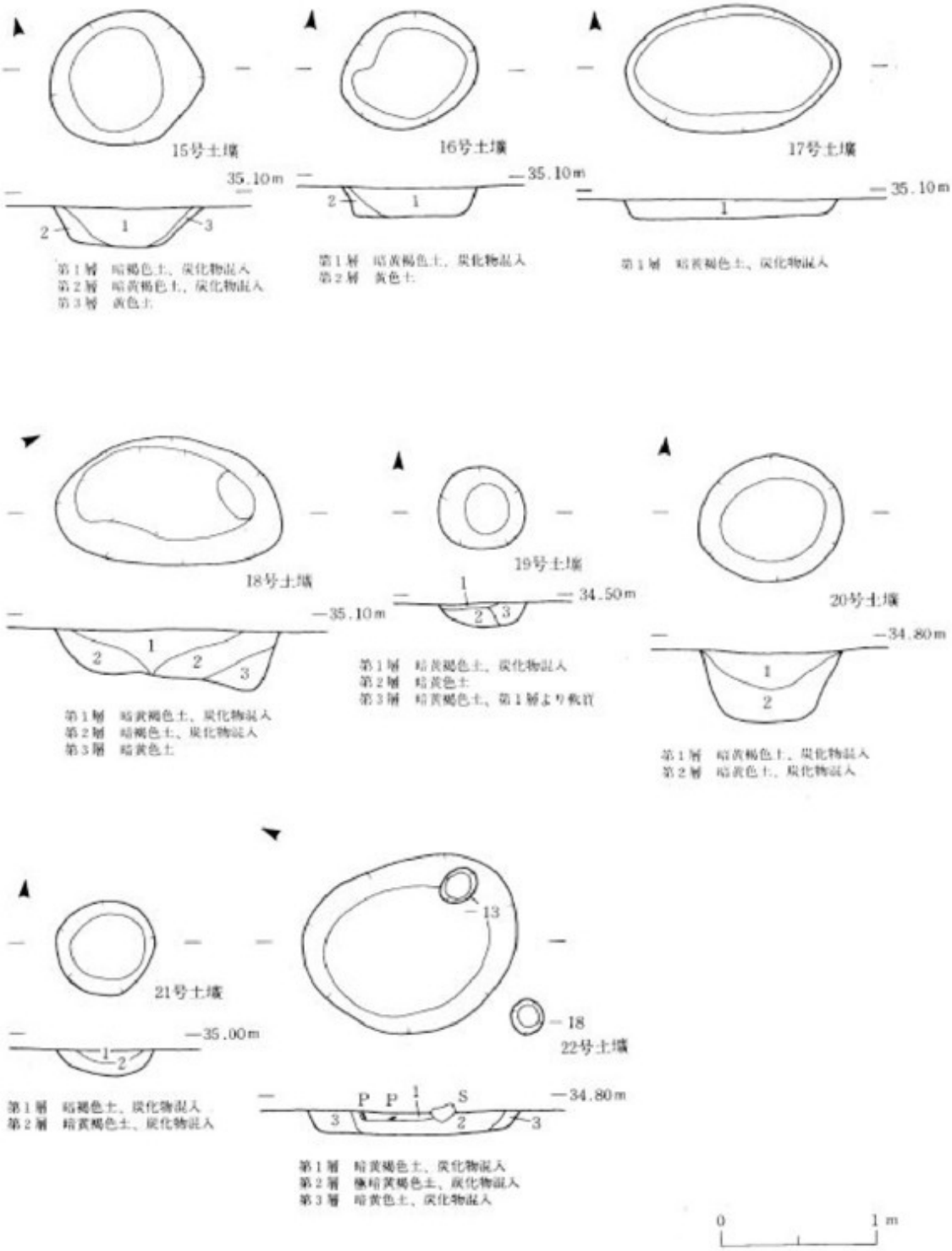


14号土壙



第1層　黒色土、炭化物混入
第2層　暗黄褐色土、炭化物混入
第3層　暗黄色土、炭化物混入
第4層　黄色土、炭化物混入
第5層　暗黄褐色土、炭化物混入
第6層　暗褐色土、炭化物混入
第7層　暗黄褐色土
第8層　黒褐色土、炭化物混入
第9層　黄褐色土
第10層　黒褐色土、炭化物混入
第11層　黄褐色土、粘性強

第14図　土　壙

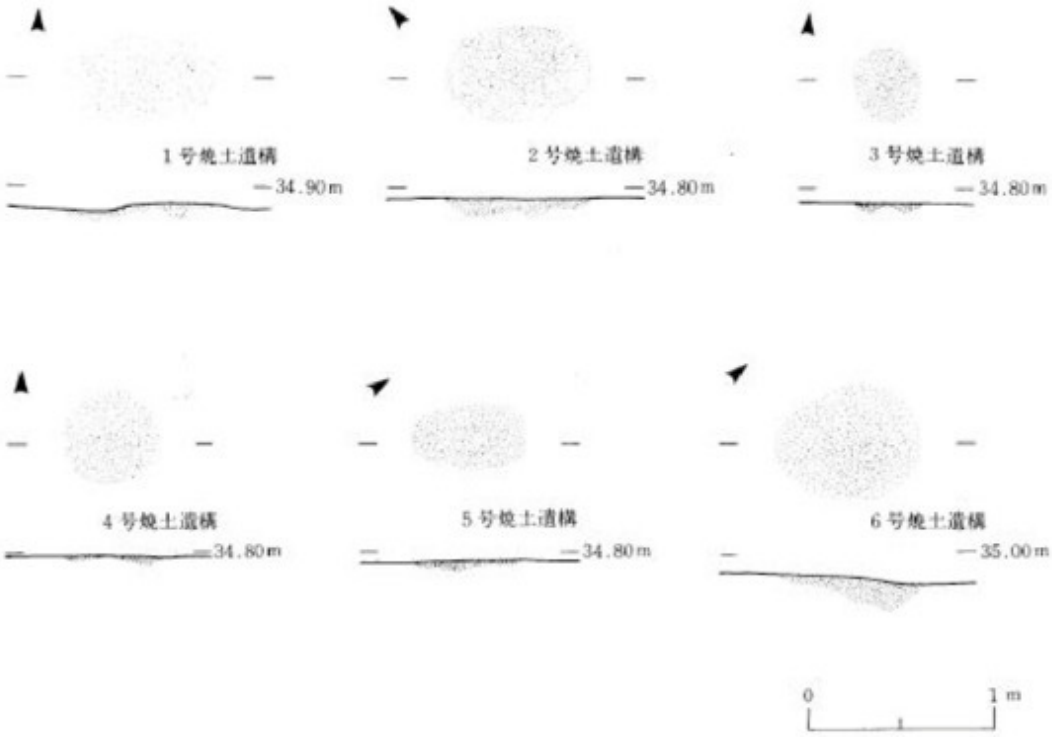

15号土壙
35.10m
2
1
3
第1層 暗褐色土、炭化物混入
第2層 暗黄褐色土、炭化物混入
第3層 黄色土
16号土壙
35.10m
2
1
第1層 暗黄褐色土、炭化物混入
第2層 黄色土
17号土壙
35.10m
1
第1層 暗黄褐色土、炭化物混入
18号土壙
35.10m
2
1
2
3
第1層 暗黄褐色土、炭化物混入
第2層 暗褐色土、炭化物混入
第3層 暗黄色土
19号土壙
34.50m
1
2
3
第1層 暗黄褐色土、炭化物混入
第2層 暗黄色土
第3層 暗黄褐色土、第1層より軟質
20号土壙
34.80m
1
2
第1層 暗黄褐色土、炭化物混入
第2層 暗黄色土、炭化物混入
21号土壙
35.00m
1
2
第1層 暗褐色土、炭化物混入
第2層 暗黄褐色土、炭化物混入
13
18
22号土壙
P P 1 S
34.80m
3
2
3
第1層 暗黄褐色土、炭化物混入
第2層 極暗黄褐色土、炭化物混入
第3層 暗黄色土、炭化物混入
0
1 m

第15図　土　壙

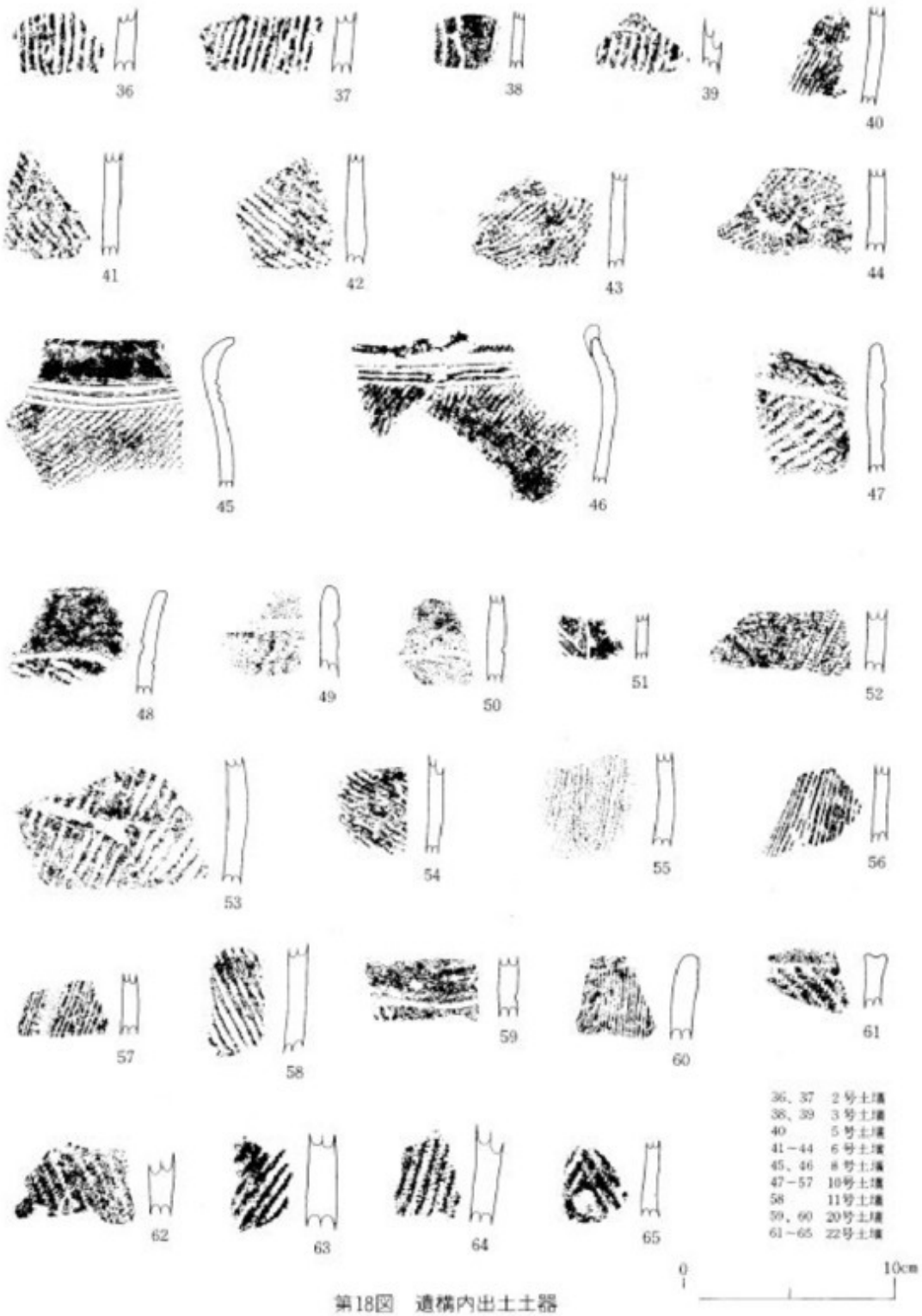
35　8号土壙

0　10cm

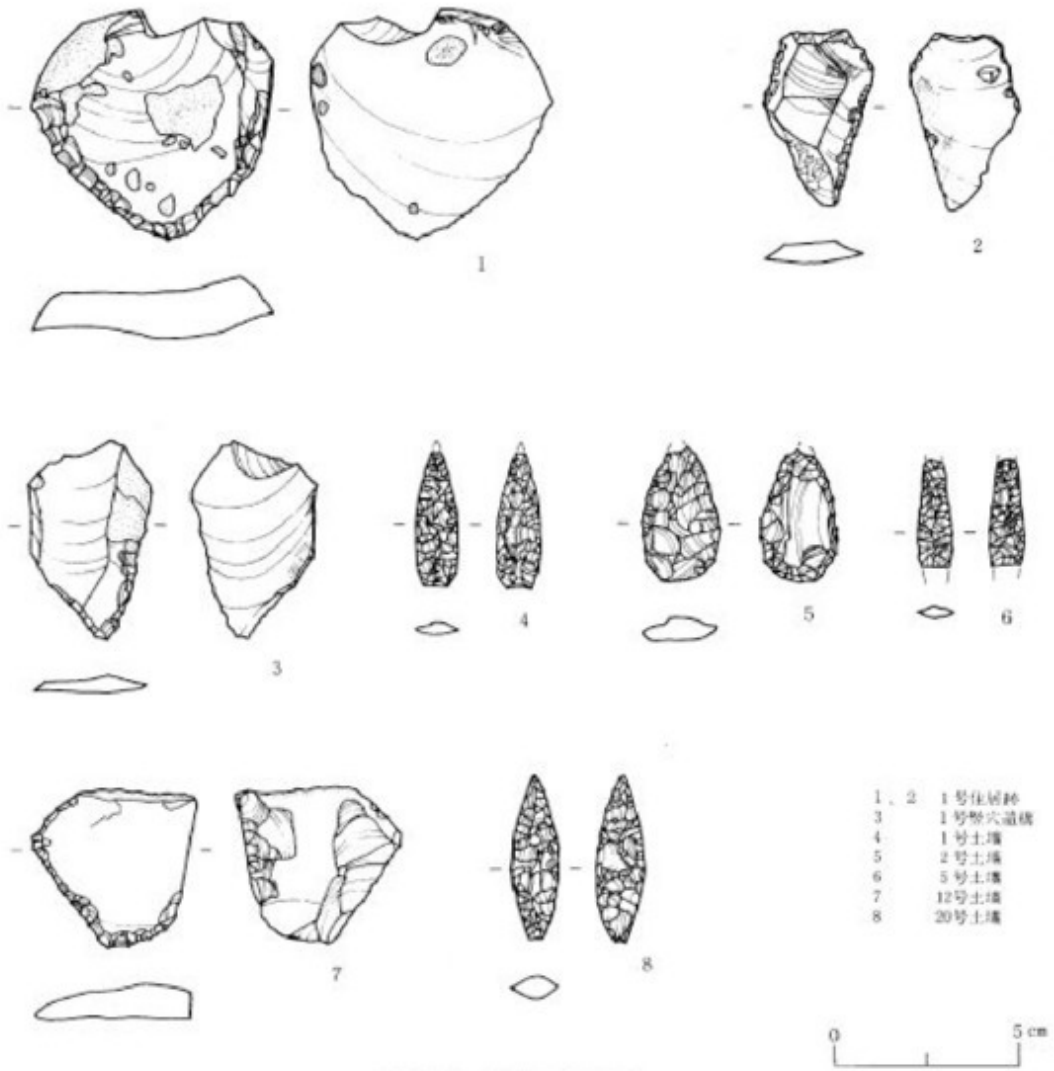
第16図　遺構内出土土器



第17図　焼土遺構



第18図　遺構内出土土器



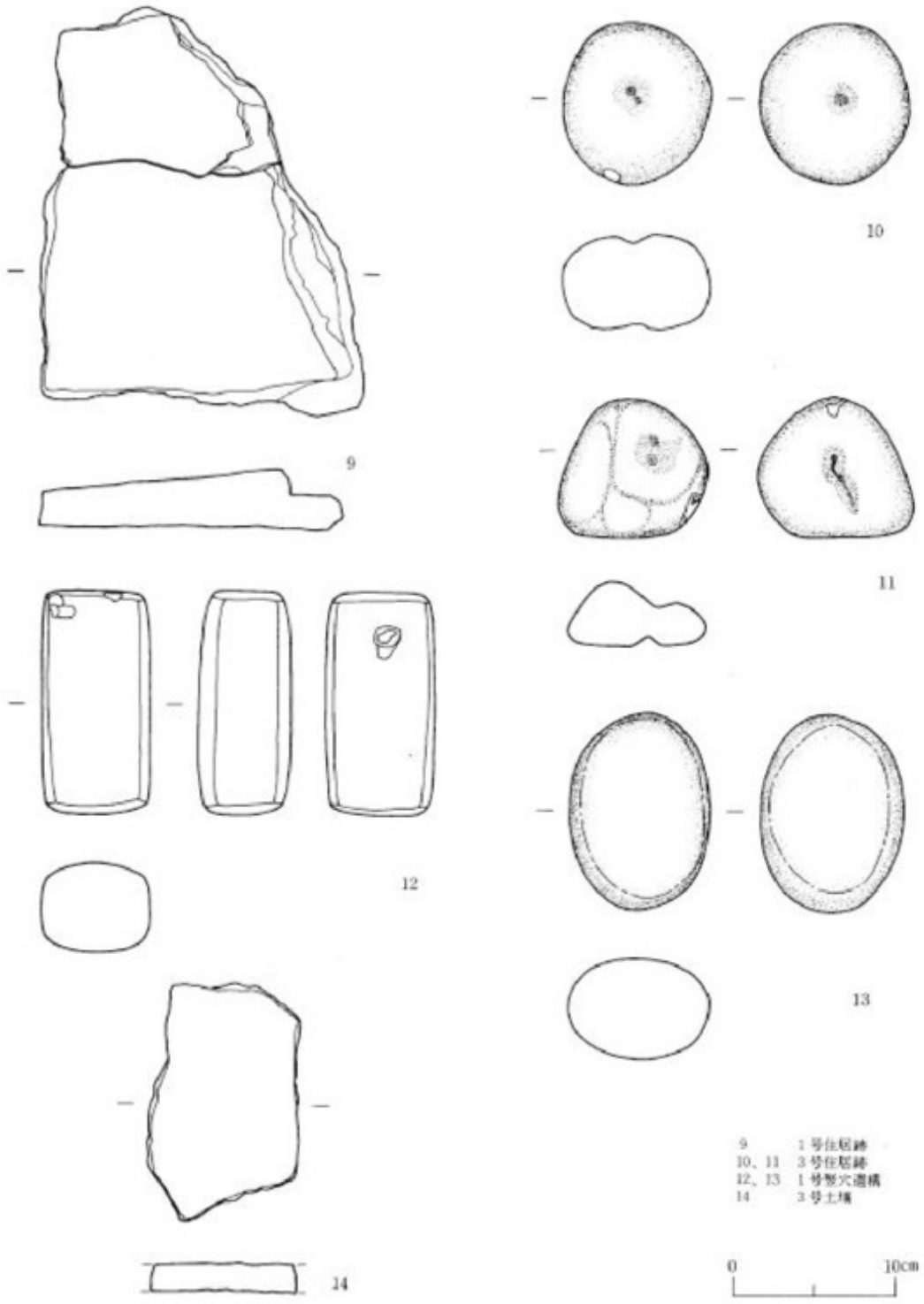
第19図　遺構内出土石器

出土土器

遺構内・外出土土器を施文様により群に大別し、類に細別した。なお、遺物包含層における層位的な区別は認められなかった。

第Ⅰ群土器（第18図61～65、第21図66～94）

縄文地文のものである。全て破片で、深鉢形の器形をなすものと考えられる。色調は褐色もしく



第20図　遺構内出土石器

は黒褐色で、胎土に繊維を含んでいるものも認められる。

1類（66、67）

口縁部に撚紐原体を押圧するものである。いずれも口唇部に刺突状の圧痕を巡らし、地文は0段多条のＬＲ単節斜縄文（横位回転）である。

2類（61）

口唇部に撚紐原体を押圧するものである。撚紐は地文と同一の0段多条のＲＬ原体で、地文は0段多条のＲＬ単節斜縄文（横位回転）である。

3類（68）

内外面に縄文を施すものである。両面とも0段多条のＲＬ単節斜縄文で、外面が縦位回転、内面が横位回転である。

4類（65、69～73）

羽状縄文を施すものである。0段多条の異種原体を用いた非結束羽状縄文である。

5類（62～64、74～87）

0段多条の単節斜縄文を施すものである。62～64、75～79、82～84、86、87は0段多条のＲＬ単節斜縄文で、62、76、83、84、86は横位回転、63、64、75、77～79、82、87は縦位回転である。74、80、81、85は0段多条のＬＲ単節斜縄文で、80、81は横位回転、74、85は縦位回転である。

6類（88～93）

単節斜縄文を施すものである。88はＬＲ単節斜縄文（横位回転）で、89～93はＲＬ単節斜縄文（横位回転）である。

7類（94）

底部に縄文を施すものである。0段多条のＲＬ原体を用いている。

第Ⅱ群土器（第10図3～5、第11図6～8、15、19～25、第18図38、47～50、59、第22図95～97）

沈線区画の磨消帯を有するものである。口縁部が磨消無文帯で、胴部地文のものも含めた。

1類（38、95～97）

沈線区画の磨消帯を有するものであるが、磨消帯の幅が狭く縦位方向へ展開するものである。地文は95、96はＲＬ単節斜縄文（縦位回転）、97がＲＬ単節斜縄文（横位回転）である。

2類（3～8、15、23～25、59）

沈線区画の磨消帯を有するものである。磨消帯は「ノ」字状、「Ｊ」字状、「Ｕ」字状、波状等の曲線的なもので、稜線で区画するもの、刺突文を加飾するものもある。深鉢形土器が主体で、口縁部は緩く外反するもの、直立するものが多い。3は口縁部が外反する深鉢形土器である。「ノ」字状の磨消帯が胴部中程でそれぞれ連絡するもので、4単位構成である。4は口縁部が緩く外反する鉢形土器である。稜線によって区画された楕円形の磨消文が縦位に施されるもので、4単位構成

である。6は口縁部が直立する深鉢形土器である。地文はＲＬ単節斜縄文（縦位回転）である。3、5には刺突文が加飾され、3の磨消帯は地文部よりも浮き出るものである。

3類（19～22、47～50）

口縁部が磨消無文帯で、胴部地文のものである。磨消無文帯と地文部の境界である頸部に沈線を巡らすものであるが、土器によっては2類の沈線区画の磨消帯を有するものに含まれるものもあると考えられる。口縁部が緩く外反する深鉢形土器が主体である。

第Ⅲ群土器（第11図9～11、26、27、第18図51、第22図98）

葉脈状文を施すものである。刻線で施文し、鉢形の器形をなすと考えられる。26、98の口縁部は緩く外反する。

第Ⅳ群土器（第10図1、2、第11図12～14、16～18、28～30、第16図35、第18図36、37、39～44、52～58、60、第22図99～108）

地文のみのものを一括した。斜縄文、撚糸文、条痕文を施すものであるが、斜縄文は第Ⅰ群土器と区別されるものである。

1類（28、40、54）

無節斜縄文を施すものである。全てＬｒ無節斜縄文で、28、54は縦位回転、40は横位回転である。全て深鉢形土器と考えられる。

2類（1、2、13、29、35、41～44、52、53、58、99）

単節斜縄文を施すものである。ＬＲ及びＲＬ縄文原体を縦位、横位に回転施文するもので、全て深鉢形土器である。

3類（12、14、16、17、36、37、39、100、101）

撚糸文を施すもので、全て深鉢形土器である。

4類（18、30、55～57、60、102～108）

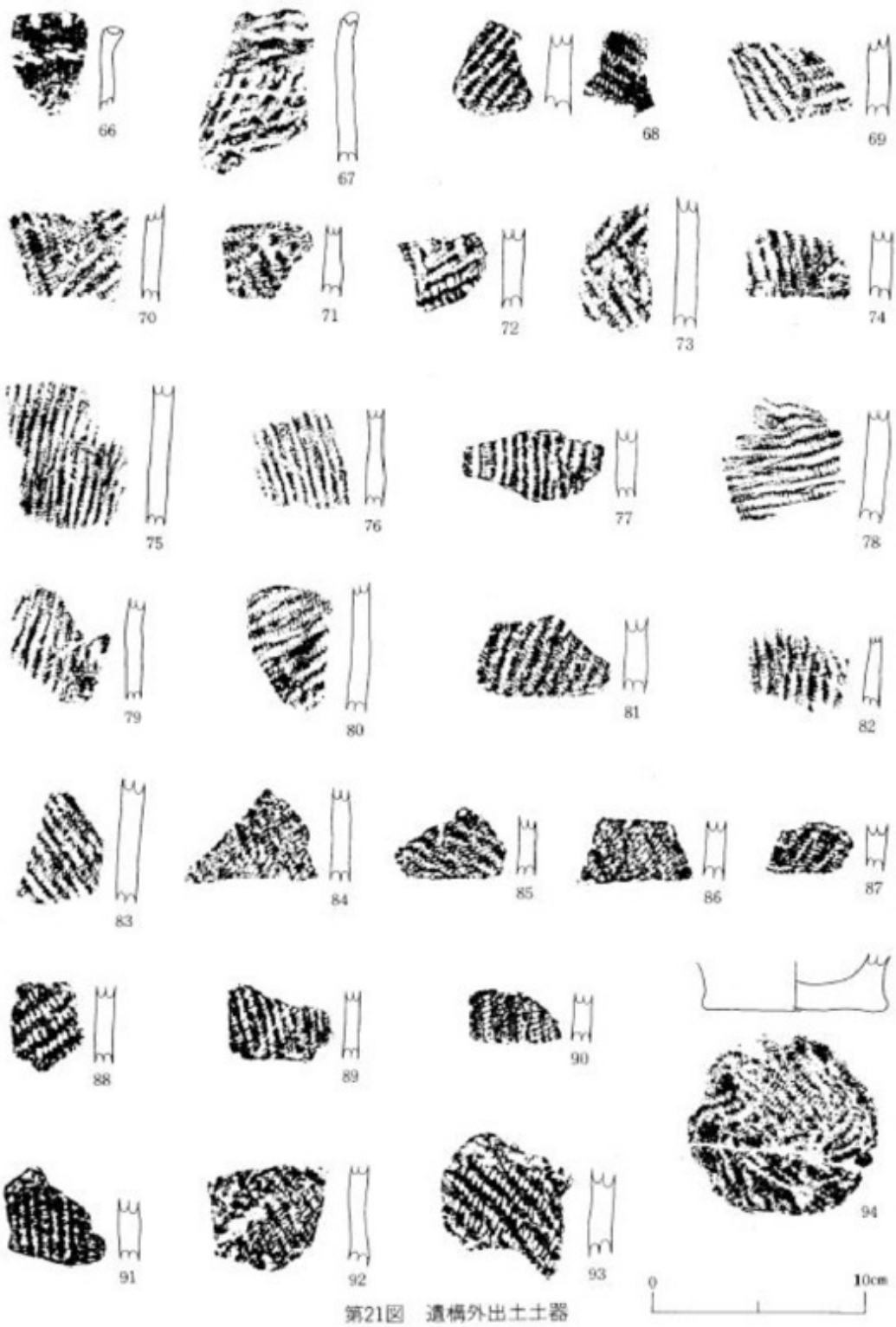
条痕文を施すものである。条痕は器面に対して縦位、斜位に施すもので、直線、曲線、弧状をなす。全て深鉢形土器である。103は口縁部が緩く外反する深鉢形土器で、口縁部が無文帯で頸部に沈線が巡る。

第Ⅴ群土器（第18図46、第22図109～113）

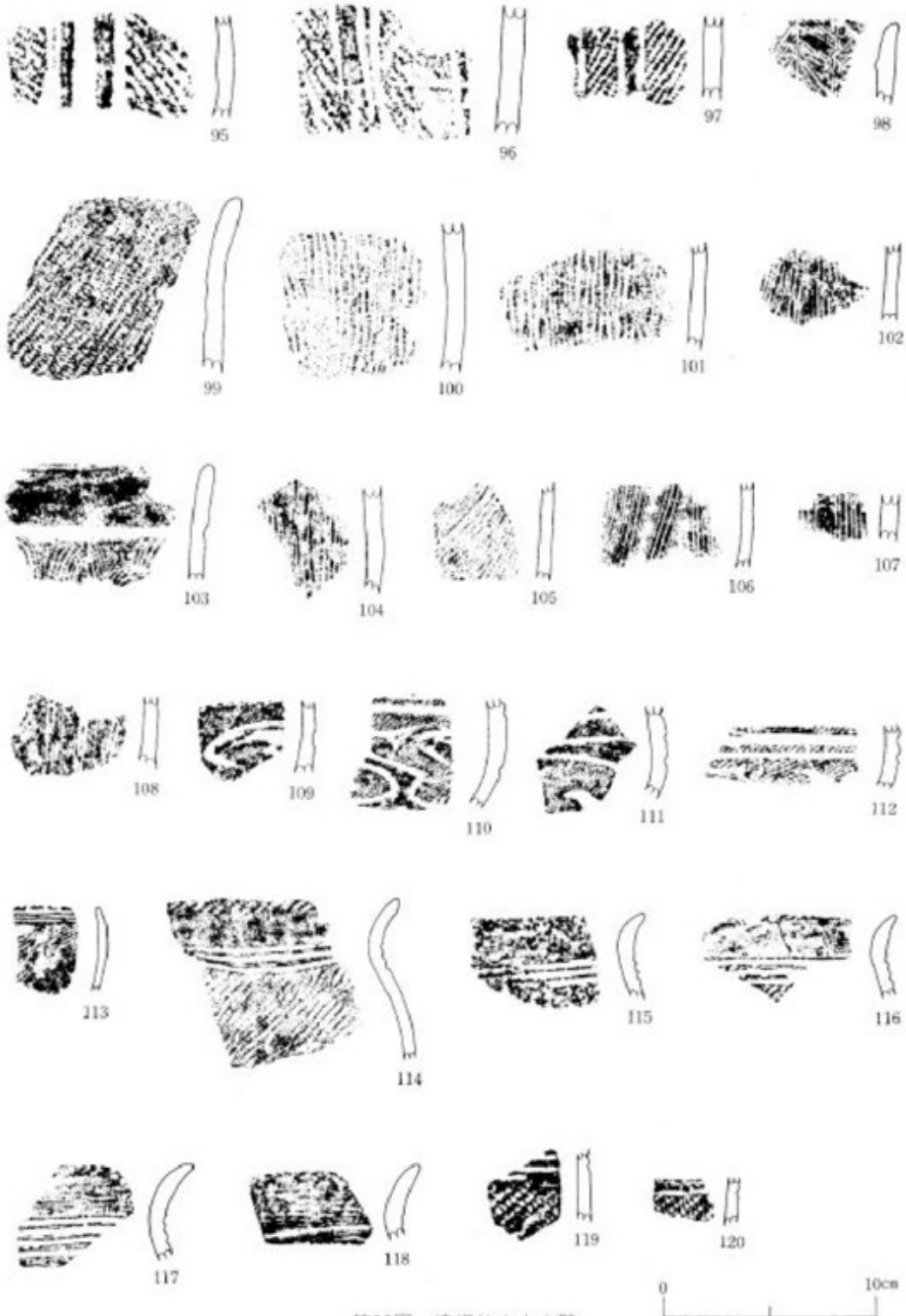
磨消縄文を施すもの、平行沈線を施すものである。

1類（109～112）

口縁部に平行沈線が巡り、体部に雲形文を施すものである。109～112は同一個体と考えられ、体部が湾曲しながら立ち上がる鉢形土器である。地文はＬＲ単節斜縄文（横位回転）である。



第21図　遺構外出土土器



第22図　遺構外出土土器

2類（46、113）

口縁部に平行沈線を巡らし、口唇部に刻目文を施すものである。113は口縁部が内湾する鉢形土器である。46は口縁部が内湾する鉢形土器である。口唇部に2個1対の小突起をもつ。口縁部には3条の平行沈線が巡るが、真中の沈線は小突起下で区切っている。地文はＬＲ単節斜縄文（横位回転）である。

第Ⅵ群土器（第18図45、第22図114～120）

頸部に数条の平行沈線が巡るものである。119、120以外は口縁部が外反する甕形土器で、平縁口縁である。口縁上部に縄文が施され、頸部に数条の平行沈線が巡る。口縁部無文帯に114は縦位に、117、118は横位に刷毛目調整痕が残る。また、114は胴部刷毛目調整後にＬＲ単節斜縄文（横位回転）を施している。119、120は頸部平行沈線下に刷毛目工具による刺突文を施し、刺突文の中には条が認められる。119の胴部には刷毛目調整痕が認められる。

土製品（第23図1～3）

1、2は1号竪穴遺構、3は6号土壙出土である。全て再利用土製品で、土器片を再利用したものである。円形ないしは楕円形を呈するものである。

遺構外出土石器

石鏃（第24図15～29）

15点出土している。有茎のものと無茎のものに分類され、無茎のものが多い。15の基部にはアスファルトが付着し、破損しているものも認められる。石質は全て硬質頁岩である。

石錐（第24図30、31）

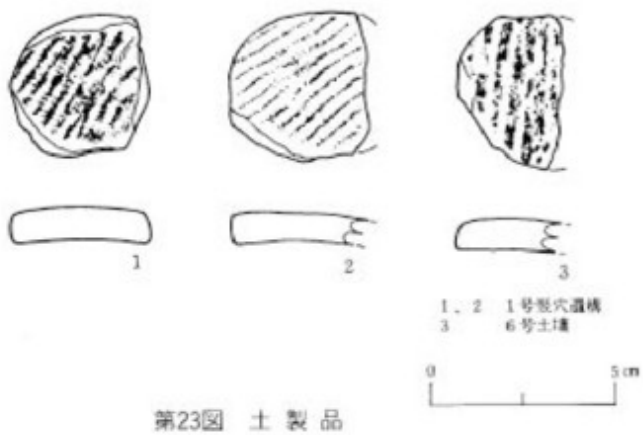
2点出土している。つまみ部を有するもので、錐部は比較的短いものである。石質はいずれも硬質頁岩である。

石匙（第24、25図32～42）

11点出土している。全て縦型で、比較的細身で長身のものが多く、破損しているものも認められる。石質は全て硬質頁岩である。

ヘラ状石器（第25、26図43～57）

15点出土している。平面形は撥



第23図　土製品

形ないしは短冊形を呈するものがほとんどで、両面調整のものが多い。破損しているものも認められ、石質は全て硬質頁岩である。

掻器（第26図58）

片面調整により刃部を作り出し、石質は硬質頁岩である。

磨製石斧（第26図59、60）

２点出土している。いずれも破損品で、刃部形状は不明である。59は小形磨製石斧である。石質はいずれも凝灰岩である。

石錘（第27図61～63）

３点出土している。偏平な自然石の両端を打ち欠いているものである。

くぼみ石（第27図64、65）

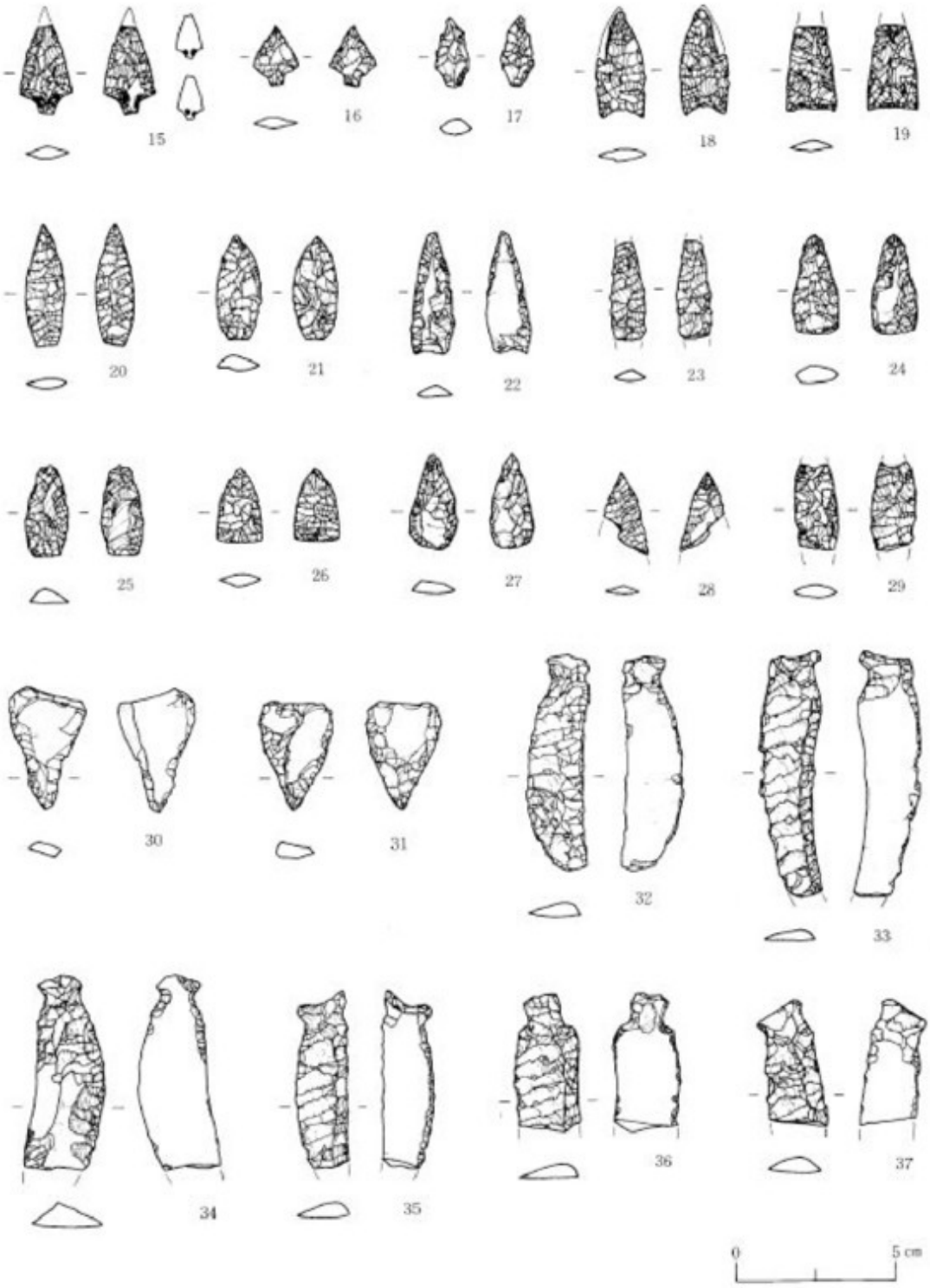
２点出土している。いずれも片面のみにくぼみ部をもつものである。

磨石（第27図66、67）

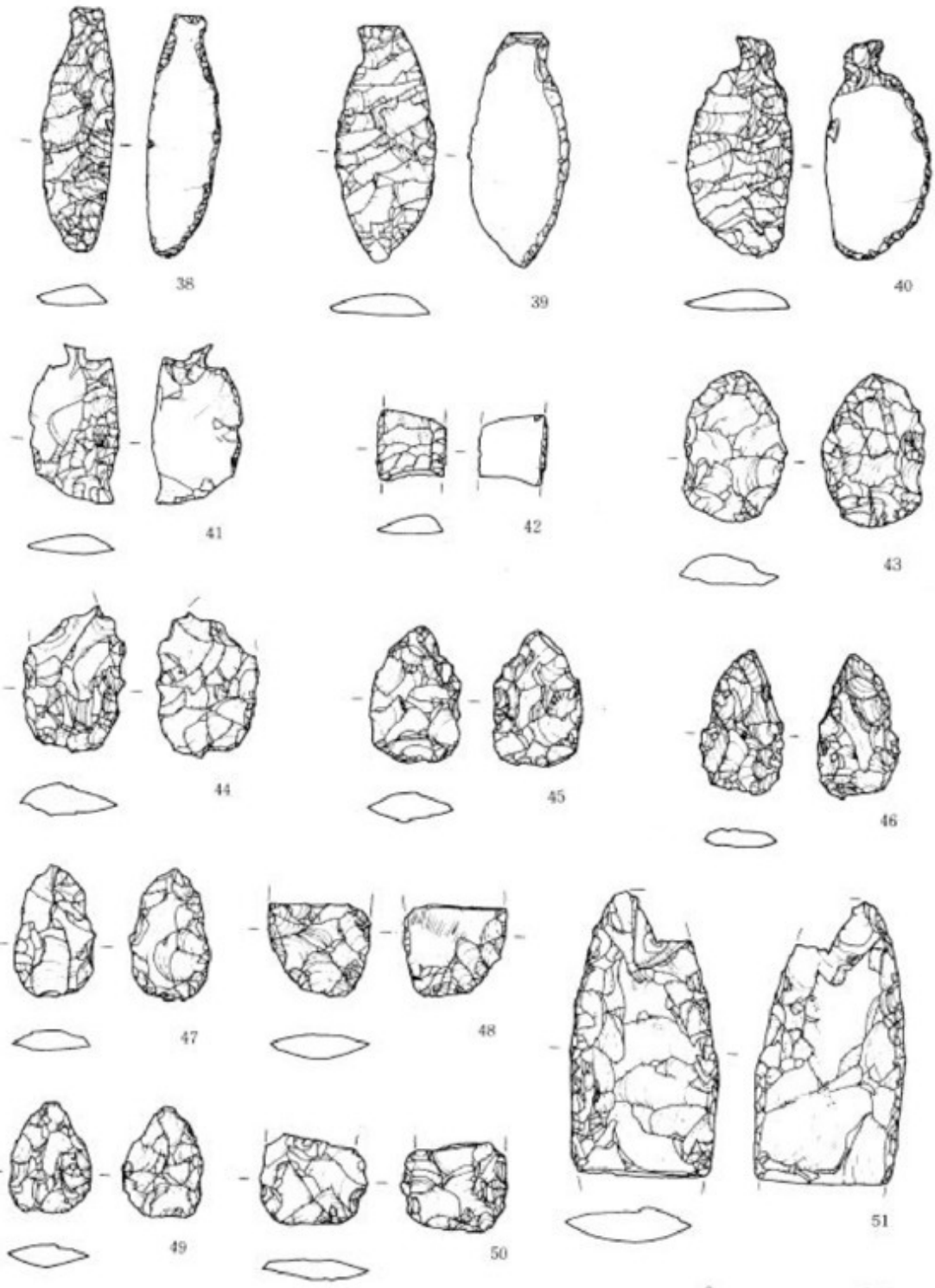
２点出土している。両面が磨かれるもので、比較的偏平なものである。

石皿状石器（第27図68）

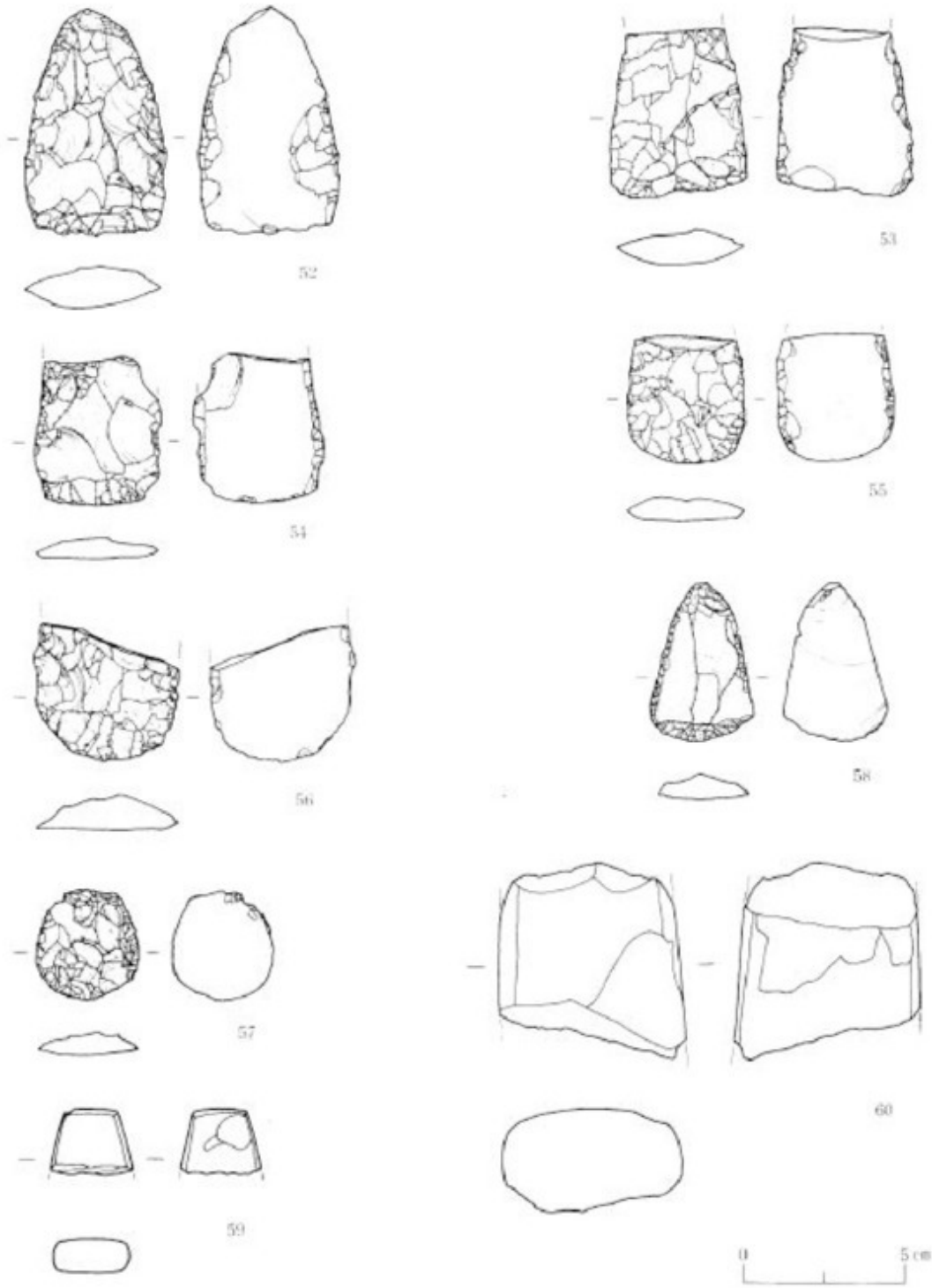
板状で、全面的に良く磨れている。



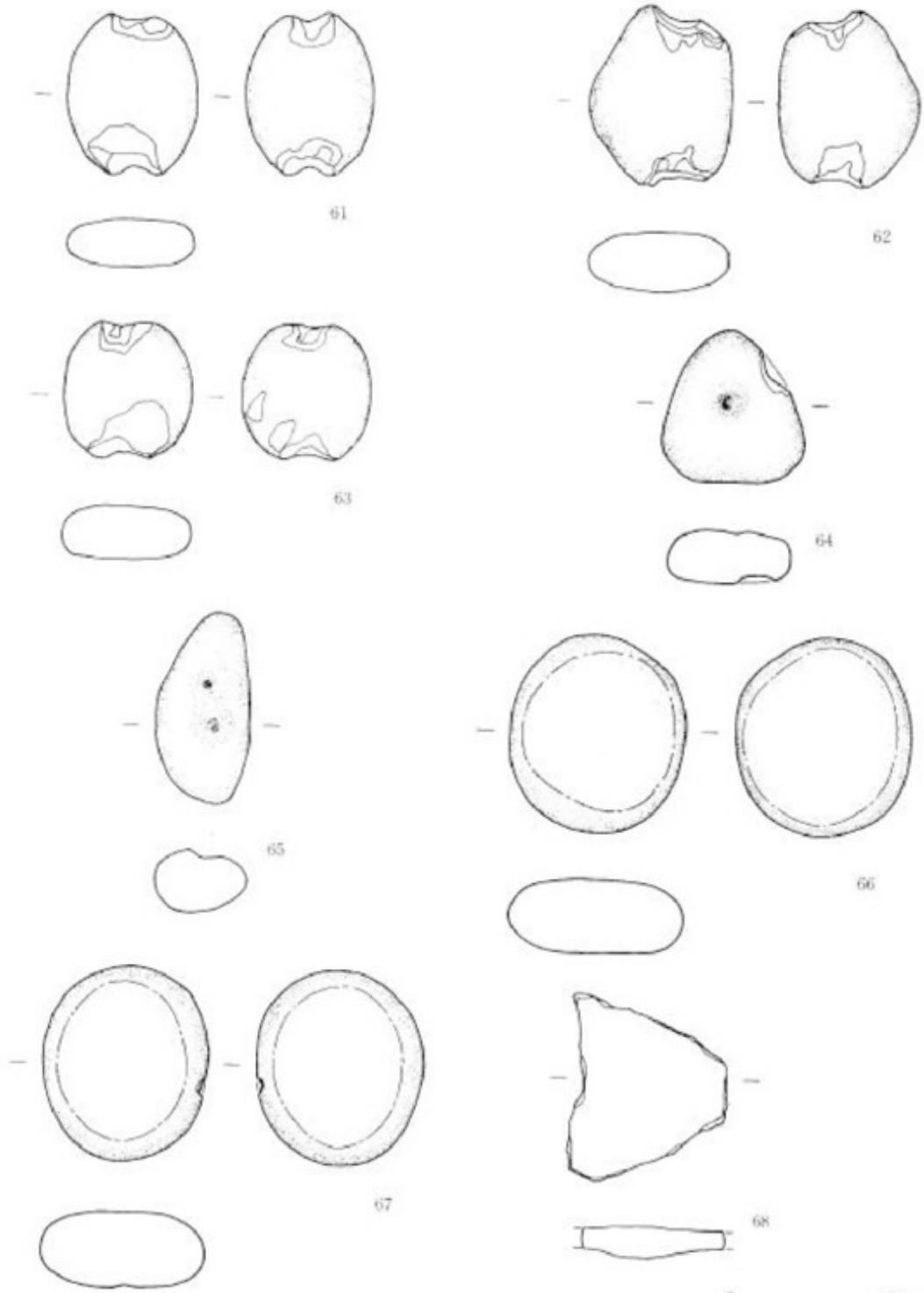
第24図　遺構外出土石器



第25図　遺構外出土石器



第26図　遺構外出土石器



第27図　遺構外出土石器

まとめ

本遺跡は御所野台地の南側、西に面した標高35mの台地縁辺部に位置する。前述のとおり来年度継続調査の予定であり、本年度は調査区の遺物包含層出土遺物と調査区北部の検出遺構及び遺物内出土遺物について述べることとする。なお、旧石器時代については来年度の報告としたい。

検出遺構は、竪穴住居跡３軒、竪穴遺構１基、土壙22基、焼土遺構６基である。竪穴住居跡は縄文時代中期のもので、規模は１号住居跡は長軸5.9m、短軸５mの比較的大形、３号住居跡は長軸2.4m、短軸2.2mの小形で、２号住居跡は不明である。平面形は１号・３号住居跡は楕円形を呈し、２号住居跡は不明である。主柱穴が確認されたのは１号住居跡のみで、３本主柱である。本台地の当該期の主柱穴は４～５個が主体であり、３個のものは少ない。炉は１号・２号住居跡は土器埋設部＋掘り込み部からなる複式炉で、３号住居跡は石囲土器埋設炉である。２号住居跡の炉埋設土器は斜位に埋設し、掘り込み部が小規模であることなど本台地で今までに検出されている複式炉と比較すると特異な形態である。本年度調査を実施した「秋大農場南遺跡」[註1]で１軒確認されたが、検出例が少ないことから今後類例の増加をまって検討する必要がある。本台地の当該期の集落では住居間の切り合いがほとんど認められないのが特徴であり、本遺跡においても重複は認められない。また、拡張、縮小、炉の作り替えなども認められない。ただし、１号住居跡については２号・３号土壙によって切られており、土壙の方が新しい。住居跡の時期については炉埋設土器及び出土遺物から縄文時代中期末葉の大木10式期に位置づけられる。本台地開発計画区域内からは31遺跡確認されているが、当該期の遺跡は20遺跡で他の時期と比較すると突出して多い。大部分の遺跡は台地縁辺部に立地しており、本遺跡も同様の形態であり、住居の数は本年度調査を実施した「秋大農場南遺跡」同様少ない方である。竪穴遺構は１基検出されたが、性格は不明である。出土遺物から住居跡と同時期と考えられる。土壙は22基検出された。22号土壙からは第Ⅰ群土器が出土し、縄文時代前期の可能性も考えられるが、大部分は住居跡の時期に属すると考えられる。

出土遺物は、土器、土製品、石器である。土器は施文様から６群に大別した。第Ⅰ群土器は地文が主体のもので６類に細分した。第Ⅳ群土器とは区別されるもので、完形もしくは復元可能土器はなく、全て破片である。本台地での出土例は少なく、「坂ノ上Ｂ遺跡」[註2]で数点出土しているのみである。本市北西部の「児桜貝塚」[註3]にも数例が認められ、縄文時代前期初頭に位置づけられる。第Ⅱ群土器は本遺跡で主体をなす土器で３類に細分した。沈線区画の磨消帯を有するもの、口縁部無文帯のもので、縄文時代中期末葉の大木10式土器に比定されるものである。１類については幅の狭い磨消帯が縦位に展開するもので、大木９式土器の可能性も考えられる。住居跡の炉埋設土器は全て本群に相当する。第Ⅲ群土器は業脈状文の施されるものである。本台地「坂ノ上Ａ遺跡」[註5]、「下堤Ｆ遺跡」[註5]、「坂ノ上Ｅ遺跡」[註6]、「湯ノ沢Ｄ遺跡」[註7]等で数点ずつ出土している。また、県南の大曲市「太田遺跡」[註8]、平鹿郡大森町「下田遺跡」[註9]でも類例が認められ、縄文時代中期末葉から後期初頭に

位置づけられると考えられる。第Ⅳ群土器は地文のみのもので4類に細分した。無節斜縄文、単節斜縄文、撚糸文、条痕文を施すもので、縄文時代中期末葉から後期初頭に位置づけられると考えられる。第Ⅴ群土器は2類に細分し、縄文時代晩期大洞C$_1$式～A式土器に比定されるものである。第Ⅵ群土器は口縁部が外反する変形土器である。本台地「地蔵田B遺跡(註10)」で多量に出土している。また、本市北部の「梵天長根遺跡(註11)」でも類例が認められ、弥生時代前期に位置づけられる。

註1　「秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書　秋大農場南遺跡」　秋田市教育委員会　1992年3月

註2　「小阿地下堤遺跡坂ノ上遺跡発掘調査報告書」　秋田市教育委員会　1976年3月

註3　「児桜貝塚」　秋田考古学協会　1965年9月

註4　註2に同じ

註5　「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書　下堤F遺跡」　秋田市教育委員会　1985年3月

註6　「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書　坂ノ上E遺跡」　秋田市教育委員会　1984年3月

註7　「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書　湯ノ沢D遺跡」　秋田市教育委員会　1985年3月

註8　「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅸ　太田遺跡」　秋田県文化財調査報告書第207集　秋田県教育委員会　1991年3月

註9　「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅳ　下田遺跡」　秋田県文化財調査報告書第189集　秋田県教育委員会　1990年3月

註10　「秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書　地蔵田B遺跡」　秋田市教育委員会　1986年3月

註11　「梵天長根遺跡　秋田変電所増設に伴う緊急発掘調査報告書」　東北電力株式会社秋田支店　秋田市教育委員会　1991年3月

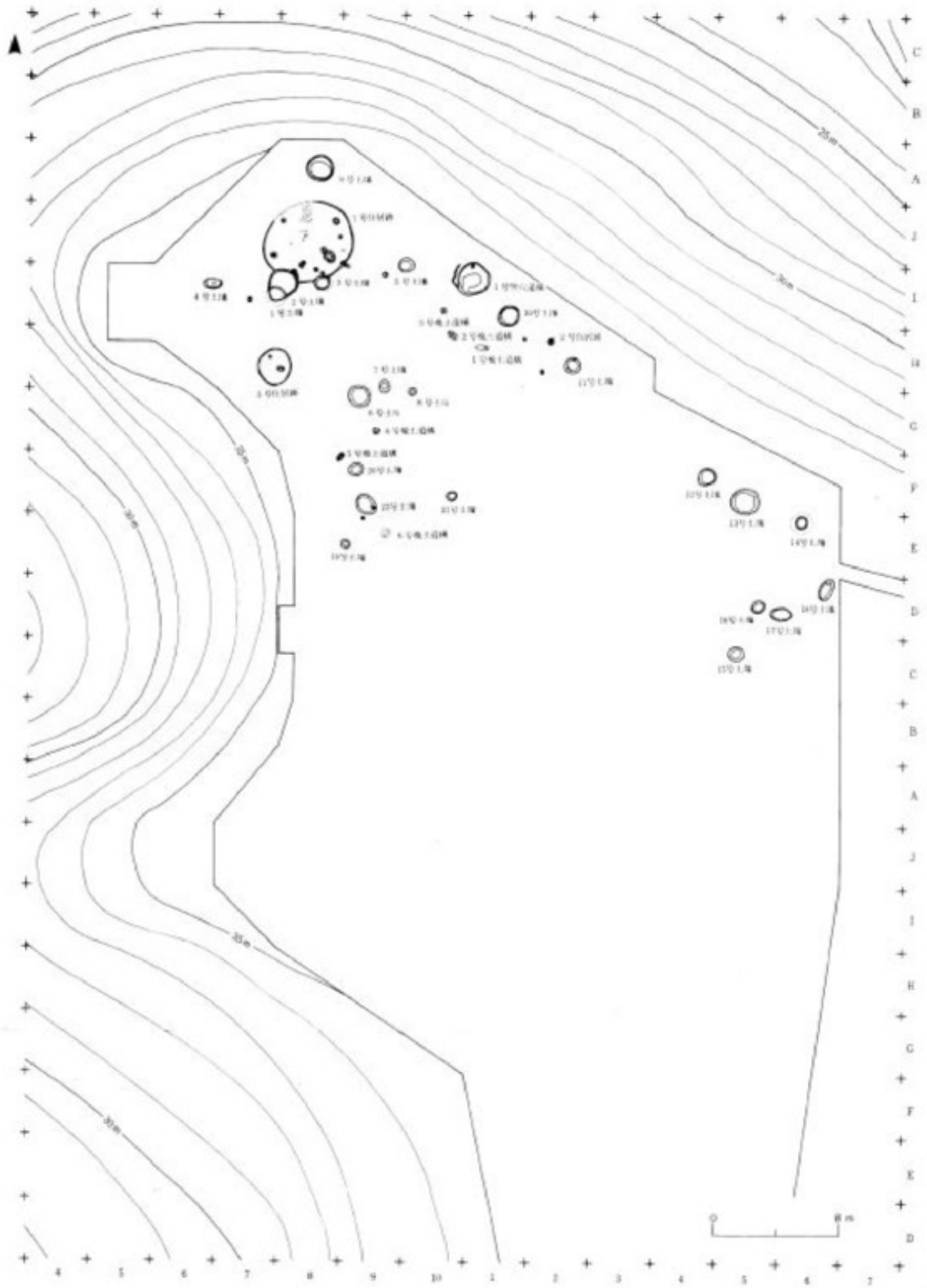
参考文献

秋田県教育委員会：「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅳ　下田谷地遺跡」　秋田県文化財調査報告書第189集　1990年3月

秋田県教育委員会：「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅷ　小出Ⅰ遺跡、小出Ⅱ遺跡」　秋田県文化財調査報告書第206集　1991年3月

秋田県教育委員会：「大砂川地区農免農道整備事業に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　上熊ノ沢遺跡」　秋田県文化財調査報告書第213集　1991年3月

岩手県立博物館：「岩手の土器　県内出土資料の集成」　1982年3月

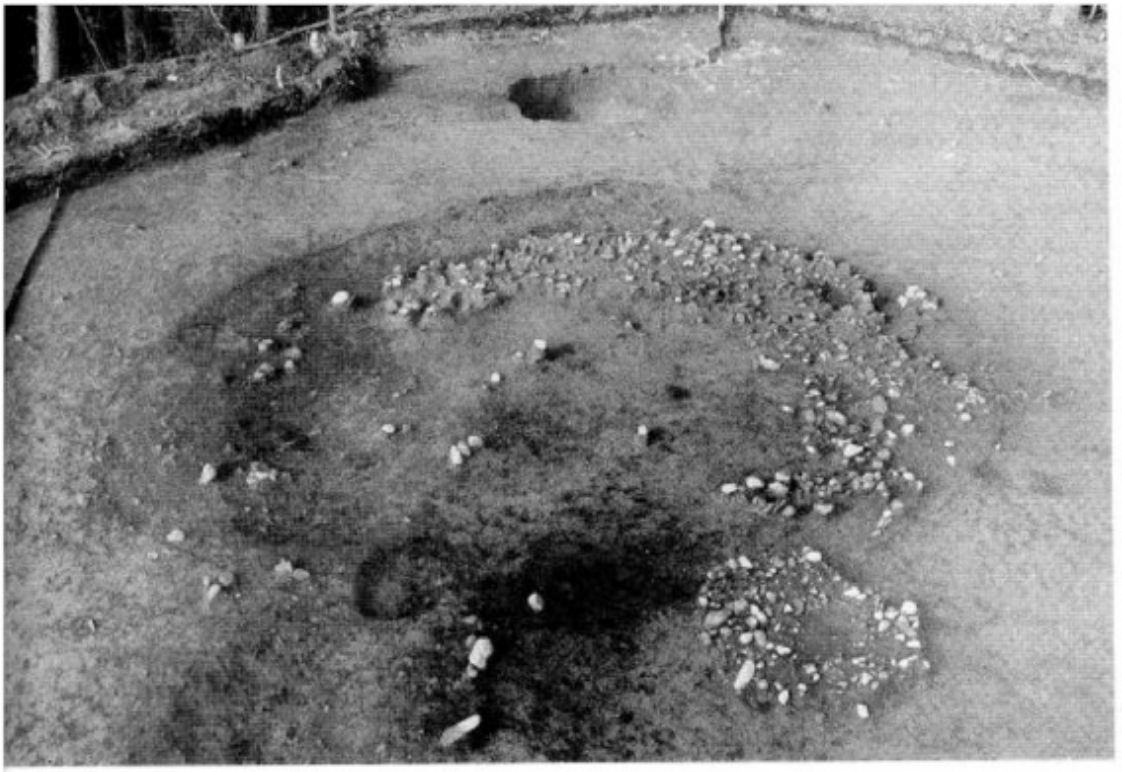


第31図　遺構配置図

調査前（東→）

遺構検出状況（東→）

図版 1

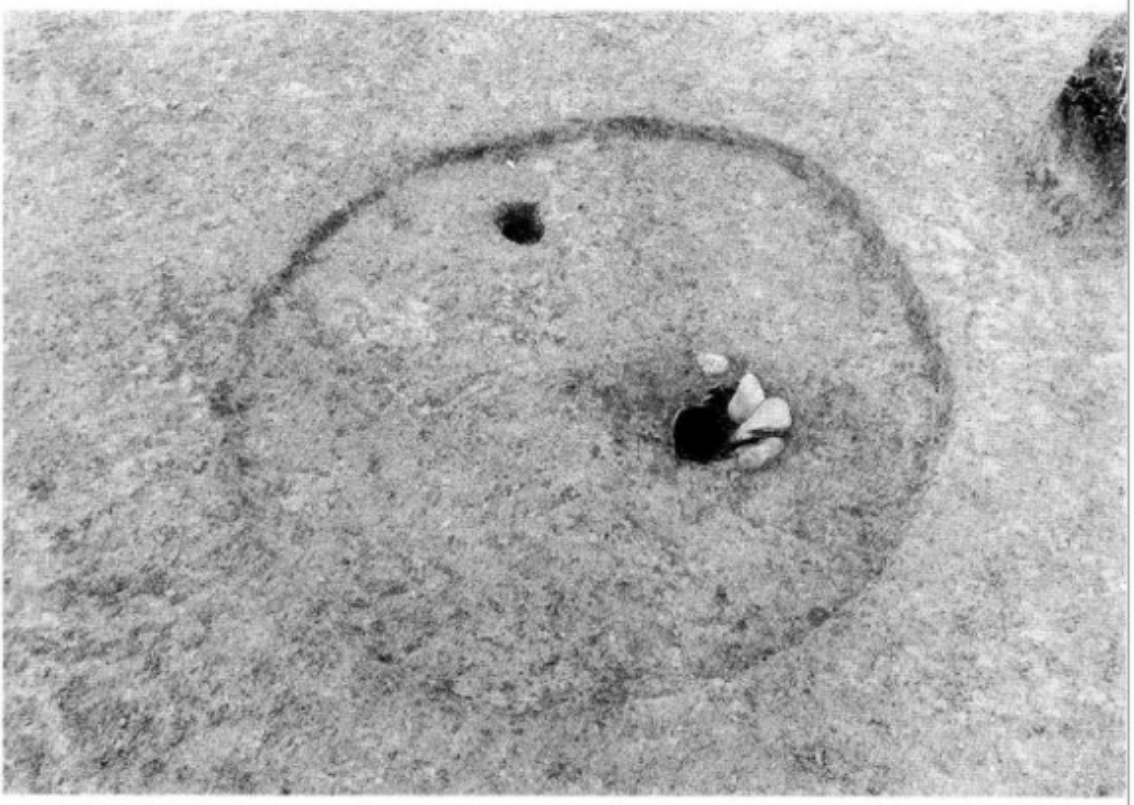


1号住居跡　遺物、礫出土状況（南→）

1号住居跡（南東→）

図版2

2号住居跡（南→）

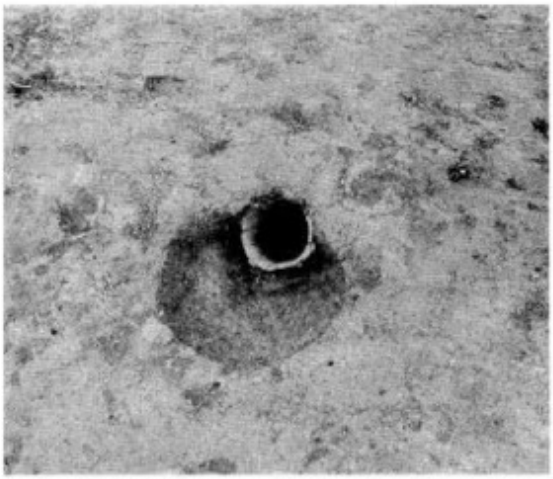


3号住居跡（南→）

図版3

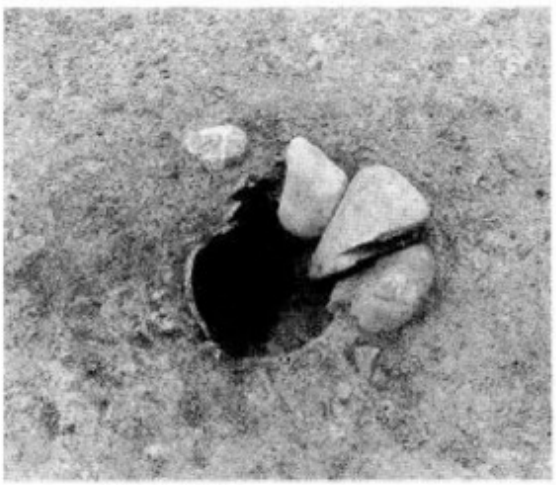
1号住居跡炉

1号住居跡炉断ち割り

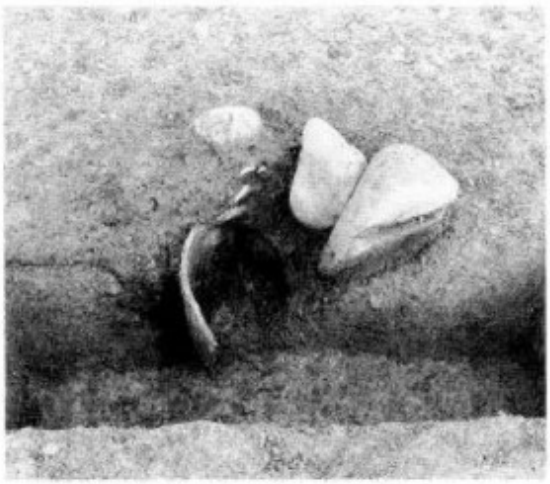


2号住居跡炉

2号住居跡炉断ち割り

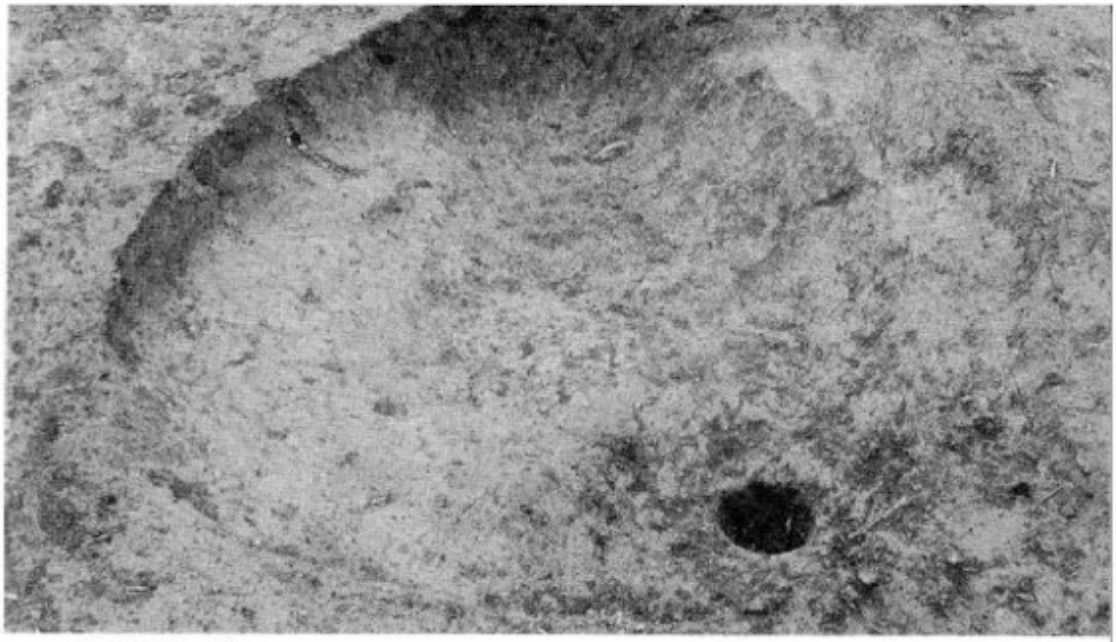


3号住居跡炉

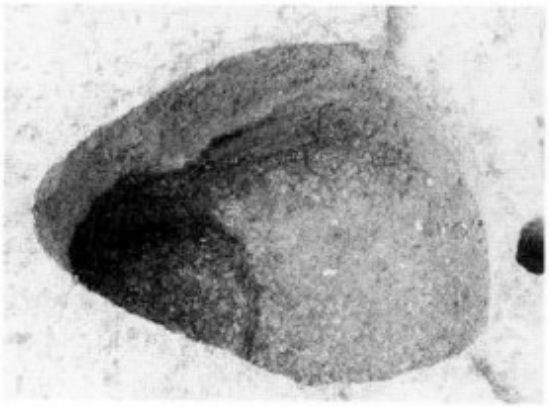


3号住居跡炉断ち割り

図版4

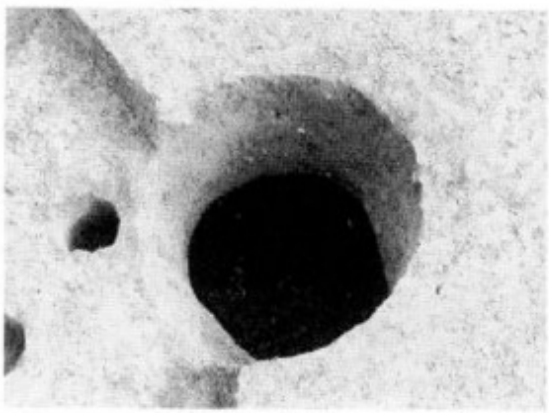


1号竪穴遺構（北→）



1号・2号土壙（南西→）

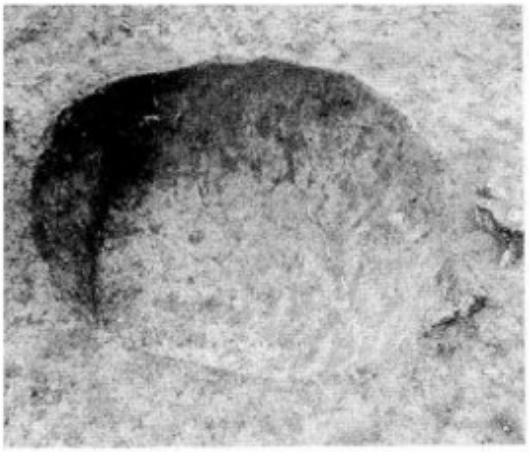
3号土壙土層断面（西→）



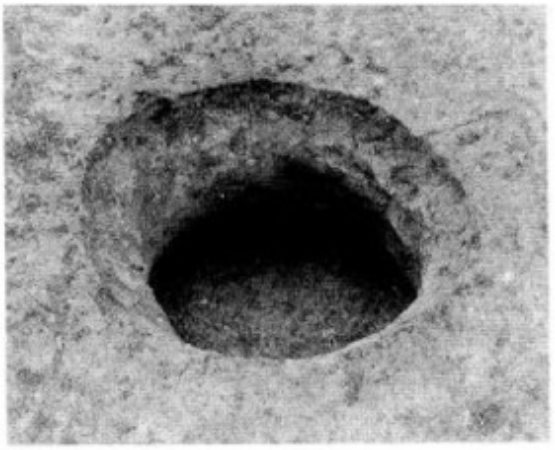
3号土壙（西→）

4号土壙（北→）

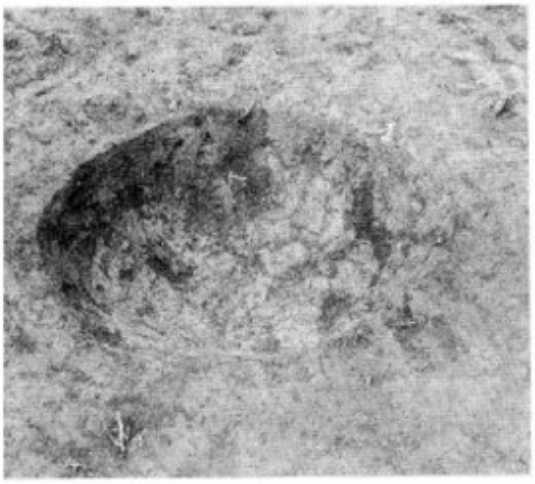
図版5



5号土壙（東→）

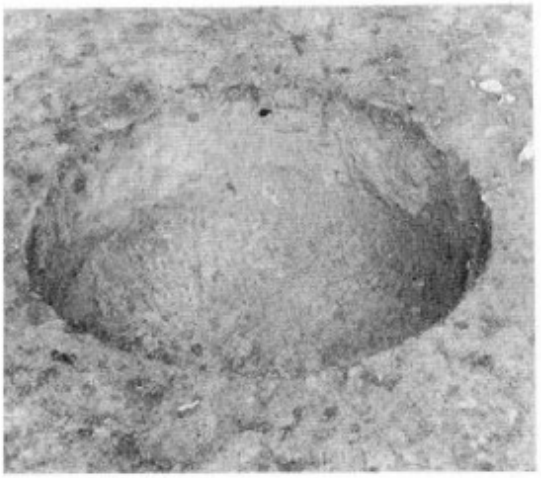


6号土壙（南→）



7号土壙（南東→）

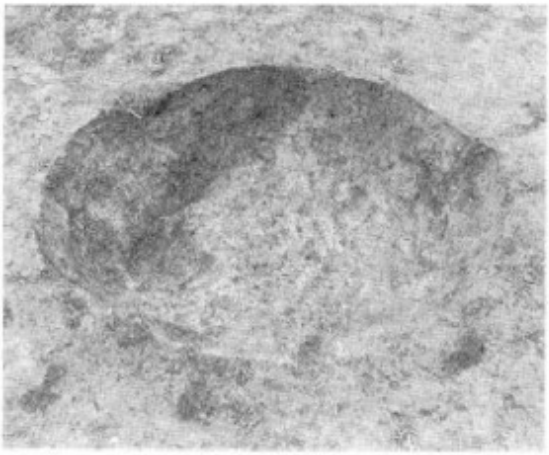
8号土壙（南→）



9号土壙（南→）

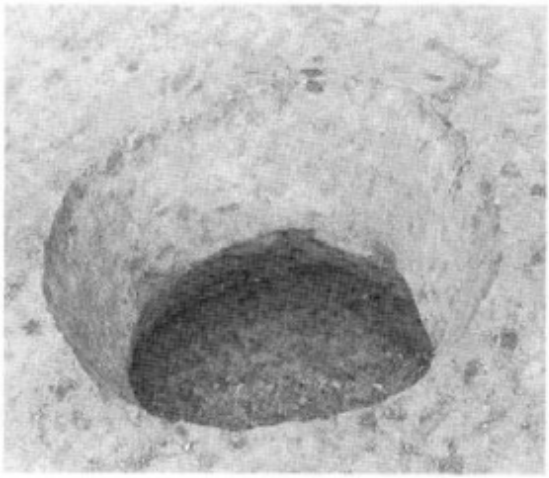
10号土壙（南→）

図版6

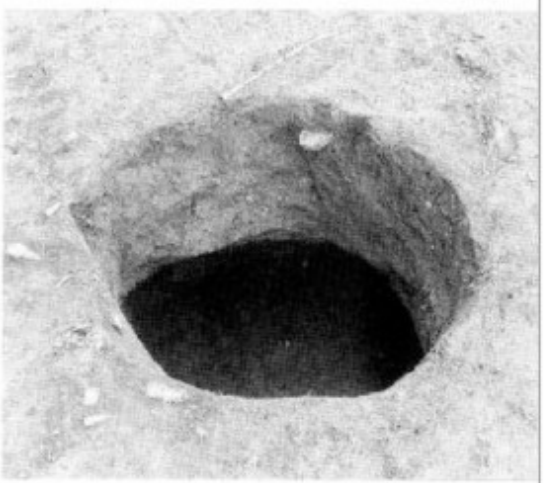


11号土壙（東→）

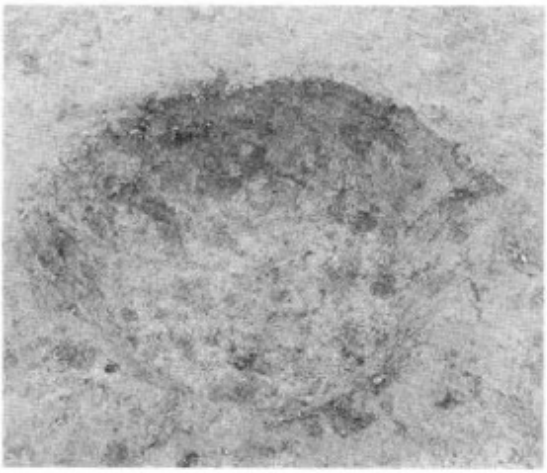
12号土壙（西→）



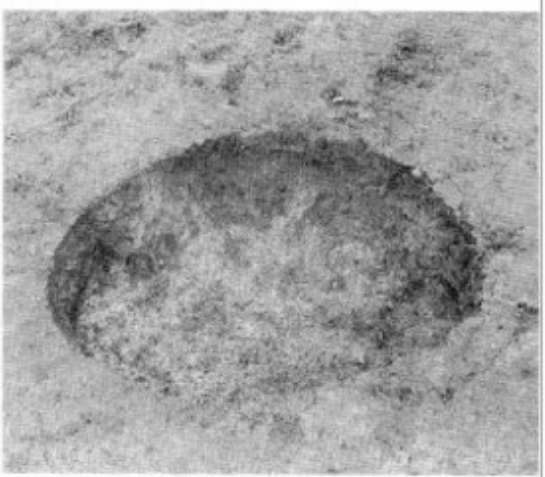
13号土壙（南→）



14号土壙（西→）

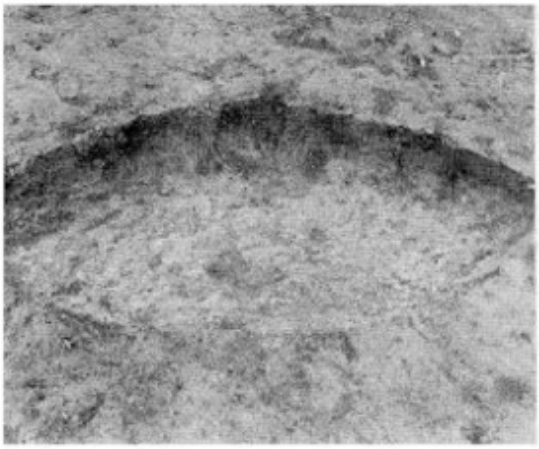


15号土壙（南→）

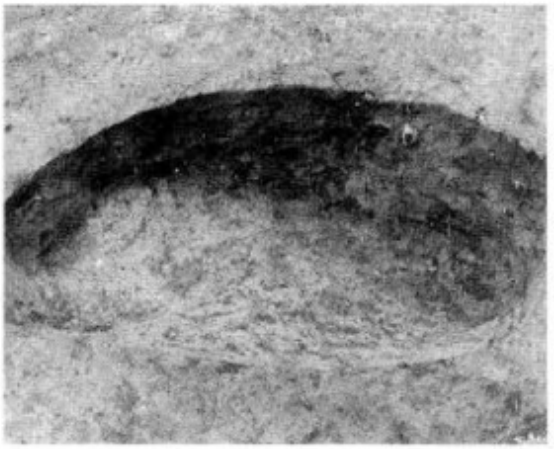


16号土壙（南→）

図版7

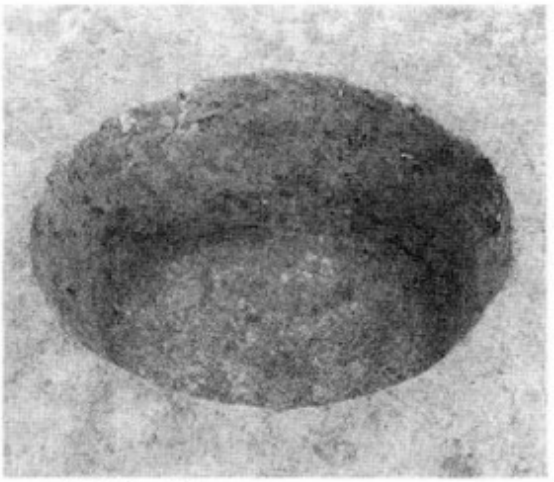


17号土壙（南→）



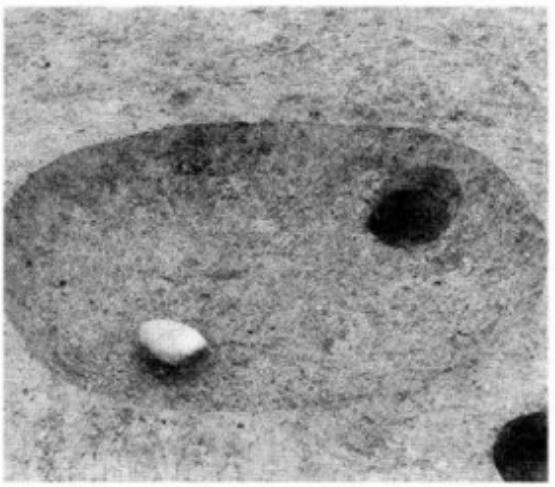
18号土壙（東→）

19号土壙（南→）



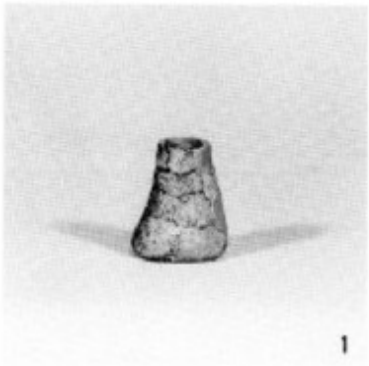
20号土壙（南東→）

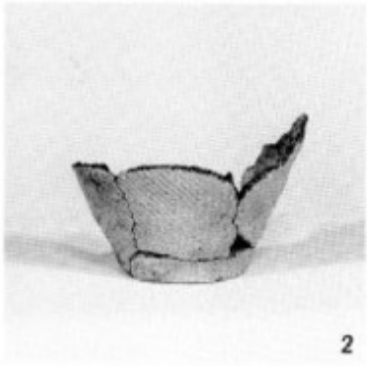
21号土壙（南東→）

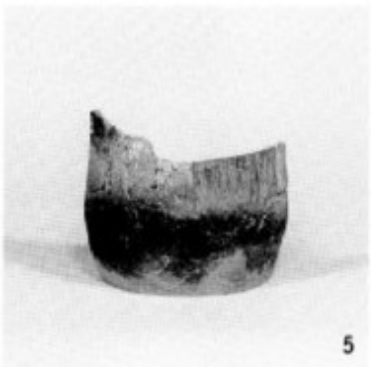


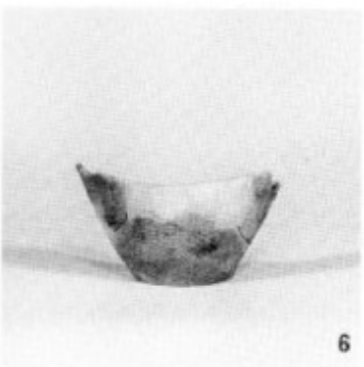
22号土壙（南西→）

図版8



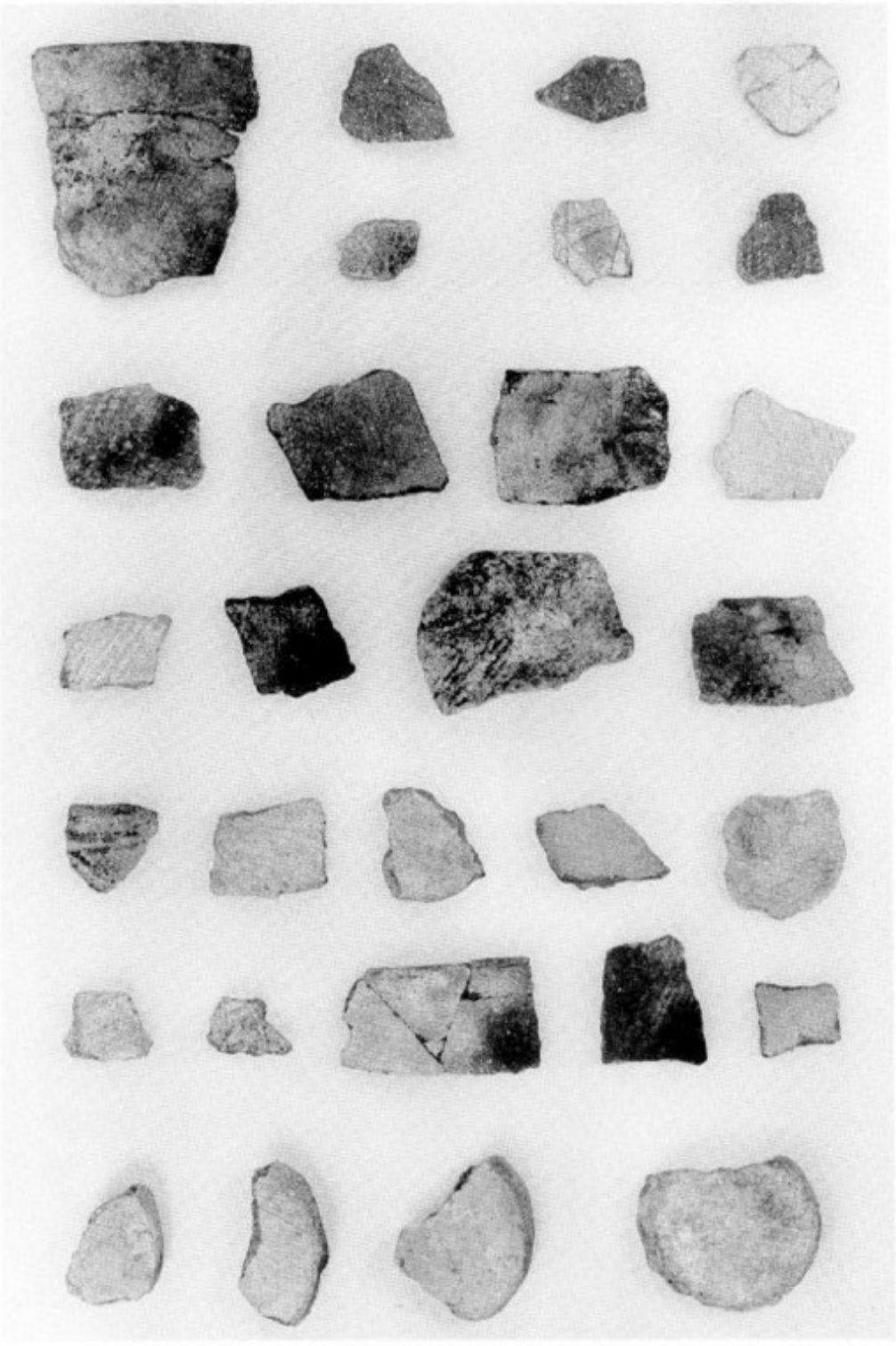






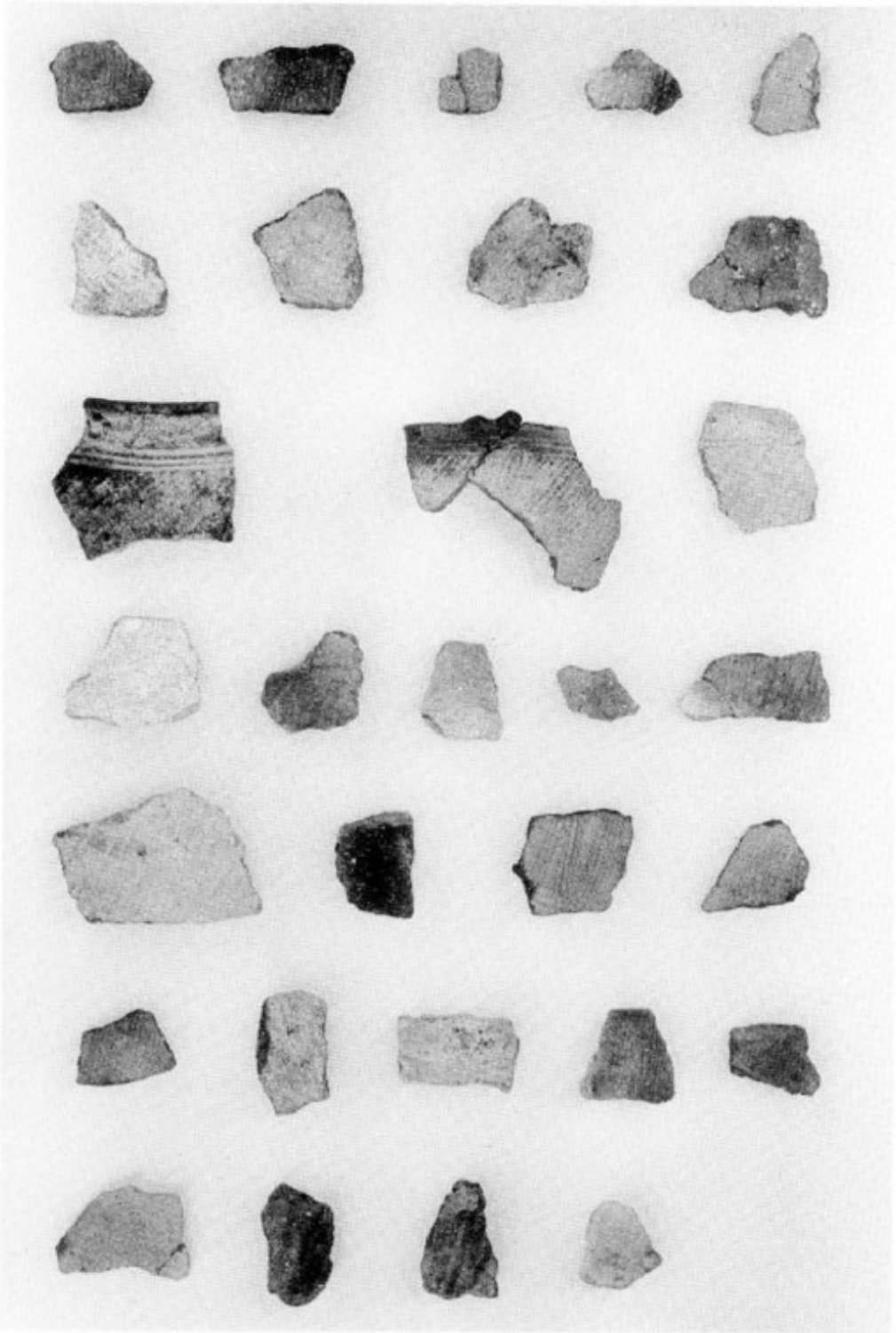
1～3　1号住居跡
4　2号住居跡
5　3号住居跡
6　8号土壙

図版 9



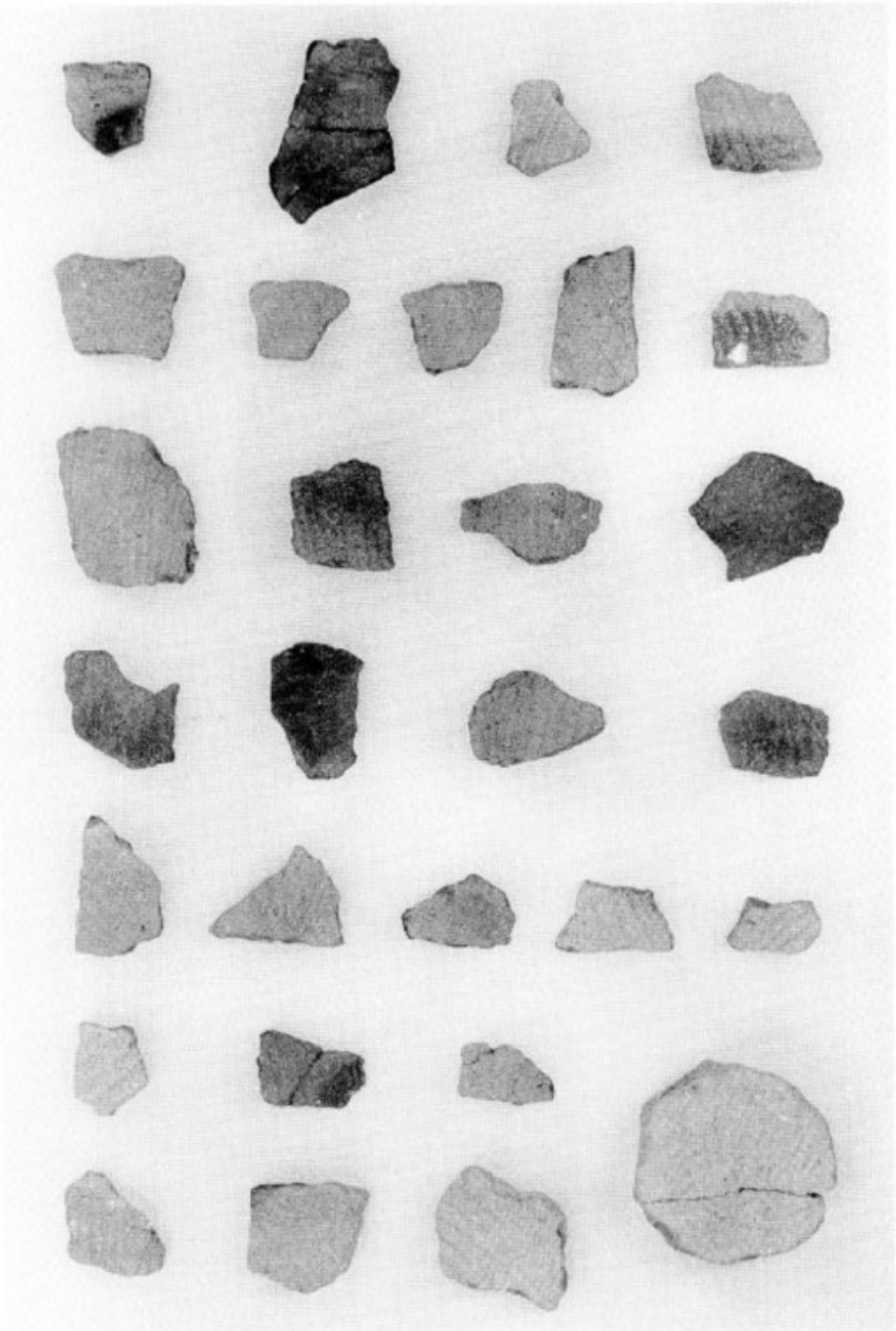
遺構内出土土器

図版10



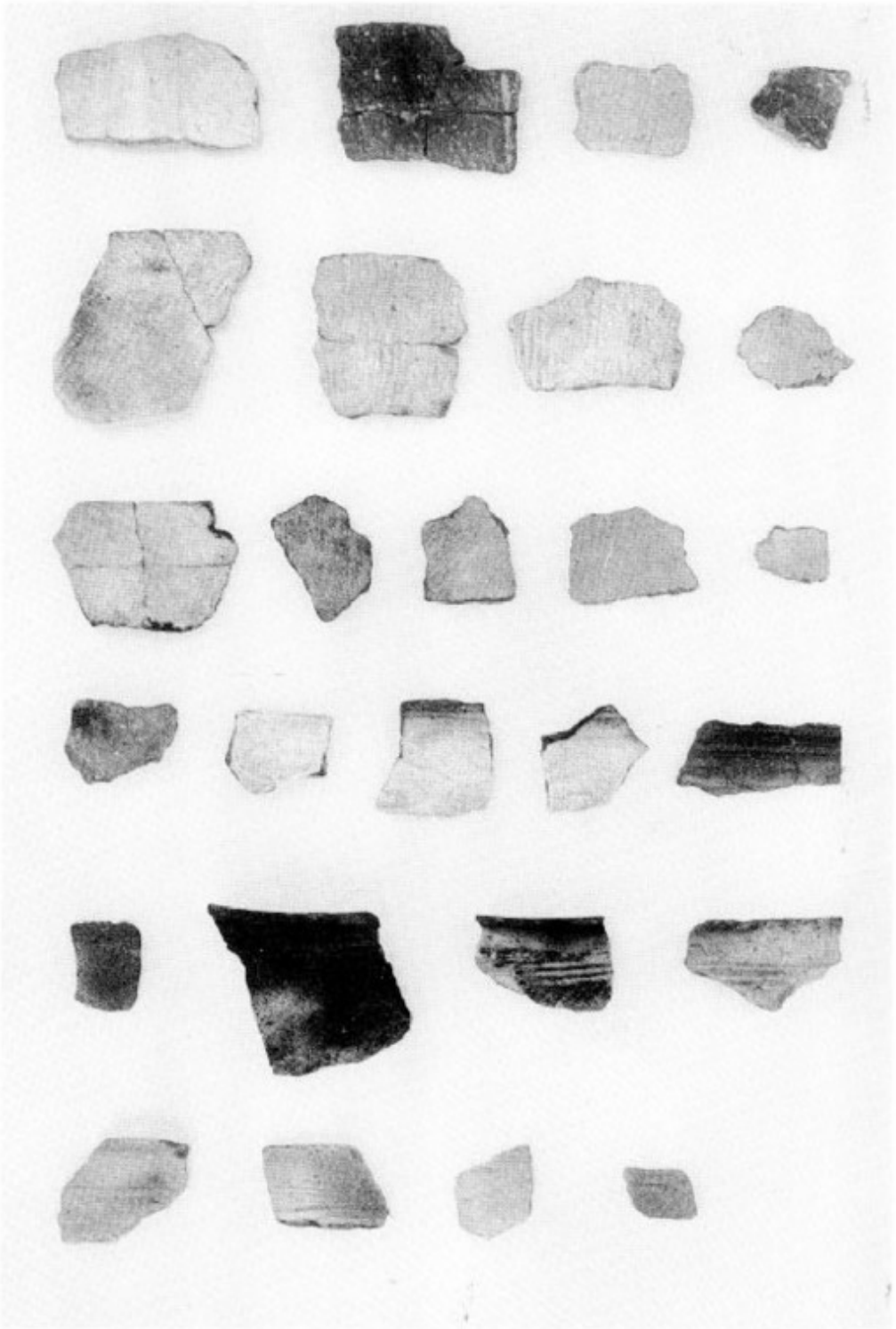
遺構内出土土器

図版11



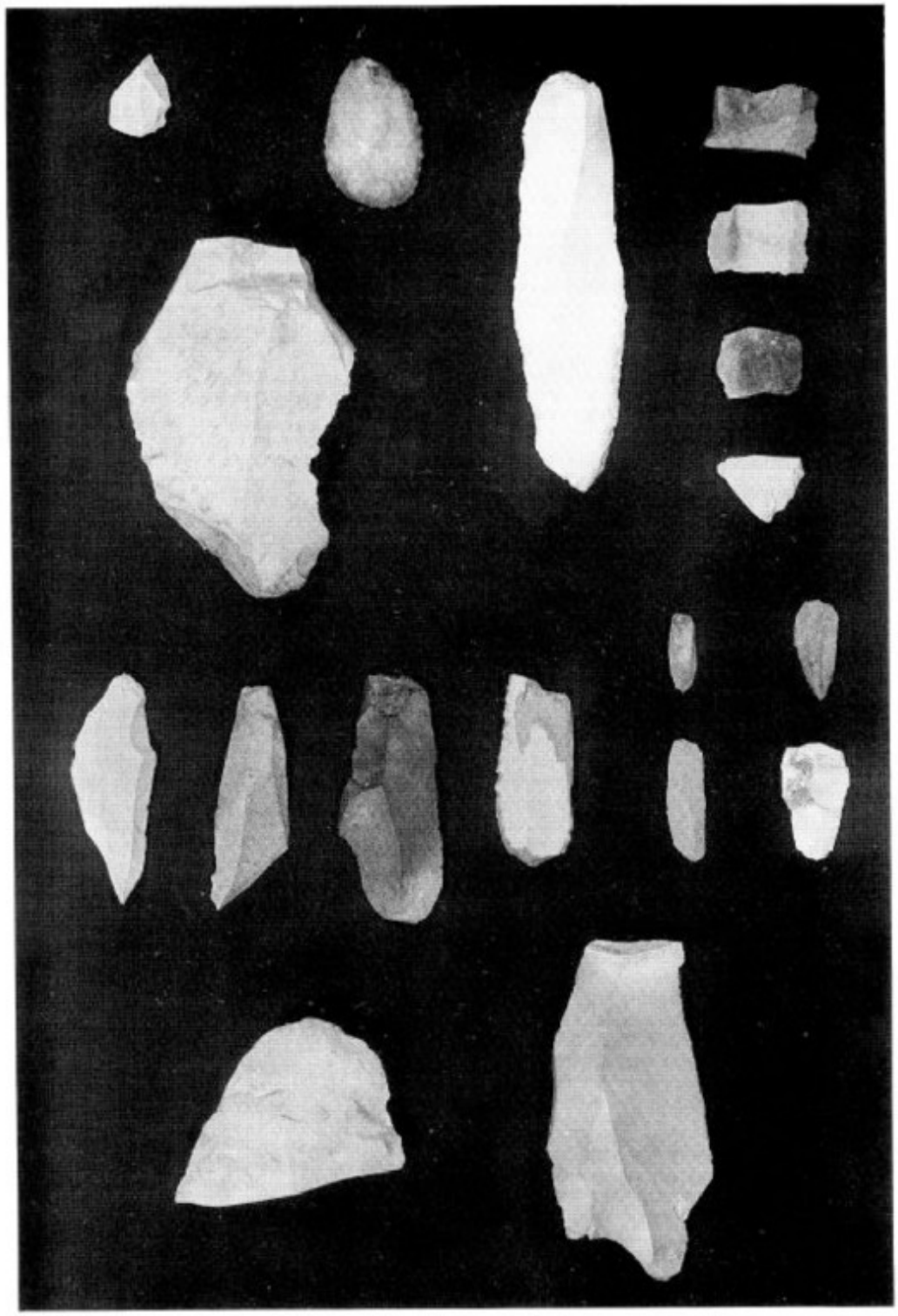
遺構外出土土器

図版12



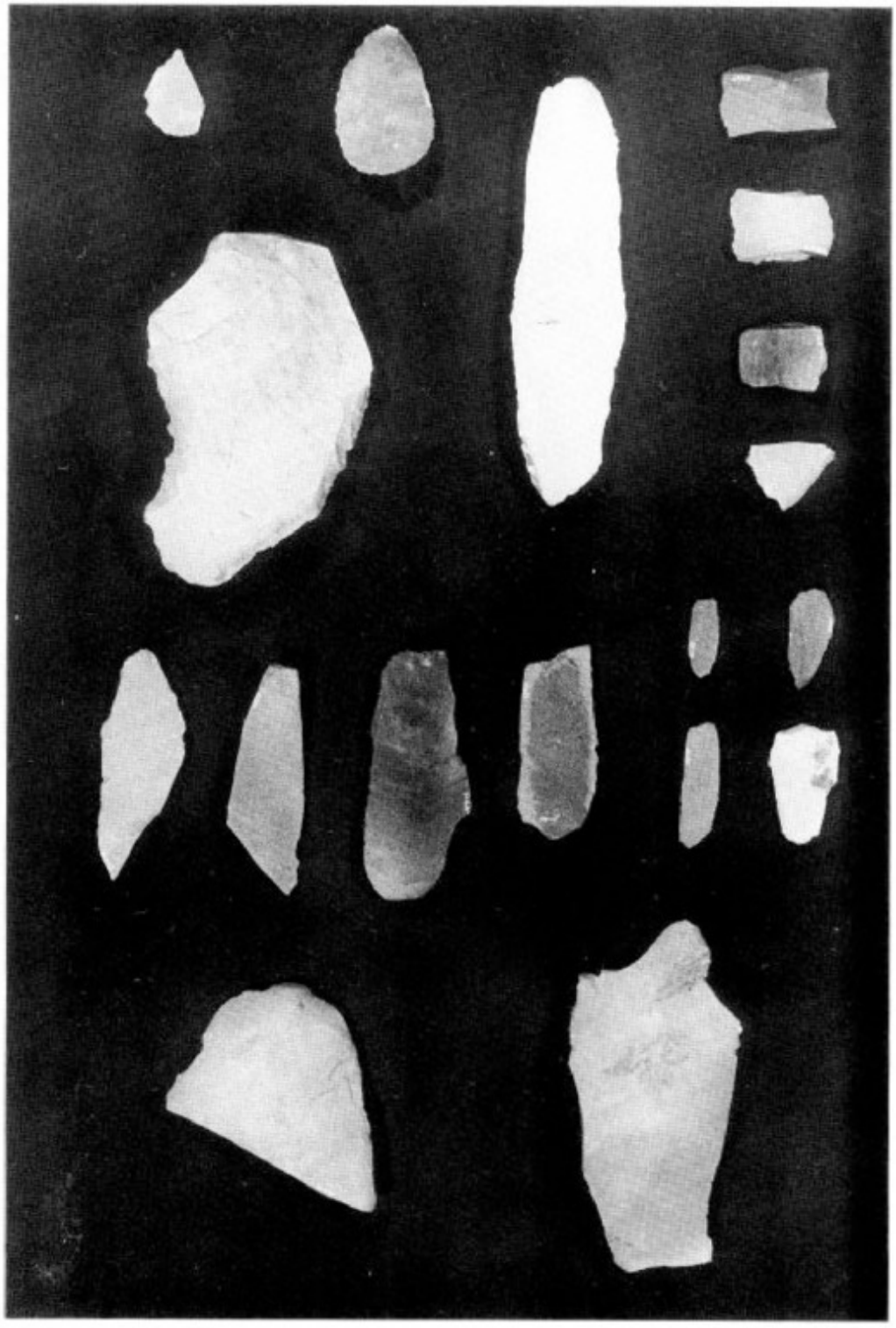
遺構外出土土器

図版13



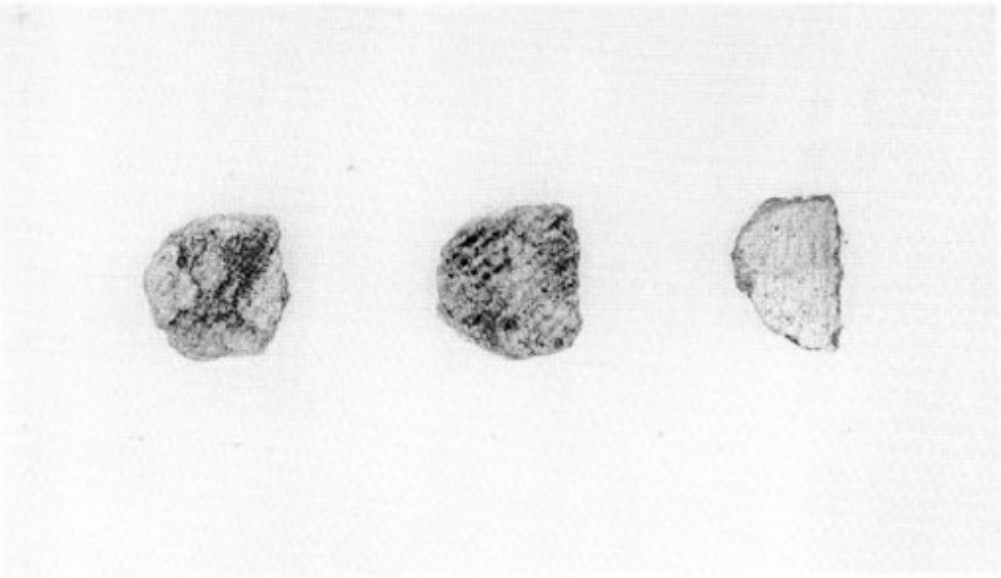
旧石器時代出土遺物

図版14

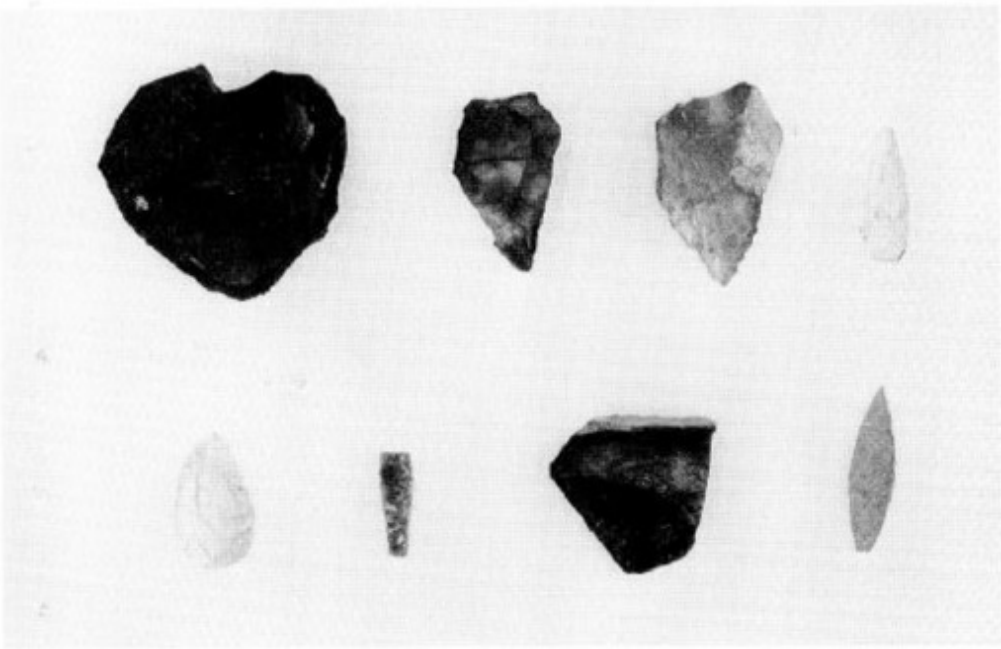


旧石器時代出土遺物

図版15



土製品

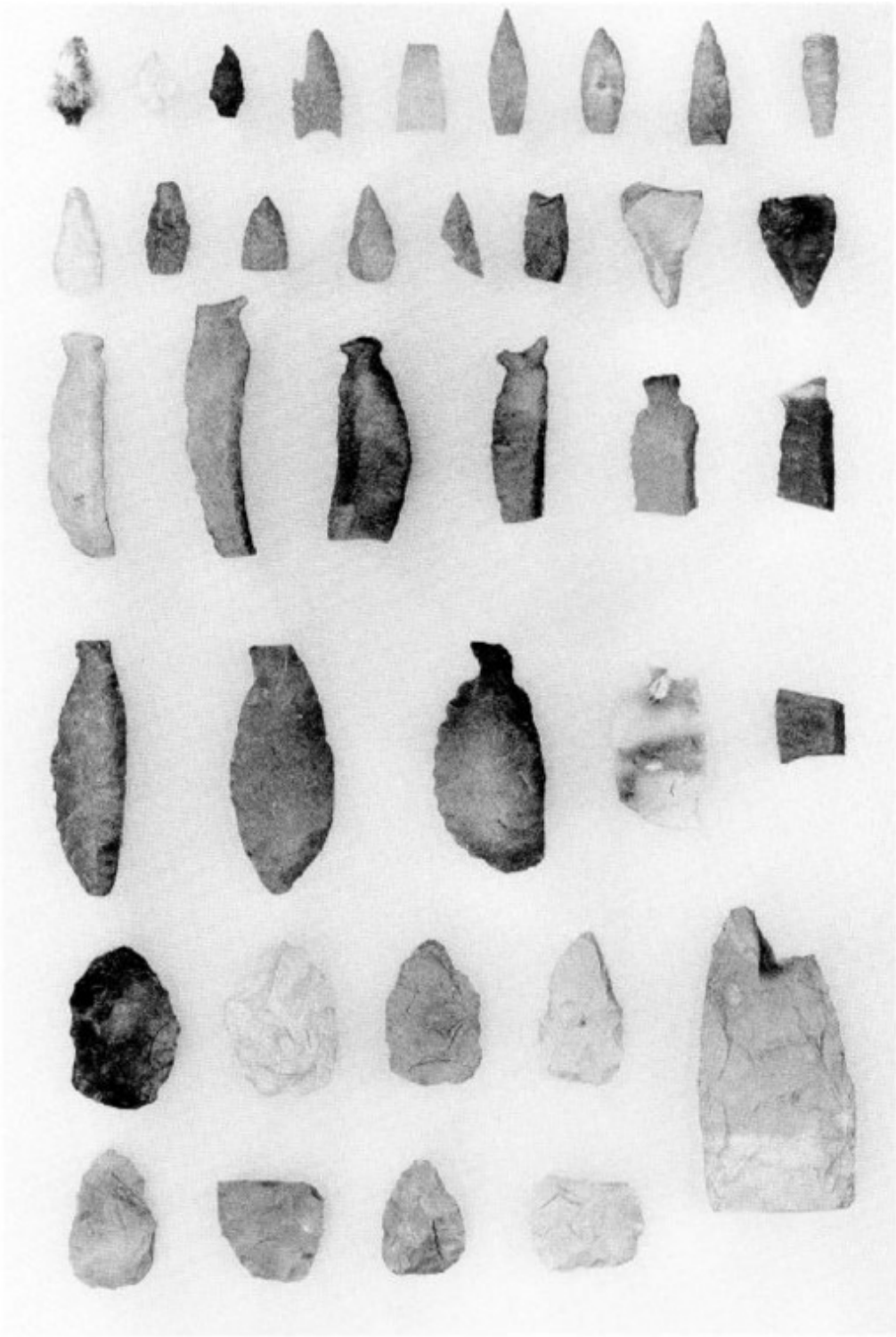


遺構内出土石器

図版16

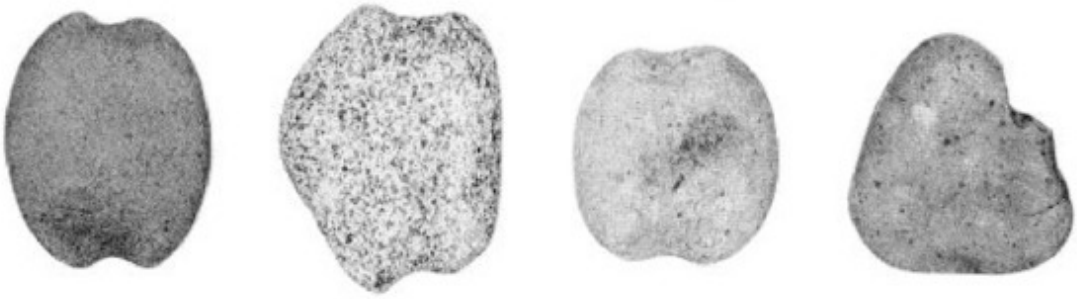
遺構内出土石器

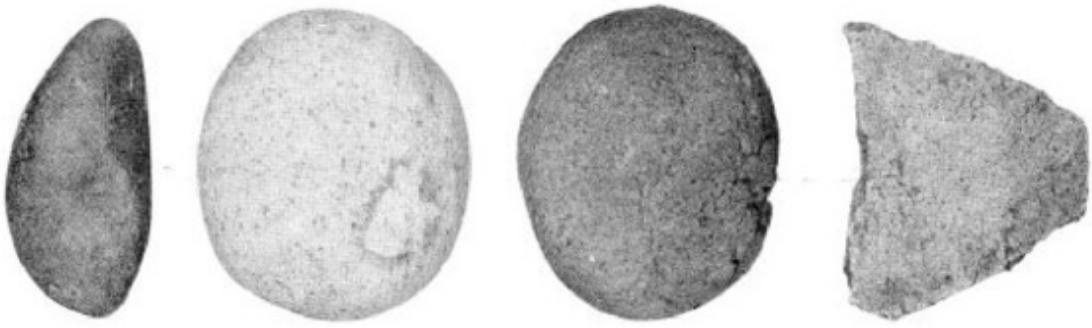
図版17



遺構外出土石器

図版18



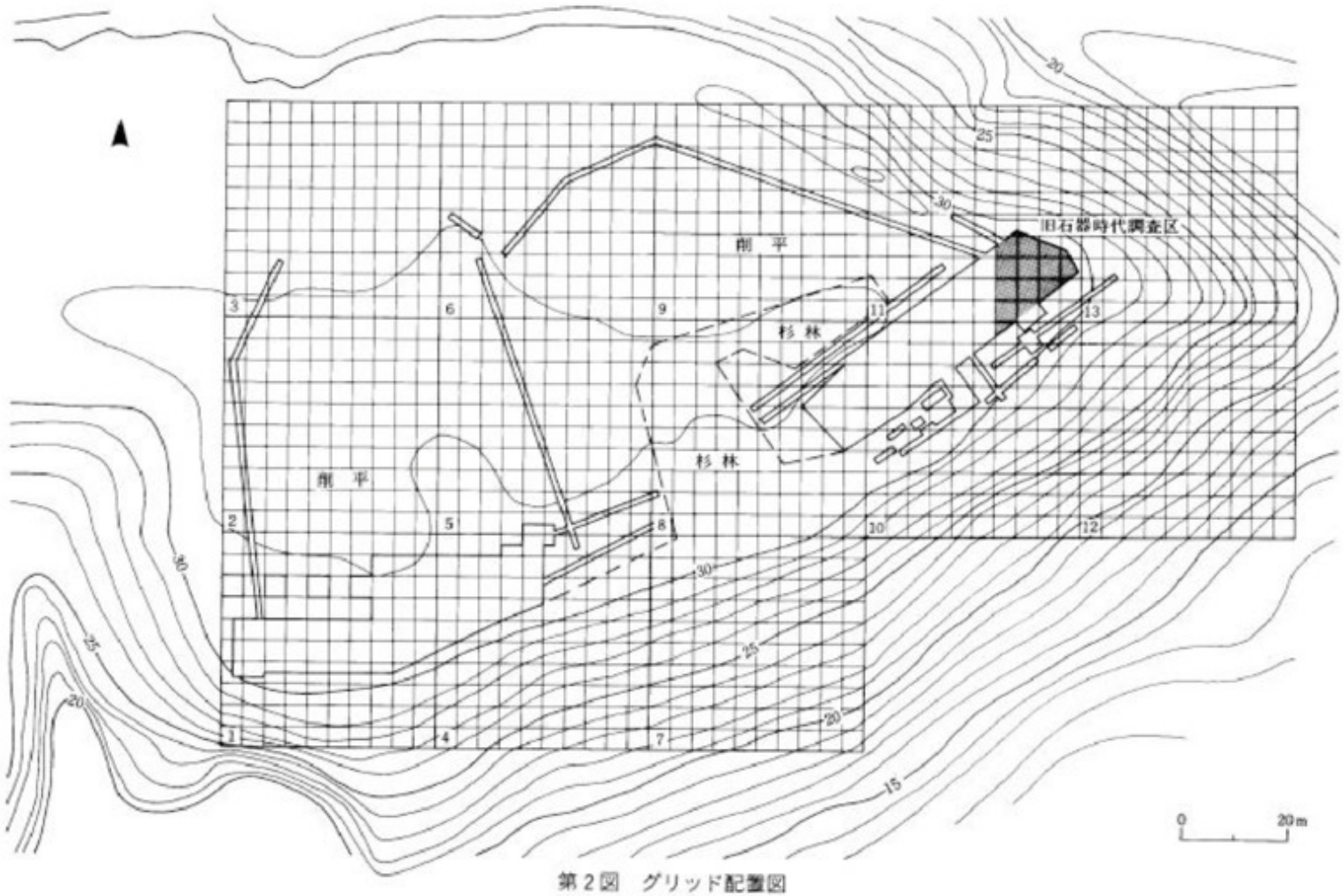


遺構外出土石器

図版19

秋大農場南遺跡

第1図　遺跡周辺の地形



第2図　グリッド配置図

遺跡の概観

御所野台地の南側、ＪＲ奥羽本線四ツ小屋駅から南東へ230mの地点である。南と東側から沢が入り込んで舌状をなし、標高は約30mである。

調査の結果、旧石器時代、縄文時代、平安時代の複合遺跡で、遺構は縄文時代の竪穴住居跡、土壙、土器埋設遺構、平安時代の竪穴住居跡、土壙、その他に溝状土壙、焼土遺構等が検出された。

隣接する遺跡は東側150mに旧石器時代、縄文時代中期、弥生時代の「地蔵田Ｂ遺跡」、北西約300mに旧石器時代、縄文時代中期の「狸崎Ｂ遺跡」等の関連遺跡が所在する。

旧石器時代

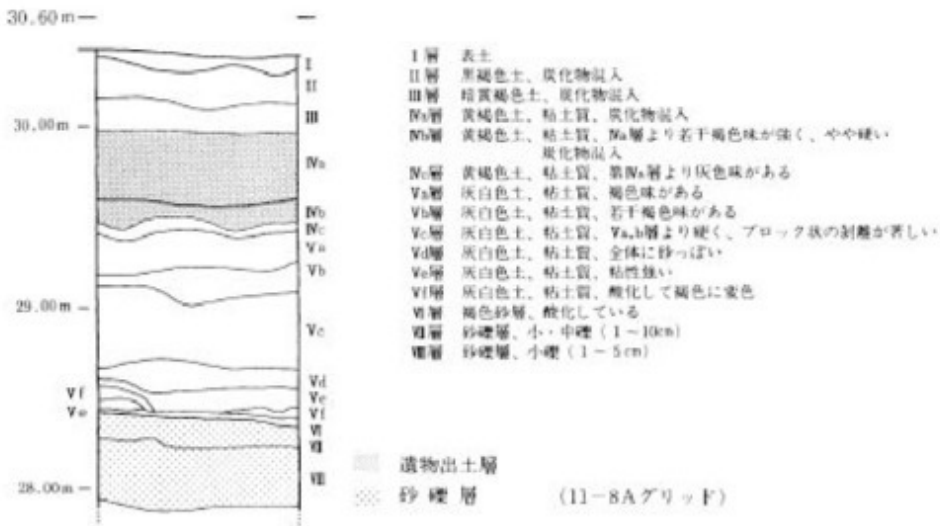
遺物は調査区の東端部、約180m²の範囲より出土した。

層位

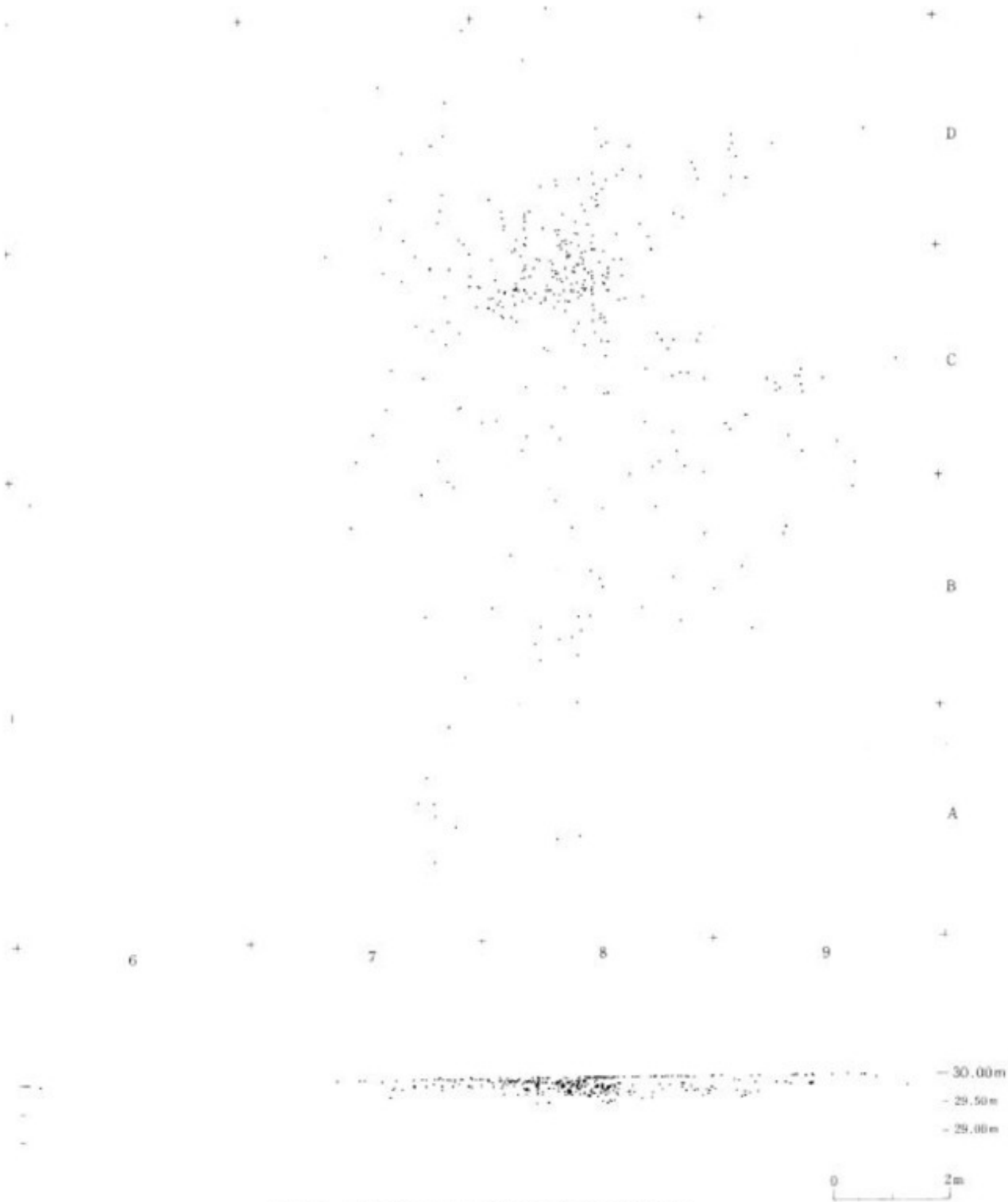
本遺跡は標高約30mで、地形区分では上野台段丘IIにあたる。遺跡はこの上野台段丘IIの中では低位に位置する。遺物はⅣ層（黄褐色土、ローム層）からの出土である。

出土遺物

出土総数は340点である。二次加工の認められる剥片が１点のみで、他は剥片である。



第３図　土層図



第４図　旧石器時代出土遺物平面及び垂直分布図

縄文・平安時代

遺構と遺物

竪穴住居跡

縄文時代

1号住居跡（第5図）

調査区の東側で検出された。

プランは径2.8mの円形を呈し、確認面からの深さは25cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは5個検出されたが、主柱穴は不明である。炉は土器埋設部、掘り込み部からなる。土器埋設部は埋設土器が抜き取られ、周辺は火熱を受けて赤変していた。掘り込み部は底・側面が火熱を受けて赤変している。床は南・西側に段が付き、東側には火熱を受けて赤変している部分が認められた。

出土遺物

土器（第12図1、第15図17～30）

1は床面、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を有するもの、地文のみのものである。1は鉢形土器で上半分を欠く。地文はRL単節斜縄文（縦位回転）である。

土製品（第30図1、2）

1、2は再利用土製品である。土器片を再利用したもので、楕円形を呈するものである。

2号住居跡（第6図）

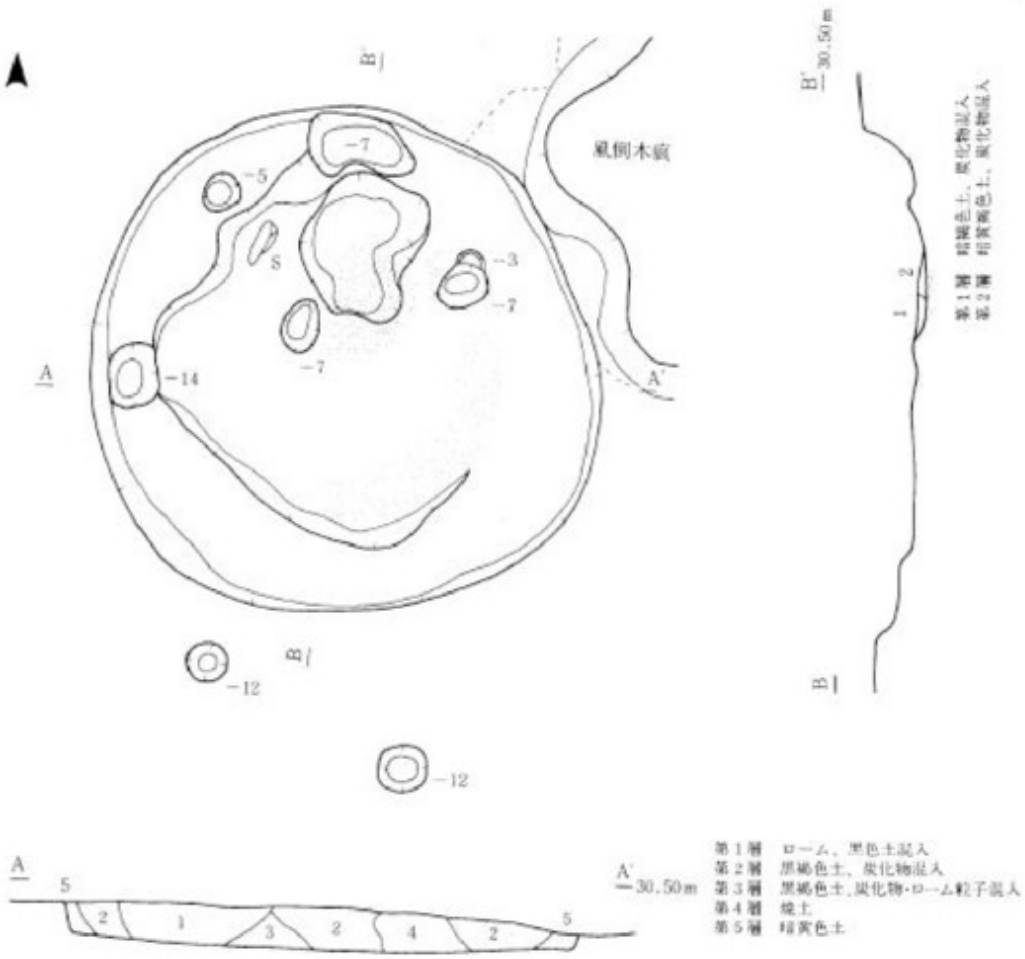
調査区の東側で検出された。

プランは長軸4.7m、短軸4.3mの楕円形を呈し、確認面からの深さは35cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは5個検出されたが、深さ51cm以上の3個が主柱穴である。炉は石囲土器埋設部、石組部、掘り込み部からなる。石囲土器埋設部は下半分を欠く深鉢形土器を埋設し、拳大よりやや大き目の石で囲っている。周辺は強く火熱を受けて赤変している。石組部は側面に石が組まれ、底面には認められない。底面と側面の石が火熱を受けている。掘り込み部は一段浅く壁に接し、掘り込み上面に数個の石が認められる。床は平坦で堅いが、炉の石囲土器埋設部の周辺は特に堅い。

出土遺物

土器（第12図2～4、第15、16図31～42）

2、3は床面、4は炉埋設土器、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を有するもの、沈線で文様を作り出すもの、地文のみのものである。2は小形の壺形土器である。口唇部に小突起を1個もち、頸部に刺突文が巡る。地文はLR単節斜縄文（縦位回転）である。3は深鉢形土器の下部で、地文は撚糸文である。4は口縁部が緩く外反する深鉢形土器で、下半分を欠く。口縁部が無文帯で、地文はRL単節斜縄文（縦位回転）である。



第5図　1号住居跡

土製品（第30図3）

3は再利用土製品である。土器片を再利用したもので、楕円形を呈するものである。

石器（第26図16）

16は台石で、炉掘り込み部の北側壁際の床面から出土した。長軸25.5cm、短軸15.5cmの楕円形を呈し、中央部へ向かって緩く湾曲している。一部磨れている箇所が認められる。

3号住居跡（第7図）

調査区の東側で検出された。

プランは長軸３m、短軸2.7mの楕円形を呈し、確認面からの深さは10cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは10個検出されたが、主柱穴は住居隅の４個と考えられる。炉は石囲土器埋設部、石組部、掘り込み部からなる。石囲土器埋設部は下半分を欠く鉢形土器を埋設し、細長い２個の石で囲っている。周辺は強く火熱を受けて赤変している。石組部は埋設土器との間に長さ30cmの比較的偏平な川原石を組み、底・側面が火熱を受けている。掘り込み部は一段浅く壁に接する。床はほぼ平坦で堅いが、炉の石囲土器埋設部の周辺は特に堅い。

出土遺物

土器（第12図５～８、第16図43）

５はピット、６、７、43は床面、８は炉埋設土器である。沈線区画の磨消帯を有するもの、地文のみのものである。５は深鉢形土器の下部で、地文はＲＬ単節斜縄文（縦位回転）である。６は口縁部が外反する鉢形土器で、頸部がくぼむものである。沈線区画の磨消帯は４単位構成で、地文はＬＲ単節斜縄文（縦位回転）である。７は深鉢形土器の胴部である。沈線区画の磨消帯の一部には稜線部分が認められる。地文はＲＬ単節斜縄文（縦位回転）である。８は下半分を欠く鉢形土器である。口縁部は４単位の山形口縁で、山形口縁の頂部には粘土を貼付して内傾させている。胴部の「Ｊ」字状磨消帯は４単位構成で、地文はＬＲ単節斜縄文（縦位回転）である。

４号住居跡（第８図）

調査区の東側で検出された。

ピットと炉の検出で、プラン及び規模は不明である。炉の南東側には７号土壙が位置し、本住居跡が切られている。ピットは８個検出されたが、主柱穴は不明である。炉は土器埋設炉である。深鉢形土器の下部を埋設し、周辺は強く火熱を受けて赤変している。床はほぼ平坦である。

出土遺物

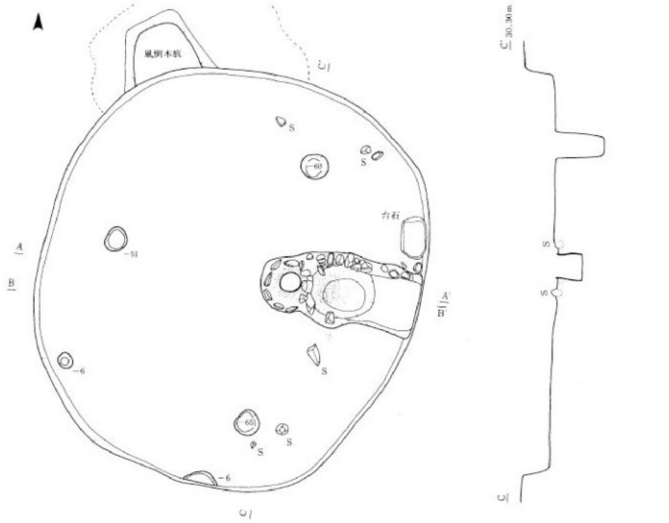
土器（第12図９）

９は炉埋設土器である。深鉢形土器の下部で、地文はＲＬ単節斜縄文（縦位回転）である。

５号住居跡（第９図）

調査区の西側、台地縁辺部で検出された。

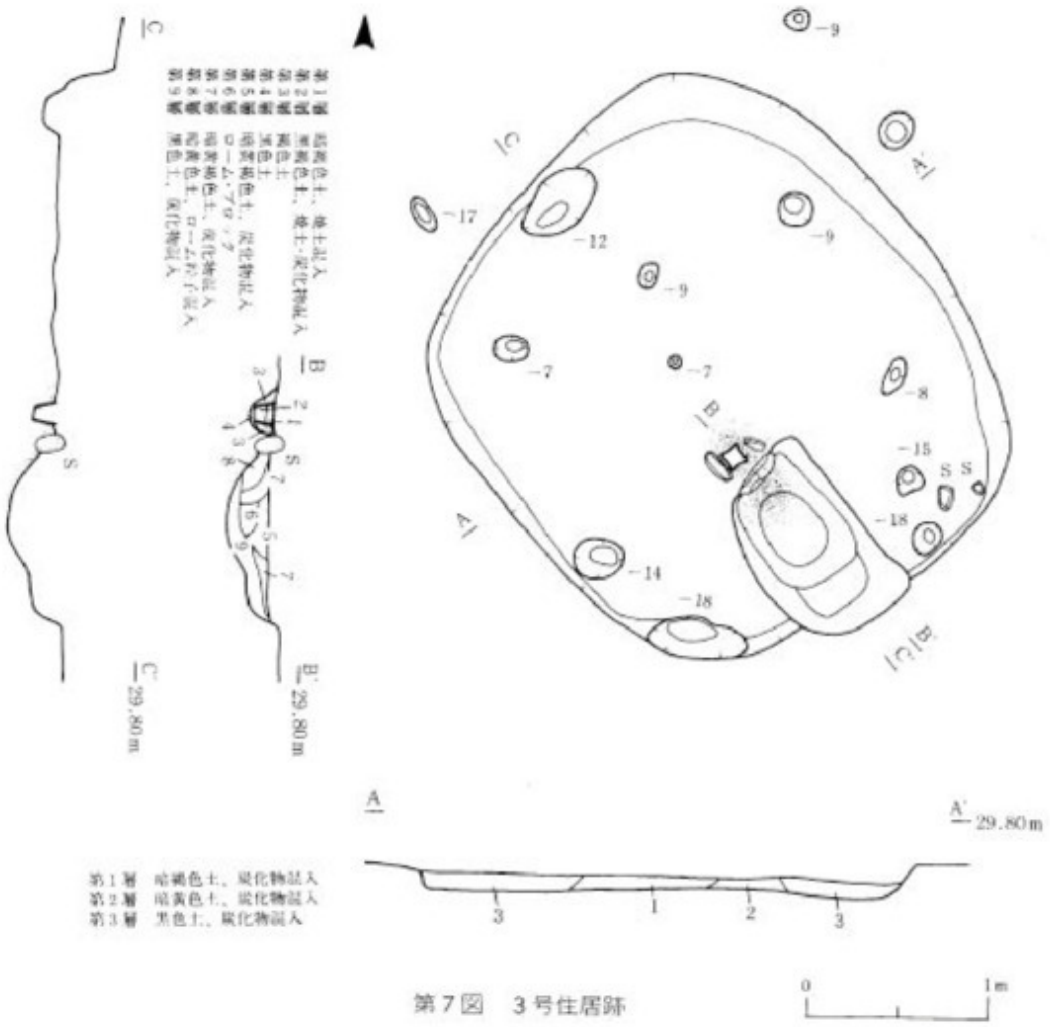
プランは長軸4.2m、短軸3.8mの楕円形を呈し、北東側は８号・９号土壙に切られている。確認面からの深さは40cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは３個検出され、この３個が主柱穴である。炉は石囲土器埋設炉、石組部、掘り込み部からなる。石囲土器埋設部は底部を欠く深鉢形土器を埋設し、拳大の石で囲っている。周辺は火熱を受けて赤変している。石組部は石が側面に組まれ、底面には認められない。また、埋設土器側と掘り込み部側に長さ30cm弱の比較的偏平な川原石を組んでいる。底面と側面の石が強く火熱を受けて赤変し、底面は堅くなっている。掘り込み



第1層　暗黄褐色土
第2層　暗黄褐色土　炭化物多量混入
第3層　ローム
第4層　暗黄褐色土　地土・ブロック混入
第5層　暗黄褐色土
第6層　暗黄色土　しまっている
第7層　暗黄褐色土　炭化物・ブロック混入
第8層　橙色地土
第9層　暗黄橙色土
第10層　黄褐色土

第1層　黒色腐植土　炭化物混入
第2層　暗褐色土　炭化物混入
第3層　暗褐色土　炭化物・ローム粒子混入
第4層　暗黄褐色土　炭化物・ローム粒子・地土混入
第5層　暗黄色土　炭化物・ローム粒子混入
第6層　暗褐色土　地土・炭化物多量混入
第7層　暗黄褐色土　炭化物・ローム粒子混入
第8層　暗褐色土　炭化物混入
第9層　暗褐色土　炭化物・ローム粒子混入
第10層　暗褐色土　炭化物・ローム粒子混入

第6図　2号住居跡



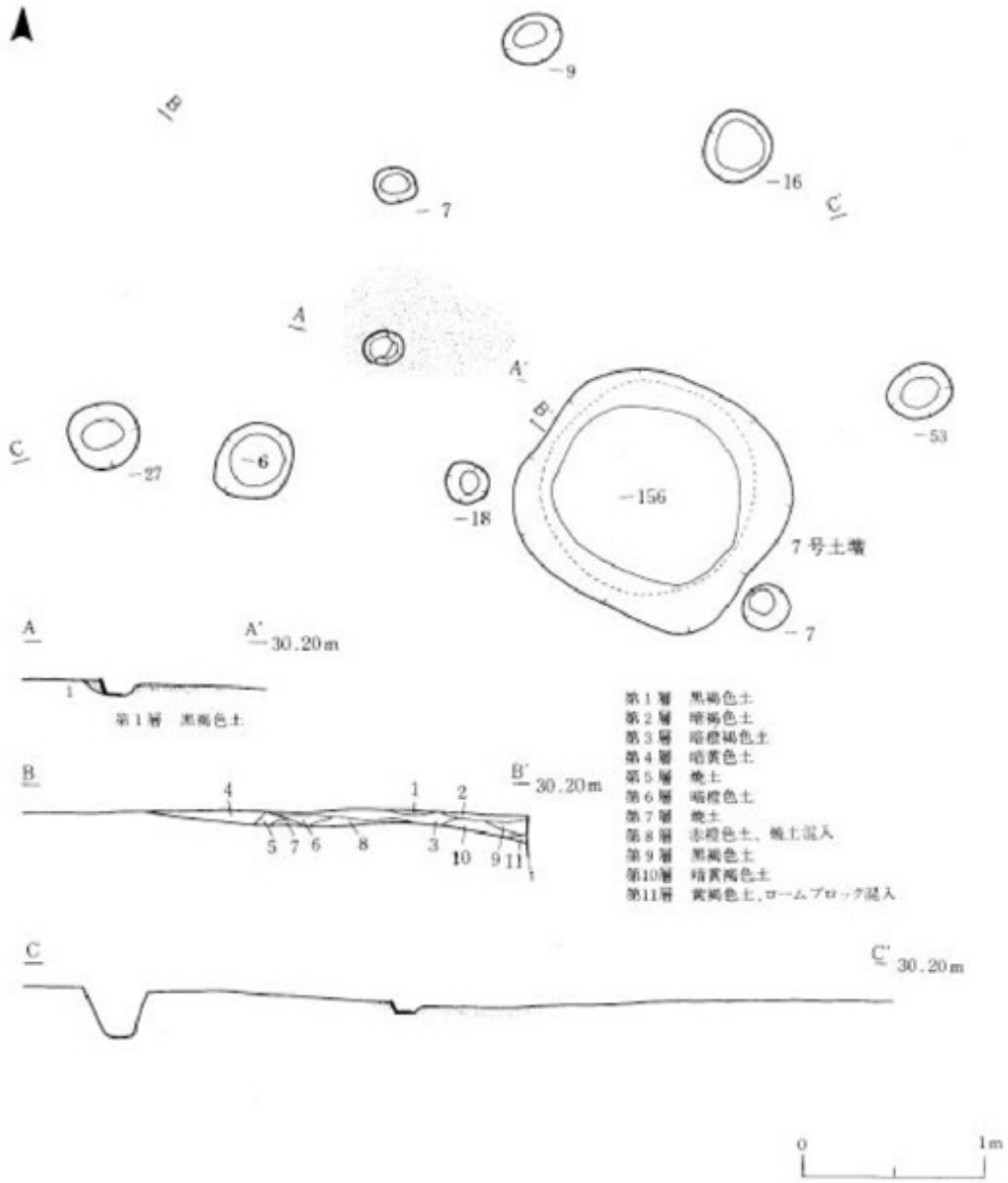
第7図　3号住居跡

部は一段浅く壁に接し、ピットが1個認められる。床は平坦で堅く、炉の石囲土器埋設部の周辺は特に堅い。

出土遺物

土器（第13図10～13、第16図44～54）

10～12は床面、13は炉埋設土器、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を有するもの、条痕文を施すもの、地文のみのものである。10は鉢形土器の下半分で、地文はＬＲ単節斜縄文（縦位回転）である。11は鉢形土器の胴部で、波状の磨消帯を有する。地文はＬＲ単節斜縄文（縦位回転）である。12は深鉢形土器の胴部で、地文はＬＲ単節斜縄文（縦位回転）である。13は深鉢形土器の胴部で、口縁部と底部を欠く。磨消帯は横位方向への展開で、4単位構成である。地文はＲＬ単節斜縄文（縦位回転）である。


B
−9
−16
C
−7
A
A'
B
−53
C
−27
−6
−18
−156
7号土壙
−7
A
A'
30.20m
1
第1層　黒褐色土
B
B'
30.20m
4
1
2
5 7 6
8
3
10
9 11
第1層　黒褐色土
第2層　暗褐色土
第3層　暗橙褐色土
第4層　暗黄色土
第5層　焼土
第6層　暗橙色土
第7層　焼土
第8層　赤橙色土、焼土混入
第9層　黒褐色土
第10層　暗黄褐色土
第11層　黄褐色土、ロームブロック混入
C
C'
30.20m
0
1m

第8図　4号住居跡

石器（第24図１～３、第26図17～19）

１は石匙である。縦型で、ツマミ部にアスファルトが付着する。石質は硬質頁岩である。２は削器である。片面調整で、石質は硬質頁岩である。３は石斧である。刃部が欠損し、石質は凝灰岩である。17はくぼみ石で、両面に複数のくぼみ部が認められるものである。18は磨石である。19は石皿で、破損している。周堤のあるもので、石質は安山岩である。

６号住居跡（第10図）

調査区の西側で検出された。

北東部の壁の検出で、プランは不明である。確認面からの深さは５cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは１個のみの検出で、主柱穴は不明である。炉は土器埋設部と掘り込み部からなる。土器埋設部は口縁部を欠く深鉢形土器を斜位に埋設し、西・東側に拳大の石を１個ずつ組んでいる。周辺は火熱を受けて赤変している。掘り込み部は底・側面が火熱を受けている。床は平坦で堅い。

出土遺物

土器（第13、14図14、15、第16図55～57）

15は炉埋設土器、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を有するもの、条痕文を施すもの、地文のみのものである。14は深鉢形土器の下部で、地文はＲＬ単節斜縄文（縦位回転）である。15は口縁部を欠く深鉢形土器である。地文はＲＬ単節斜縄文（縦位回転）で、縄文原体の開端部の結び目縄文が認められる。底部は網代痕である。

石器（第26図20）

20はくぼみ石で、両面にくぼみ部をもつものである。

平安時代

７号住居跡（第11図）

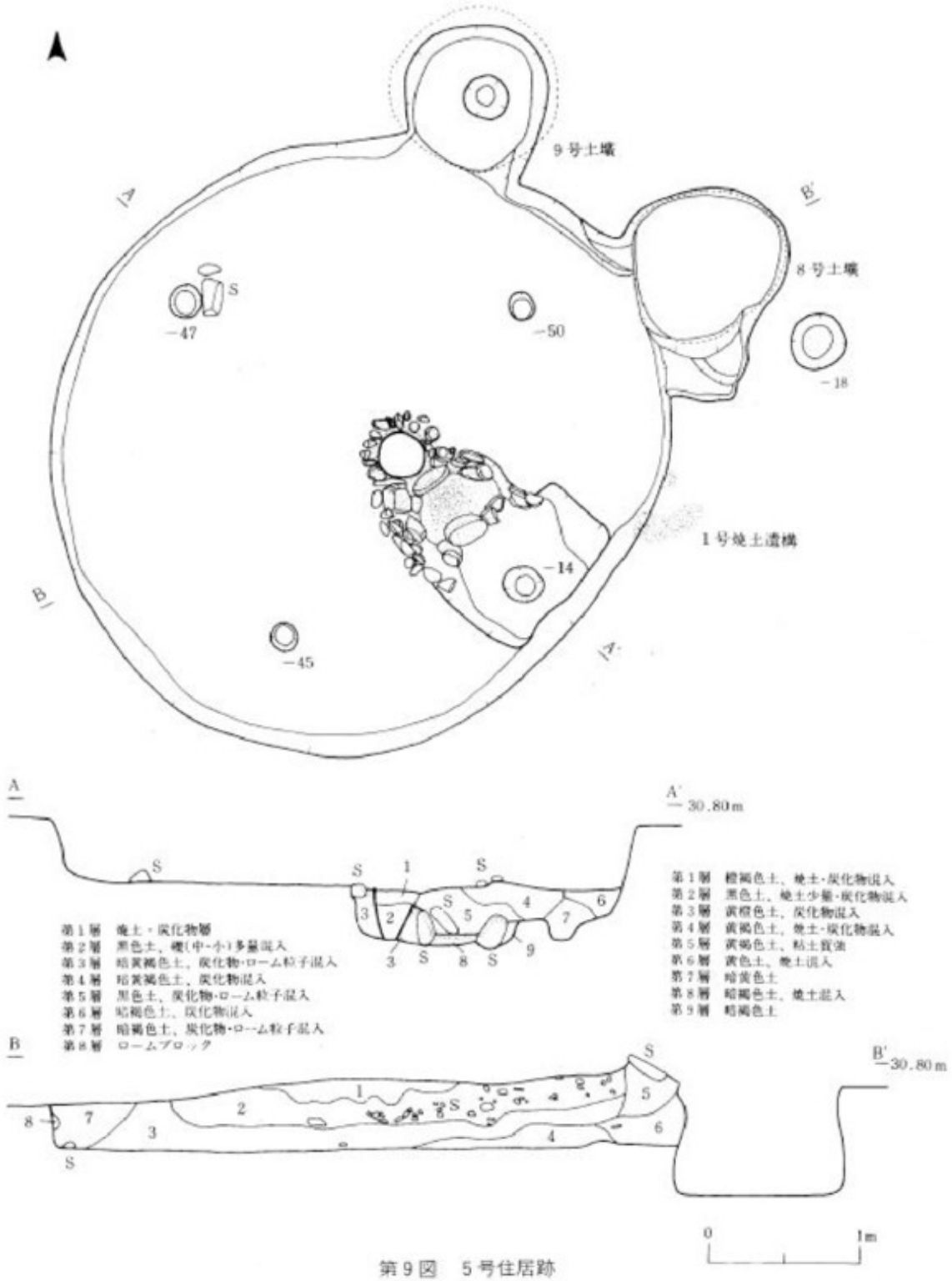
調査区の西側で検出された。

プランは長軸2.8m、短軸2.7mの隅丸方形を呈する。確認面からの深さは60cmであるが、深さ30cmの面を貼り床としている。壁はほぼ垂直に立ち上がるが西側は貼り床の面で段が付く。ピットは住居外に５個検出されたが、主柱穴は不明である。カマドは西壁の南側に構築されている。袖部は黄色粘土で構築されているが、南袖の一部が残存するのみである。燃焼部は火熱を受けて赤変し、円柱状の石を立てて支脚としている。煙道部は溝状に検出され、壁外へ50cm延びる。床は黄色粘土による貼り床で、ほぼ平坦である。

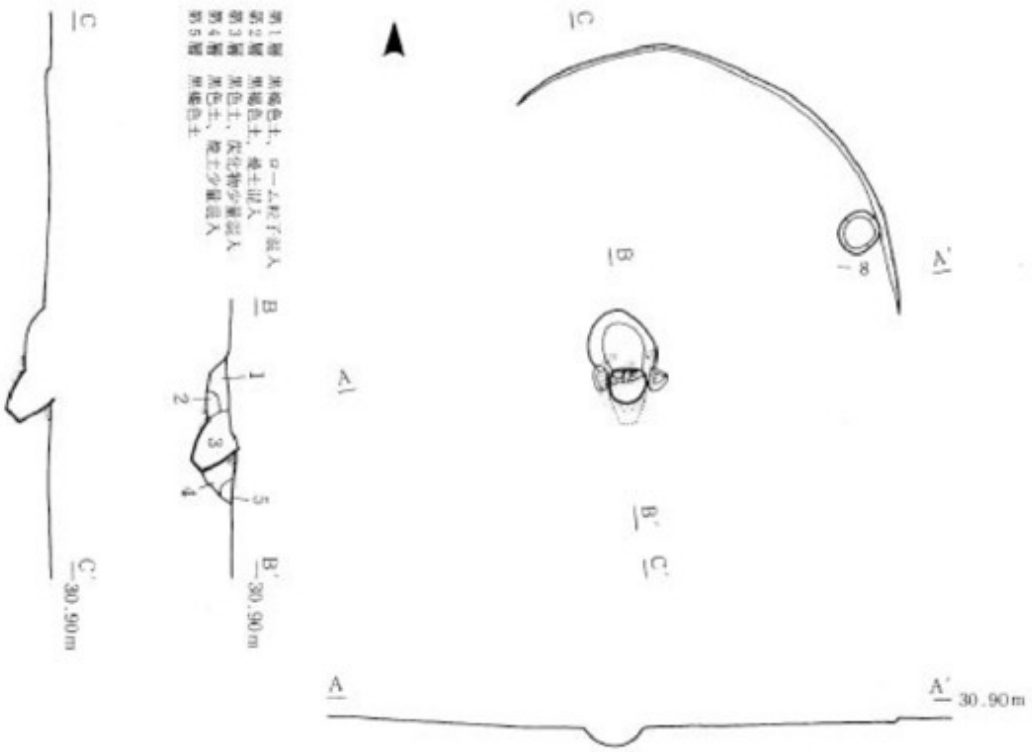
出土遺物

土器（第14図16）

16は煙道部出土の赤褐色土器坏である。底部切り離し回転糸切り無調整で、底部より内湾しなが


9号土壙
8号土壙
1号焼土遺構
A
A'
B
B'
S
−47
−50
−18
−14
−45
30.80m
第1層　焼土・炭化物層
第2層　黒色土、礫(中・小)多量混入
第3層　暗黄褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第4層　暗黄褐色土、炭化物混入
第5層　黒色土、炭化物・ローム粒子混入
第6層　暗褐色土、炭化物混入
第7層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第8層　ロームブロック
第1層　橙褐色土、焼土・炭化物混入
第2層　黒色土、焼土少量・炭化物混入
第3層　黄橙色土、炭化物混入
第4層　黄褐色土、焼土・炭化物混入
第5層　黄褐色土、粘土質強
第6層　黄色土、焼土混入
第7層　暗黄色土
第8層　暗褐色土、焼土混入
第9層　暗褐色土
0
1m

第9図　5号住居跡



第10図　6号住居跡

ら立ち上がる。

溝状土壙（第19図）

調査区の西側で1基検出された。

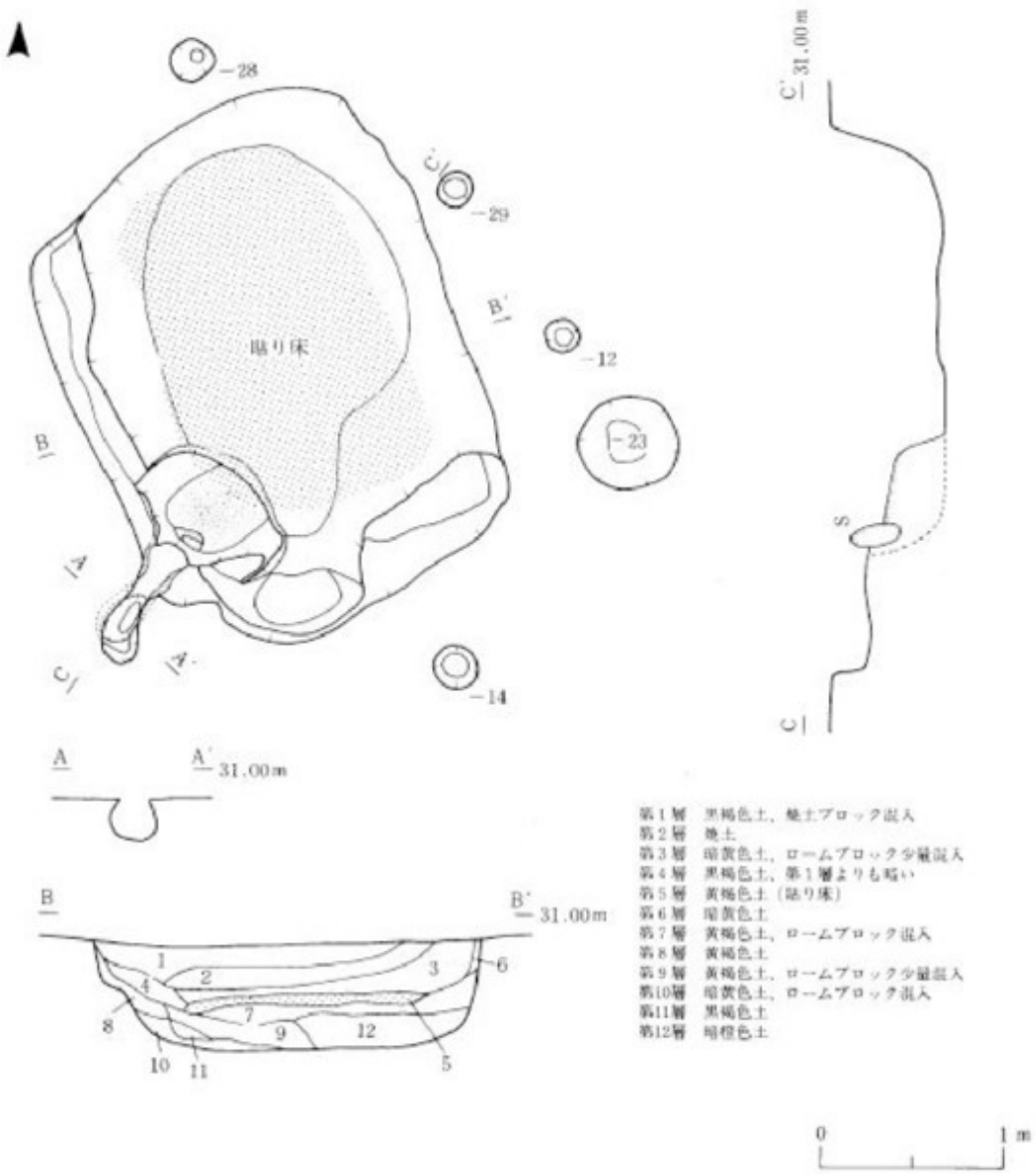
プランは長軸2.4m、短軸45～50cmの溝状を呈し、確認面からの深さは90cmである。縦断面は両端が壁外へ張り出し、横断面は「Y」字状を呈する。出土遺物はない。

土器埋設遺構（第19図）

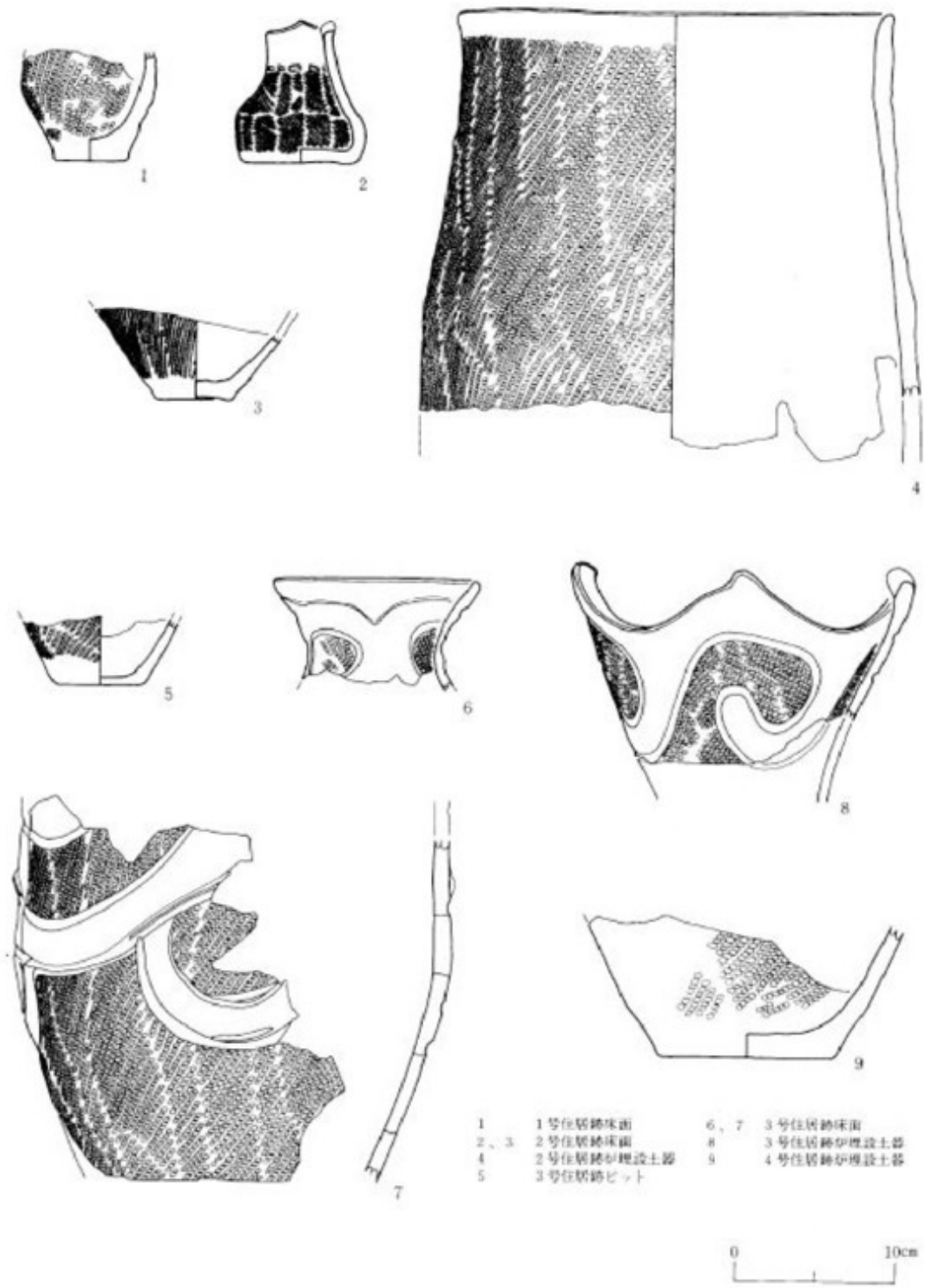
調査区の西側で検出された。

6基検出され、2、3、6号はII層、他はローム面での確認である。1～5号は深鉢形土器、6号は鉢形土器で、3、5号は底部穿孔である。6号の鉢形土器の中からは磨製石斧が10個入った状態で検出された。

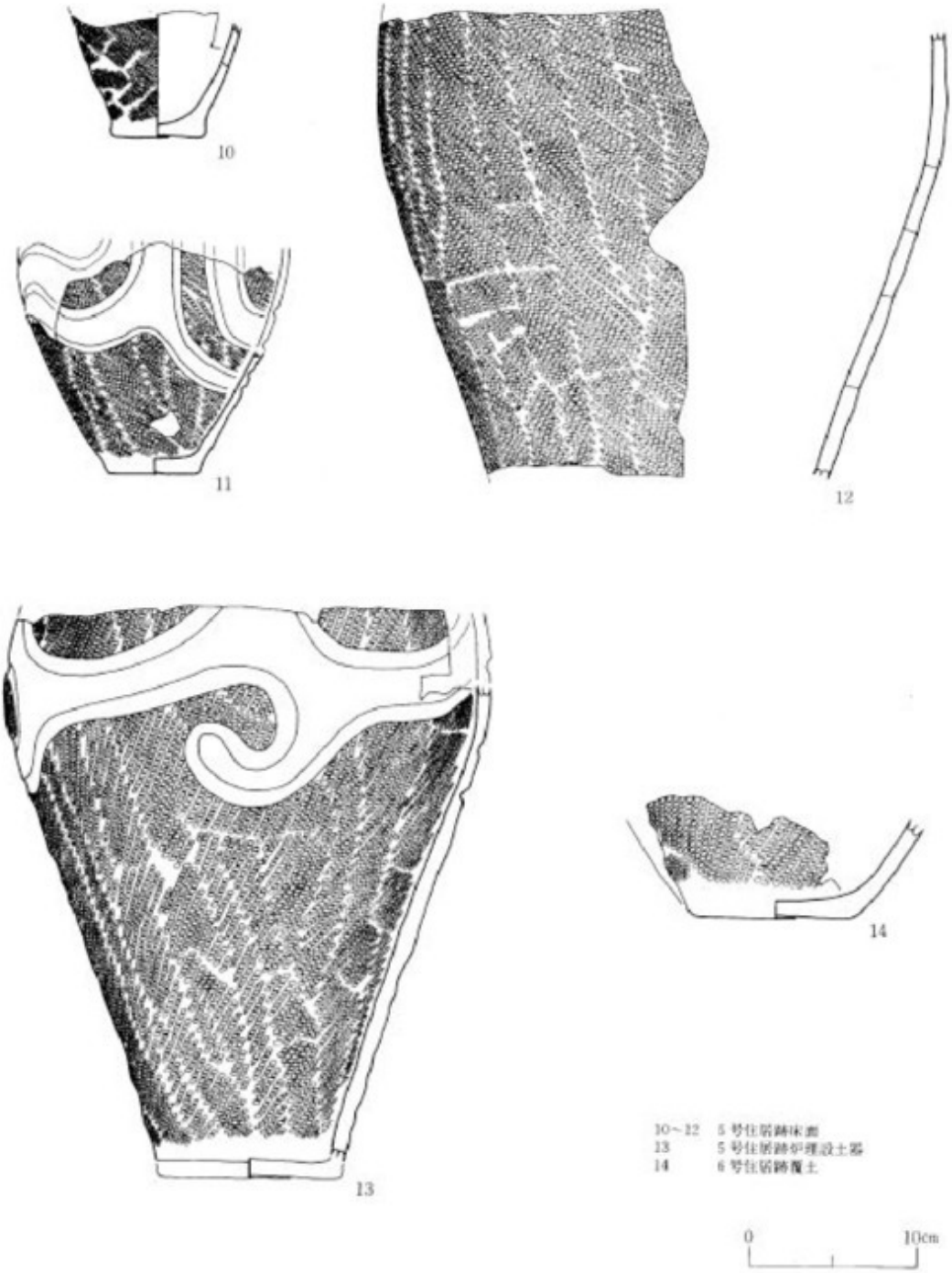
出土遺物


-28
-29
-12
-23
-14
貼り床
C'
31.00m
C
S
A
A'
31.00m
B
B'
31.00m
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
第1層　黒褐色土、地土ブロック混入
第2層　地土
第3層　暗黄色土、ロームブロック少量混入
第4層　黒褐色土、第1層よりも暗い
第5層　黄褐色土（貼り床）
第6層　暗黄色土
第7層　黄褐色土、ロームブロック混入
第8層　黄褐色土
第9層　黄褐色土、ロームブロック少量混入
第10層　暗黄色土、ロームブロック混入
第11層　黒褐色土
第12層　暗橙色土
0
1m

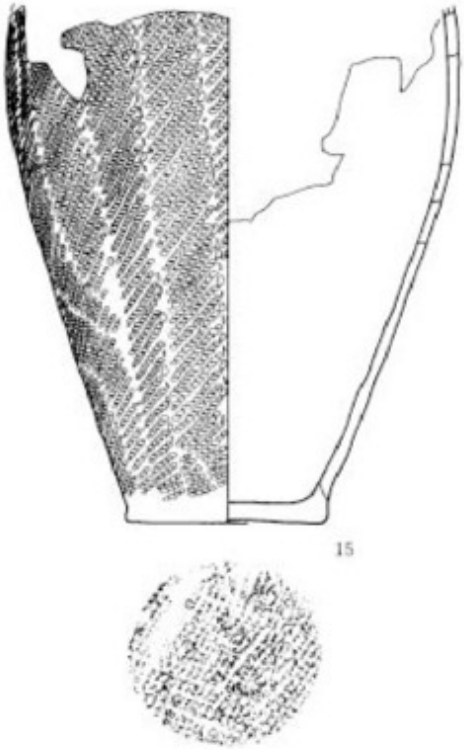
第11図　7号住居跡



第12図　遺構内出土土器



第13図　遺構内出土土器



15　6号住居跡り埋設土器
16　7号住居跡カマド埋設部

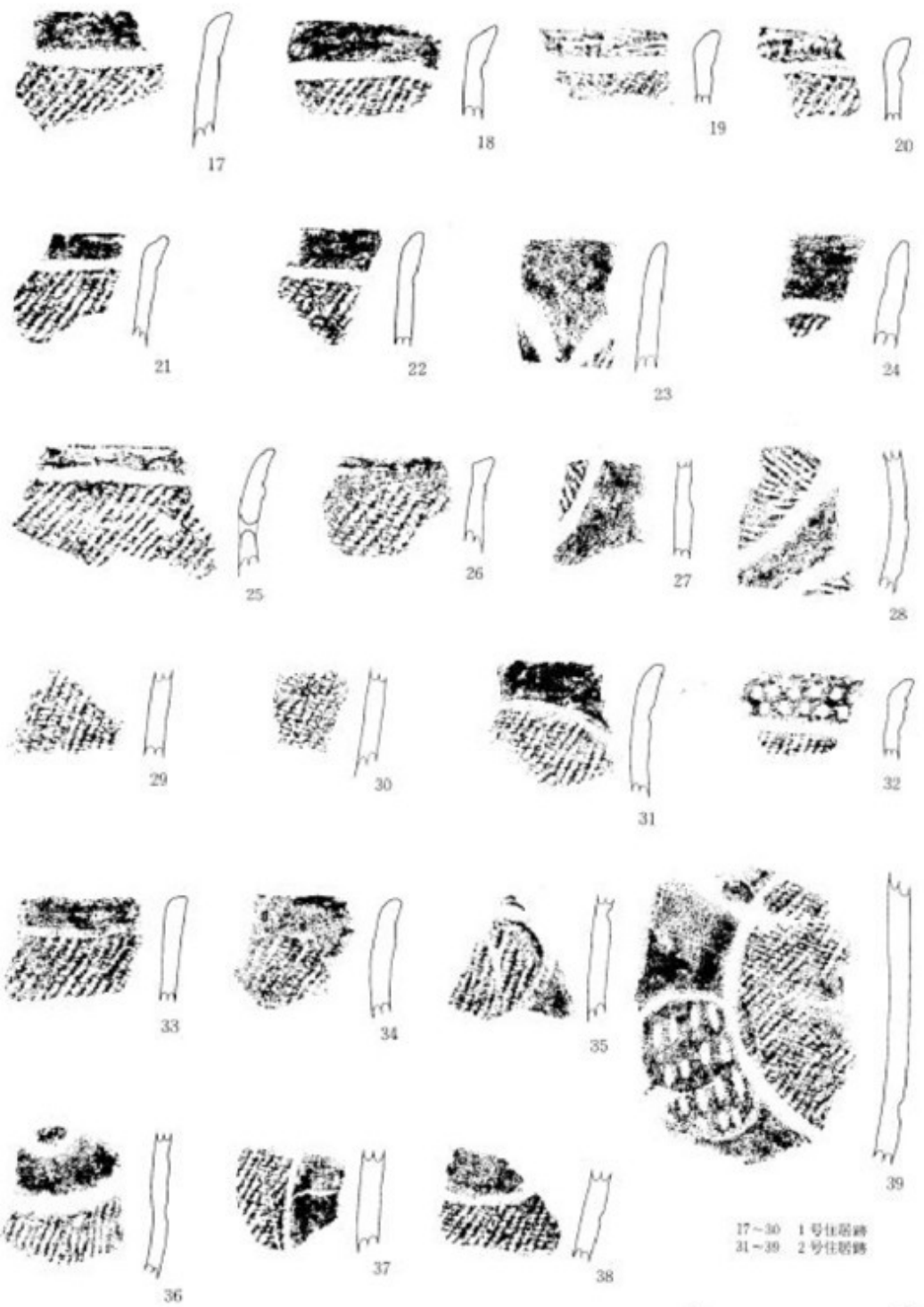
第14図　遺構内出土土器

土器（第21～23図68～74）

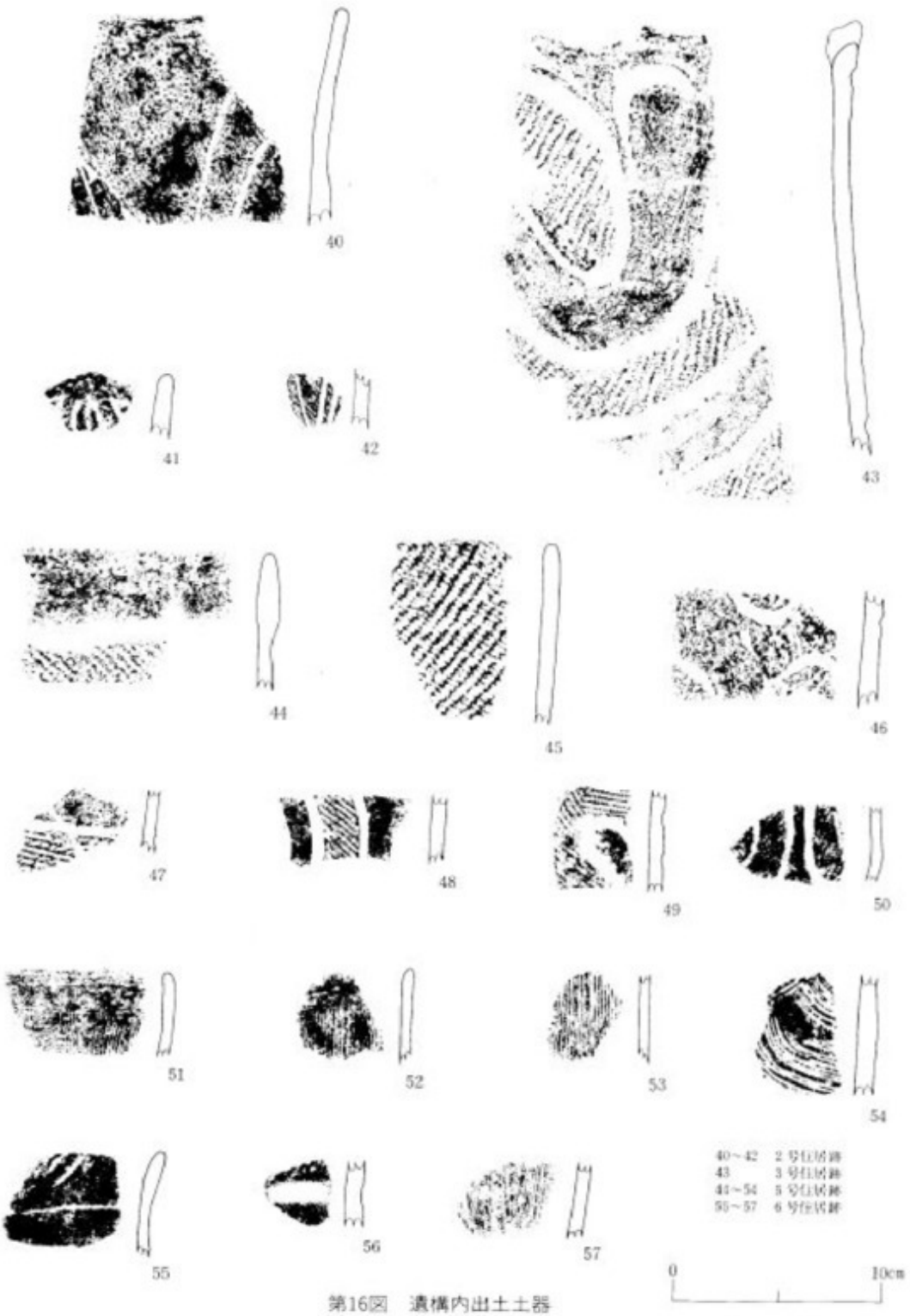
69～73は深鉢形土器で、地文のみのものである。69は下半分で、地文はＬＲ単節斜縄文（縦・横・斜位回転）である。70は下半分で、地文はＬＲ単節斜縄文（横・斜位回転）である。71、73は口縁部が緩く内湾しながら立ち上がり、底部穿孔である。地文はＬＲ単節斜縄文（横位回転）である。72は口縁部を欠き、地文はＬＲ単節斜縄文（横位回転）である。68、74は同一個体で、68は口縁部である。口縁部が緩く内湾する鉢形土器である。口唇部には２個１対の小突起をもち、口縁部には平行沈線が巡る。地文はＬＲ単節斜縄文（横位回転）である。

石器（第24、25図６～15）

６～15は磨製石斧である。６、７は細身、12～15の刃部は丸みのあるものである。石質は凝灰岩のものが多い。



第15図　遺構内出土土器



第16図　遺構内出土土器

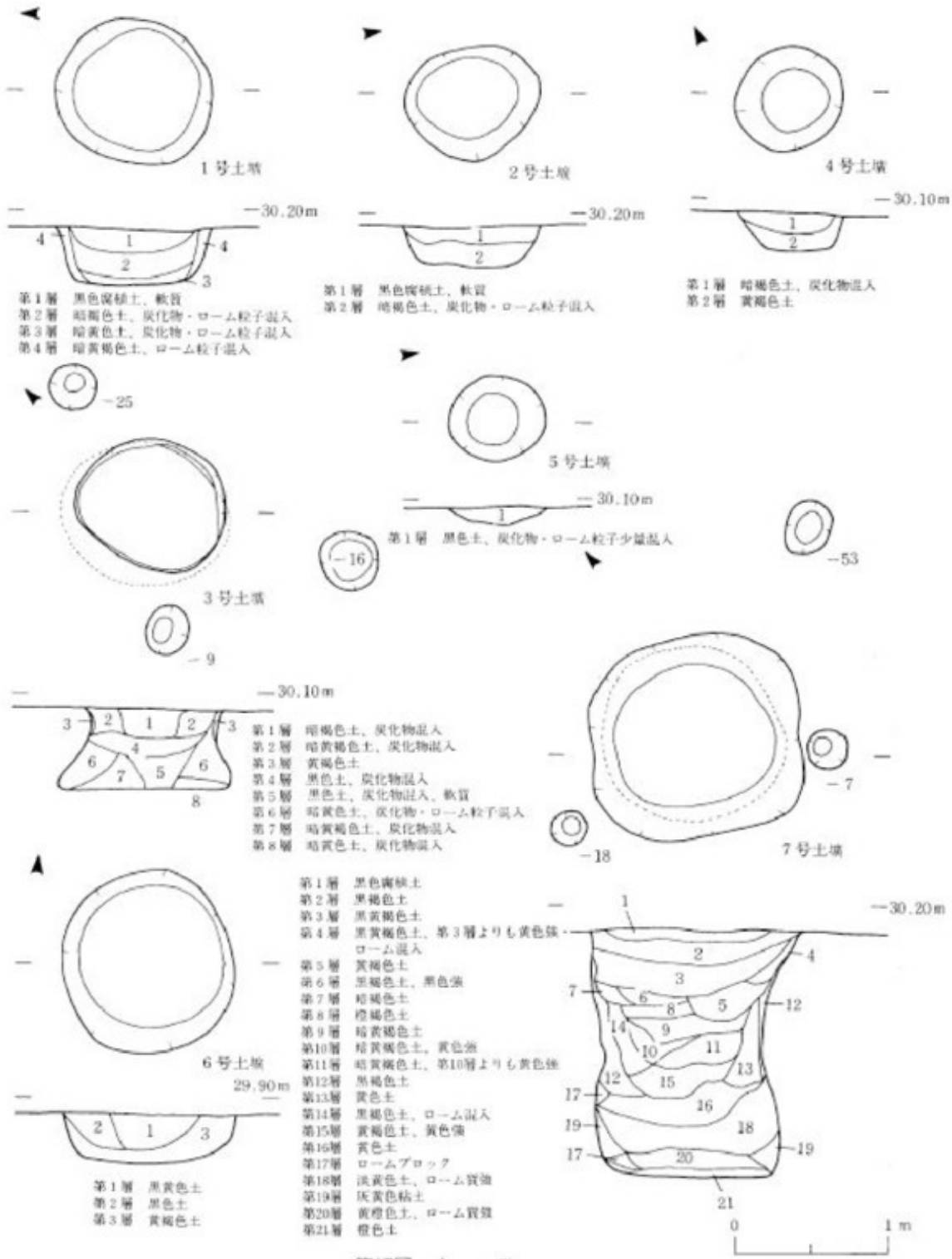
土 壙 一 覧 表

番号	規模(cm) 長軸	短軸	深さ	平面形	断面形	出土遺物
1	105	96	37	楕円形	3	
2	90	75	27	楕円形	1	
3	98	83	53	楕円形	5	
4	74	67	26	楕円形	2	
5	62	56	12	楕円形	1	
6	120	110	32	楕円形	3	
7	154	150	165	楕円形	4	第21図59～63(縄文中期～後期)
8	112	105	72	楕円形	4	第21図64、65(縄文中期)
9	95		100	円形	6	第20図58、第21図66(縄文後期)、第24図4(播器)
10	115	90	45	楕円形	4	第21図67(縄文後期)、第24図5(石錘)
11	70	62	22	楕円形	1	
12	94	75	25	隅丸方形	2	
13	74	50	10	隅丸方形	1	
14	115	93	10	隅丸方形	2	
15	105	92	12	楕円形	1	

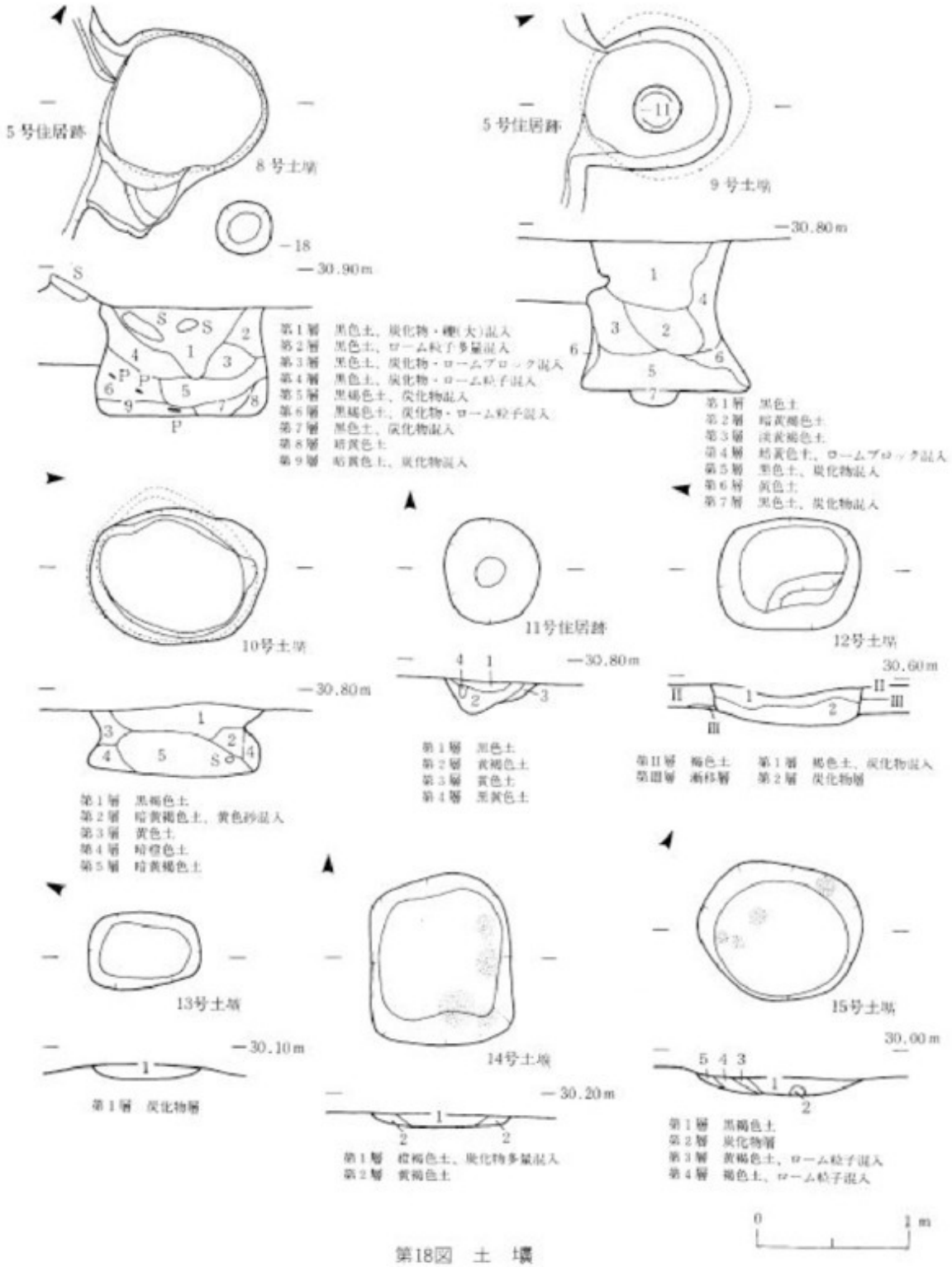
焼土遺構（第19図）

調査区の西側で検出された。

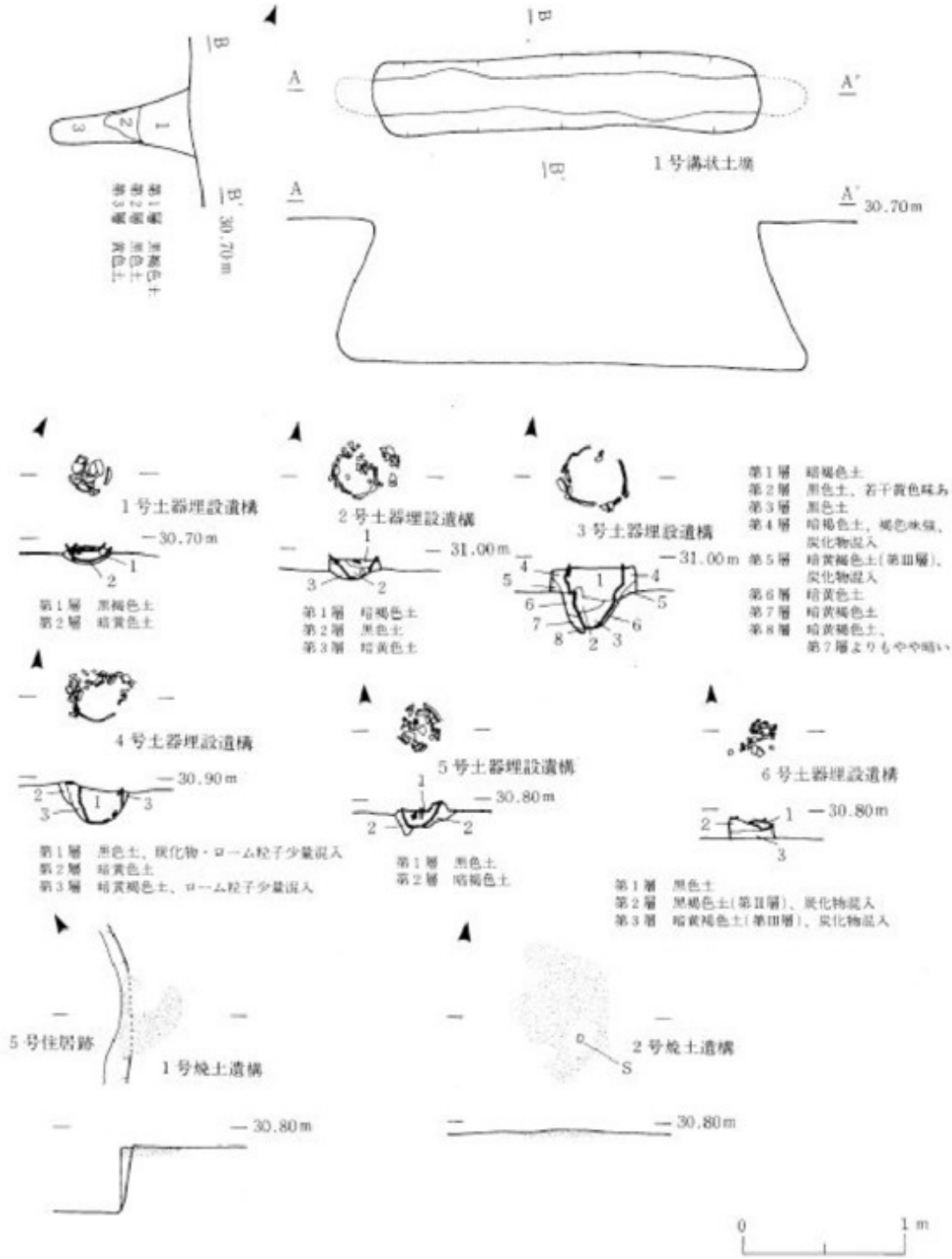
2基検出され、ローム面での確認である。1号は5号住居跡より新しく、焼痕は長軸55cm、短軸40cmである。2号には拳大の石が1個認められ、焼痕は長軸90cm、短軸60cmである。いずれに強く火熱を受けている。


1号土壙
30.20m
第1層 黒色腐植土、軟質
第2層 暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第3層 暗黄色土、炭化物・ローム粒子混入
第4層 暗黄褐色土、ローム粒子混入
2号土壙
30.20m
第1層 黒色腐植土、軟質
第2層 暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
4号土壙
30.10m
第1層 暗褐色土、炭化物混入
第2層 黄褐色土
5号土壙
30.10m
第1層 黒色土、炭化物・ローム粒子少量混入
3号土壙
30.10m
第1層 暗褐色土、炭化物混入
第2層 暗黄褐色土、炭化物混入
第3層 黄褐色土
第4層 黒色土、炭化物混入
第5層 黒色土、炭化物混入、軟質
第6層 暗黄色土、炭化物・ローム粒子混入
第7層 暗黄褐色土、炭化物混入
第8層 暗黄色土、炭化物混入
7号土壙
6号土壙
29.90m
第1層 黒黄色土
第2層 黒色土
第3層 黄褐色土
30.20m
第1層 黒色腐植土
第2層 黒褐色土
第3層 黒黄褐色土
第4層 黒黄褐色土、第3層よりも黄色強・ローム混入
第5層 黄褐色土
第6層 黒褐色土、黒色強
第7層 暗褐色土
第8層 橙褐色土
第9層 暗黄褐色土
第10層 暗黄褐色土、黄色強
第11層 暗黄褐色土、第10層よりも黄色強
第12層 黒褐色土
第13層 黄色土
第14層 黒褐色土、ローム混入
第15層 黄褐色土、黄色強
第16層 黄色土
第17層 ロームブロック
第18層 淡黄色土、ローム質強
第19層 灰黄色粘土
第20層 黄橙色土、ローム質強
第21層 橙色土
0
1m

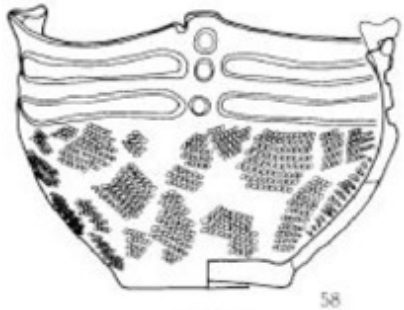
第17図　土　壙


5号住居跡
8号土壙
−18
−30.90m
第1層 黒色土、炭化物・礫(大)混入
第2層 黒色土、ローム粒子多量混入
第3層 黒色土、炭化物・ロームブロック混入
第4層 黒色土、炭化物・ローム粒子混入
第5層 黒褐色土、炭化物混入
第6層 黒褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第7層 黒色土、炭化物混入
第8層 暗黄色土
第9層 暗黄色土、炭化物混入
5号住居跡
9号土壙
−30.80m
第1層 黒色土
第2層 暗黄褐色土
第3層 淡黄褐色土
第4層 暗黄色土、ロームブロック混入
第5層 黒色土、炭化物混入
第6層 黄色土
第7層 黒色土、炭化物混入
10号土壙
−30.80m
第1層 黒褐色土
第2層 暗黄褐色土、黄色砂混入
第3層 黄色土
第4層 暗橙色土
第5層 暗黄褐色土
11号住居跡
−30.80m
第1層 黒色土
第2層 黄褐色土
第3層 黄色土
第4層 黒黄色土
12号土壙
30.60m
第II層 褐色土
第III層 漸移層
第1層 褐色土、炭化物混入
第2層 炭化物層
13号土壙
−30.10m
第1層 炭化物層
14号土壙
−30.20m
第1層 橙褐色土、炭化物多量混入
第2層 黄褐色土
15号土壙
30.00m
第1層 黒褐色土
第2層 炭化物層
第3層 黄褐色土、ローム粒子混入
第4層 褐色土、ローム粒子混入
0
1m

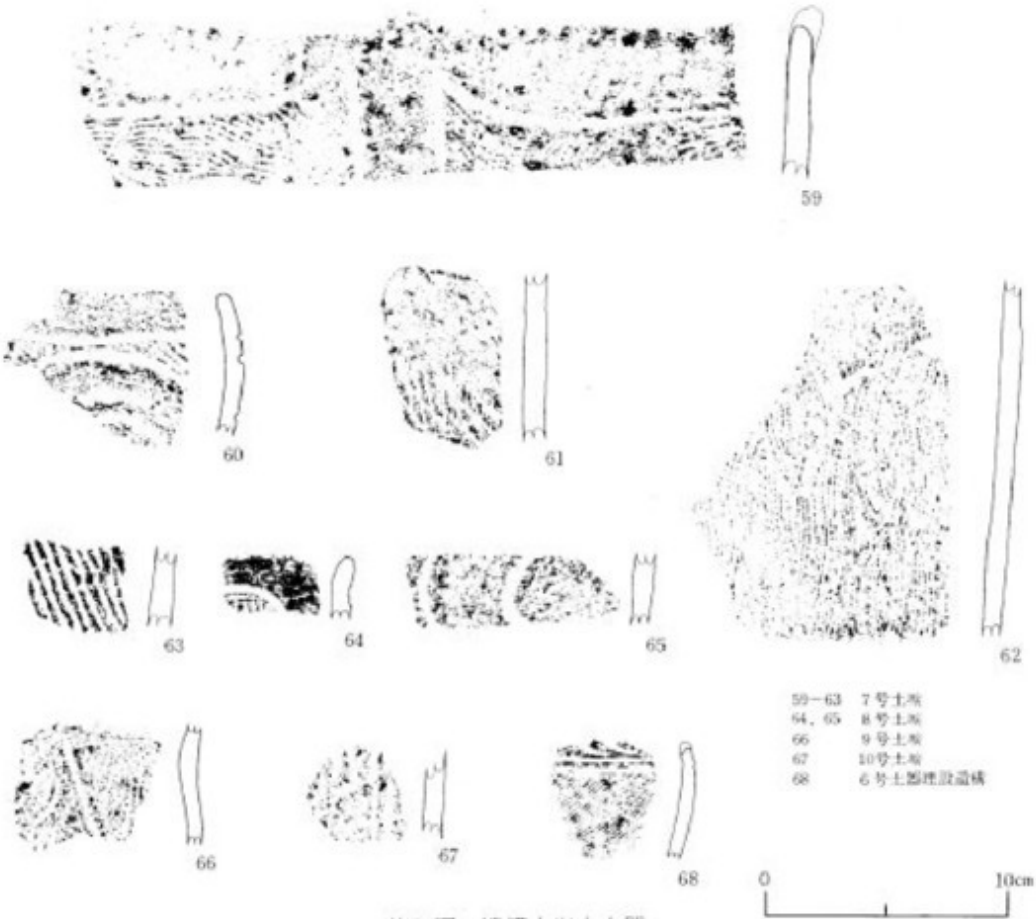
第18図　土　壙



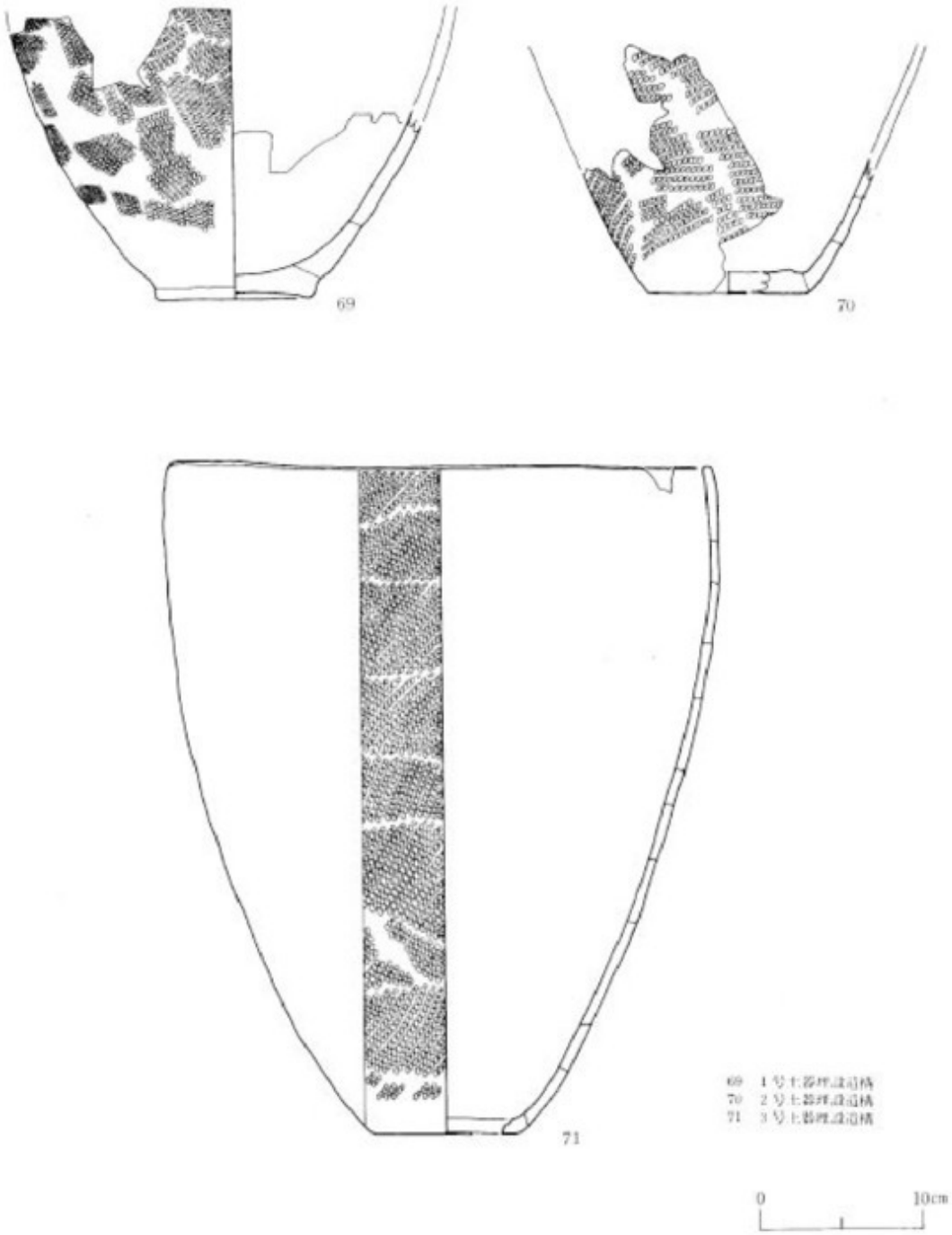
第19図　溝状土壙、土器埋設遺構、焼土遺構



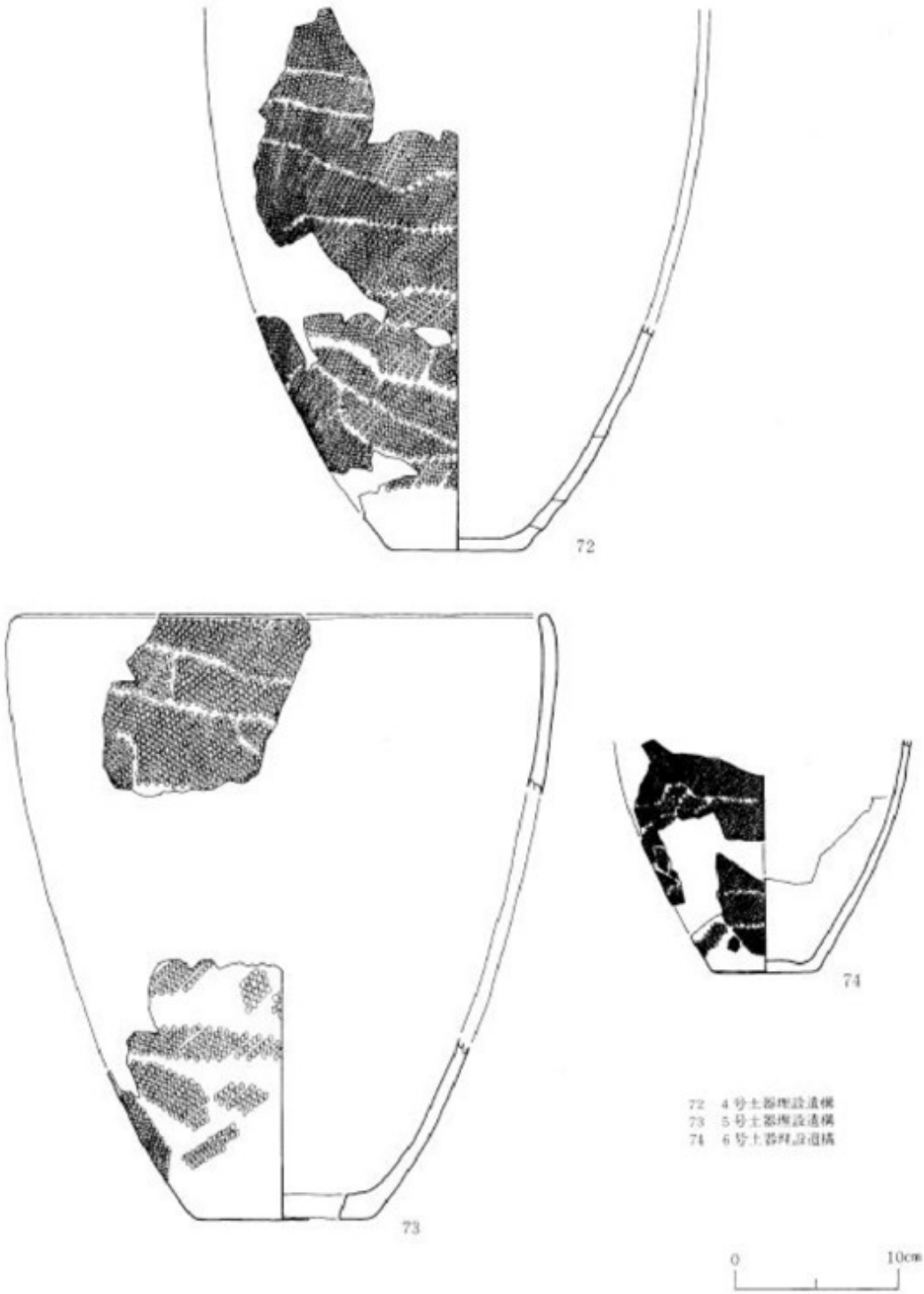
第20図　遺構内出土土器



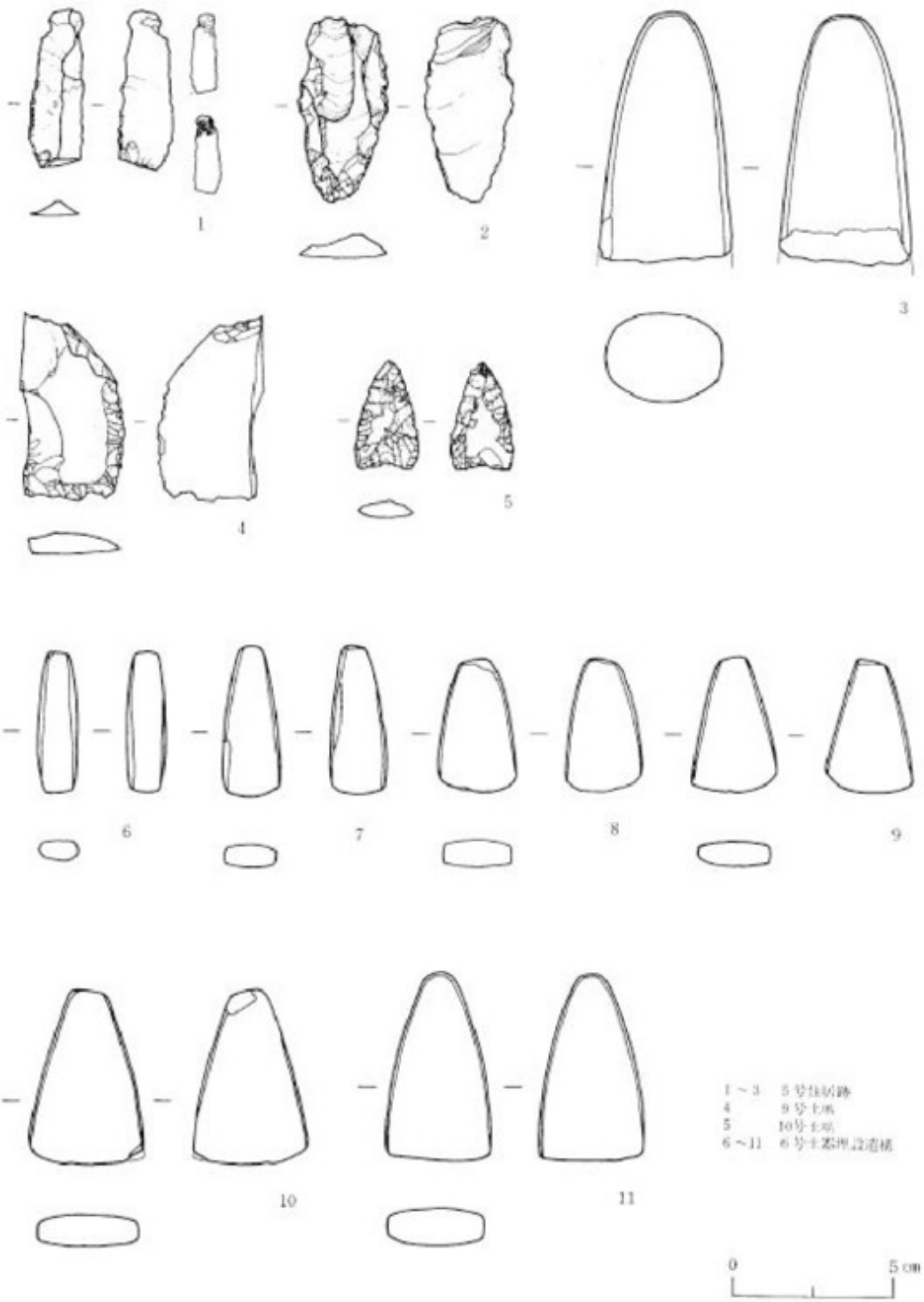
第21図　遺構内出土土器



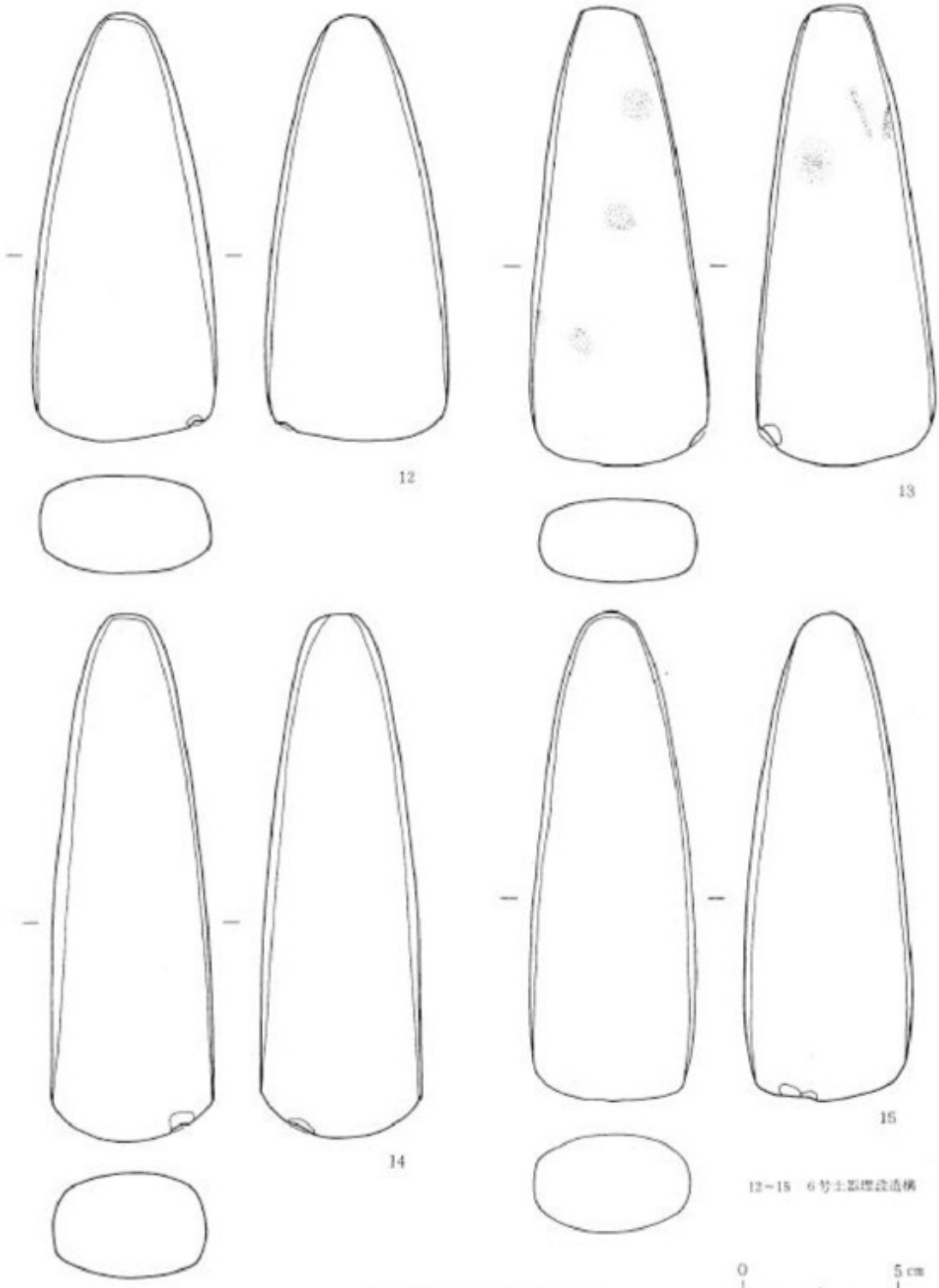
第22図　遺構内出土土器



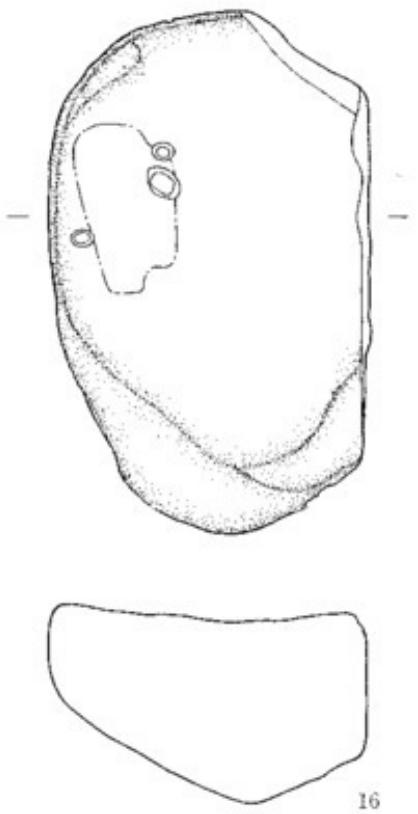
第23図　遺構内出土土器

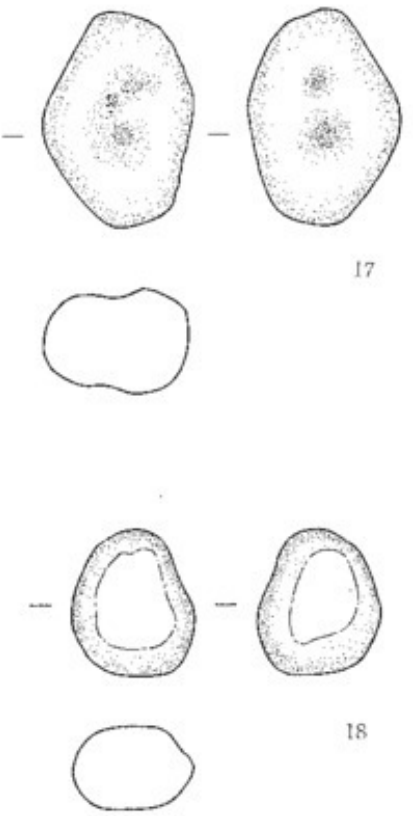


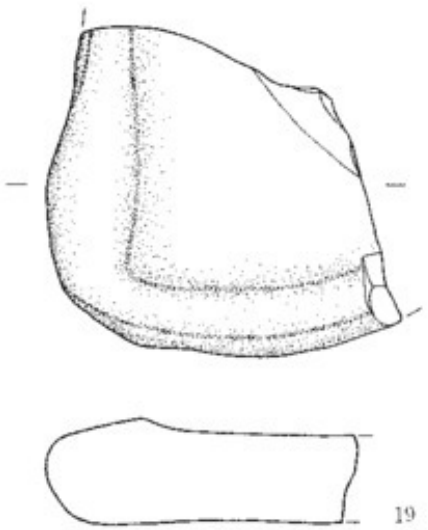
第24図　遺構内出土石器

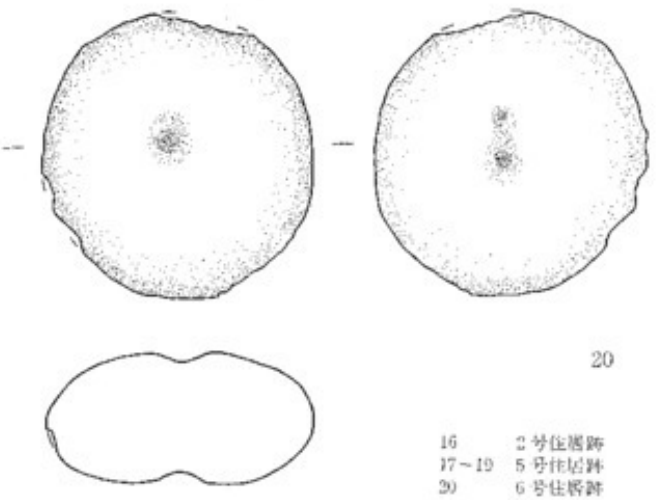


第25図　遺構内出土石器









16　2号住居跡
17～19　5号住居跡
20　6号住居跡

16　0　20cm
17～20　0　10cm

第26図　遺構内出土石器

出土土器

遺構内・外出土土器を施文様により群に大別し、類に細別した。なお、遺物包含層における層位的な区別は認められなかった。

第Ⅰ群土器（第28図77～79）

半截竹管状工具により半隆起線文を施すものである。77、78は同一個体である。口縁部に縦位方向に半隆起線を施し、頸部には2～3条の半隆起線が巡る。胴部は撚糸文と考えられる。79は胴部で、半隆起線による直線・曲線文を施すものである。文様は縦位方向に展開する。

第Ⅱ群土器（第12図2、4、6～8、第13図11、13、第15図17～28、31～39、第16図43、44、46～50、55、56、第21図59、60、64、65、第28図80～100）

沈線区画の磨消帯を有するものである。口縁部が磨消無文帯で、胴部地文のものも含めた。

1類（6～8、11、13、23、27、28、31、32、35～39、43、46～50、56、59、60、64、65、80～98）

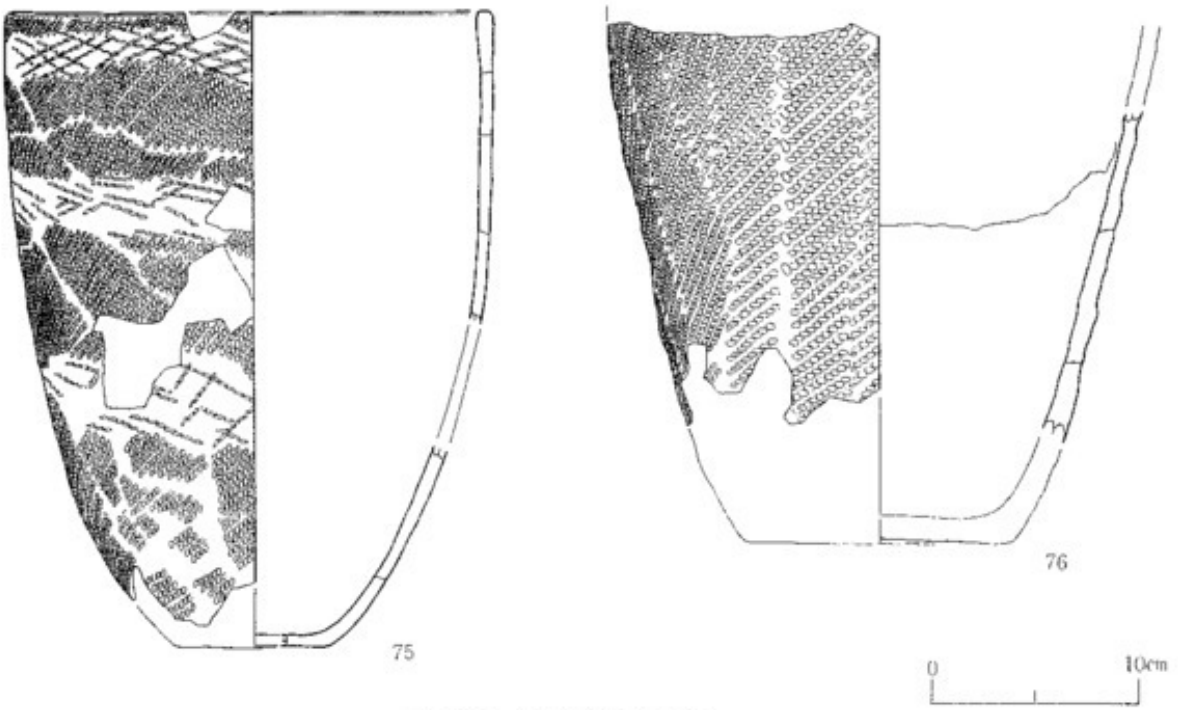
沈線区画の磨消帯を有するものである。磨消帯は「J」字状、「U」字状、波状等の曲線的なもので、刺突文を加飾するものもある。深鉢形土器が主体で、口縁部は緩く外反するもの、直立するものが多い。6は頸部がくぼむ鉢形土器で、沈線区画の磨消帯は4単位構成である。7は深鉢形土器の胴部で、胴部中程の磨消帯連絡部分には稜線が認められる。8は4単位の山形口縁をもつ鉢形土器で、胴部「J」字状の磨消帯は4単位構成である。59は口縁部が直立する深鉢形土器である。口唇部には小突起をもち、4単位と考えられる。この小突起下より沈線区画の磨消帯が垂下し、口縁部は磨消無文帯となっている。地文はLr無節斜縄文（縦位回転）である。

2類（2、4、17～22、24～26、33、34、44、55、99、100）

口縁部が磨消無文帯で、胴部地文のものである。磨消無文帯と地文部の境界である頸部に沈線を巡らすものがほとんどであるが、4、26、34には認められない。また、土器によっては1類の沈線区画の磨消帯を有するものに含まれるものもあると考えられる。口縁部が緩く外反する深鉢形土器が主体である。2の頸部には刺突文が巡る。

第Ⅲ群土器（第16図40～42、第20図58、第21図66、67、第29図105～108）

数条の沈線によって文様を作り出すものである。平行沈線文、直線文、曲線文、連鎖状文等で構成され、深鉢形土器が主体である。40は口縁部が緩く外反する深鉢形土器で、地文は撚糸文である。58は口縁部が内湾する鉢形土器である。口唇部には4個の突起をもち、各突起下には縦位に3個の円文を施す。この円文間には帯状の沈線文を2列施して連絡している。地文はLR単節斜縄文（縦



第27図　遺構外出土土器

位回転）で、底部は笹葉痕である。66、105、106には連鎖状文ないしは連鎖状Ｓ字文が施されている。

第Ⅳ群土器（第12図１、３、５、９、第13図10、12、14、第14図15、第15図29、30、第16図45、51～54、57、第21図61～63、第22図69～71、第23図72、73、第27図75、76、第28図101～104、第29図109～125）

地文のみのものを一括した。斜縄文、撚糸文、条痕文を施すものである。

１類（１、３、５、９、10、12、14、15、29、30、45、69～73、76、101～104）

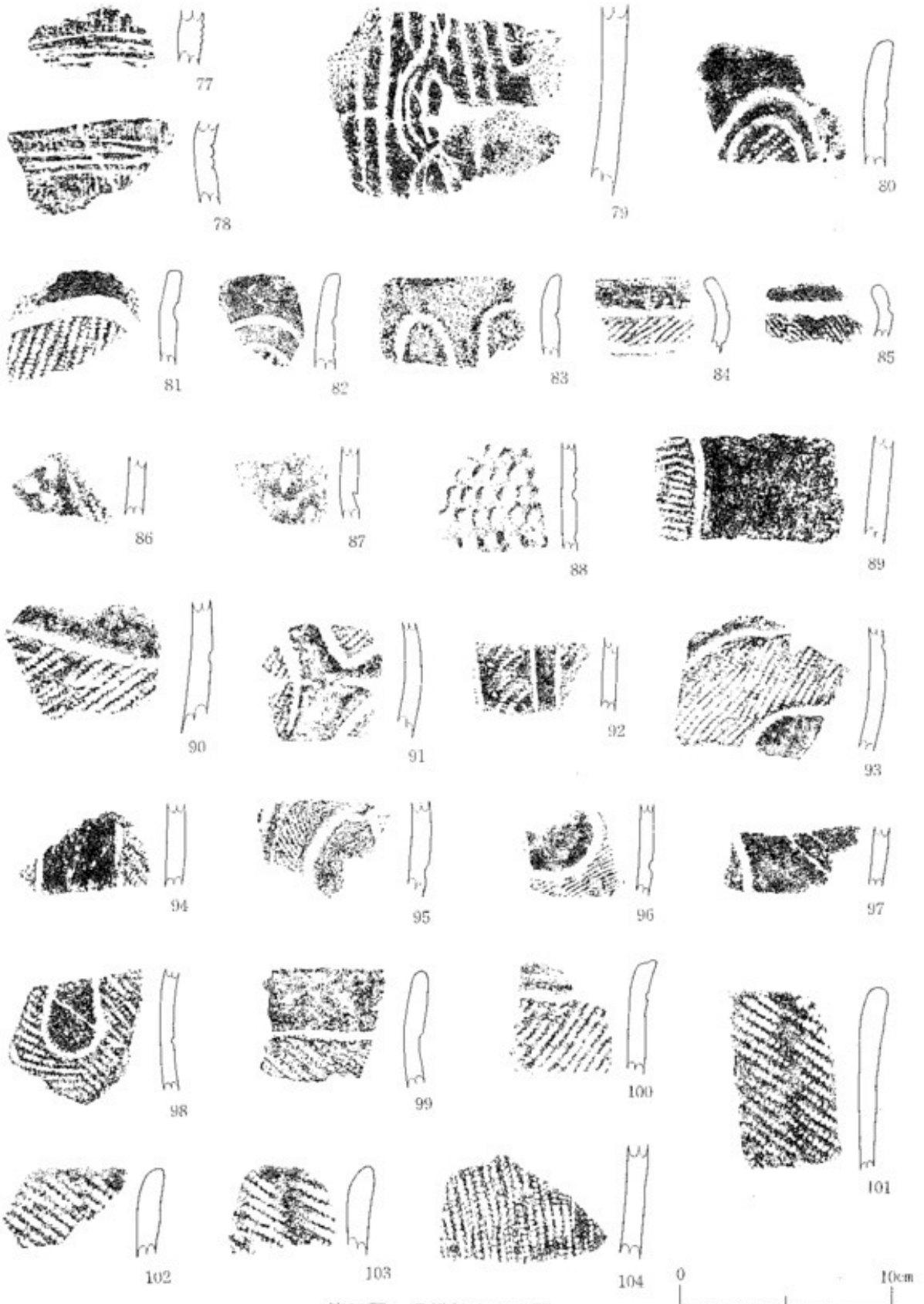
単節斜縄文を施すものである。ＬＲ及びＲＬ縄文原体を縦位、横位に回転施文するもので、深鉢形土器が主体である。

２類（61、63、75、109～116）

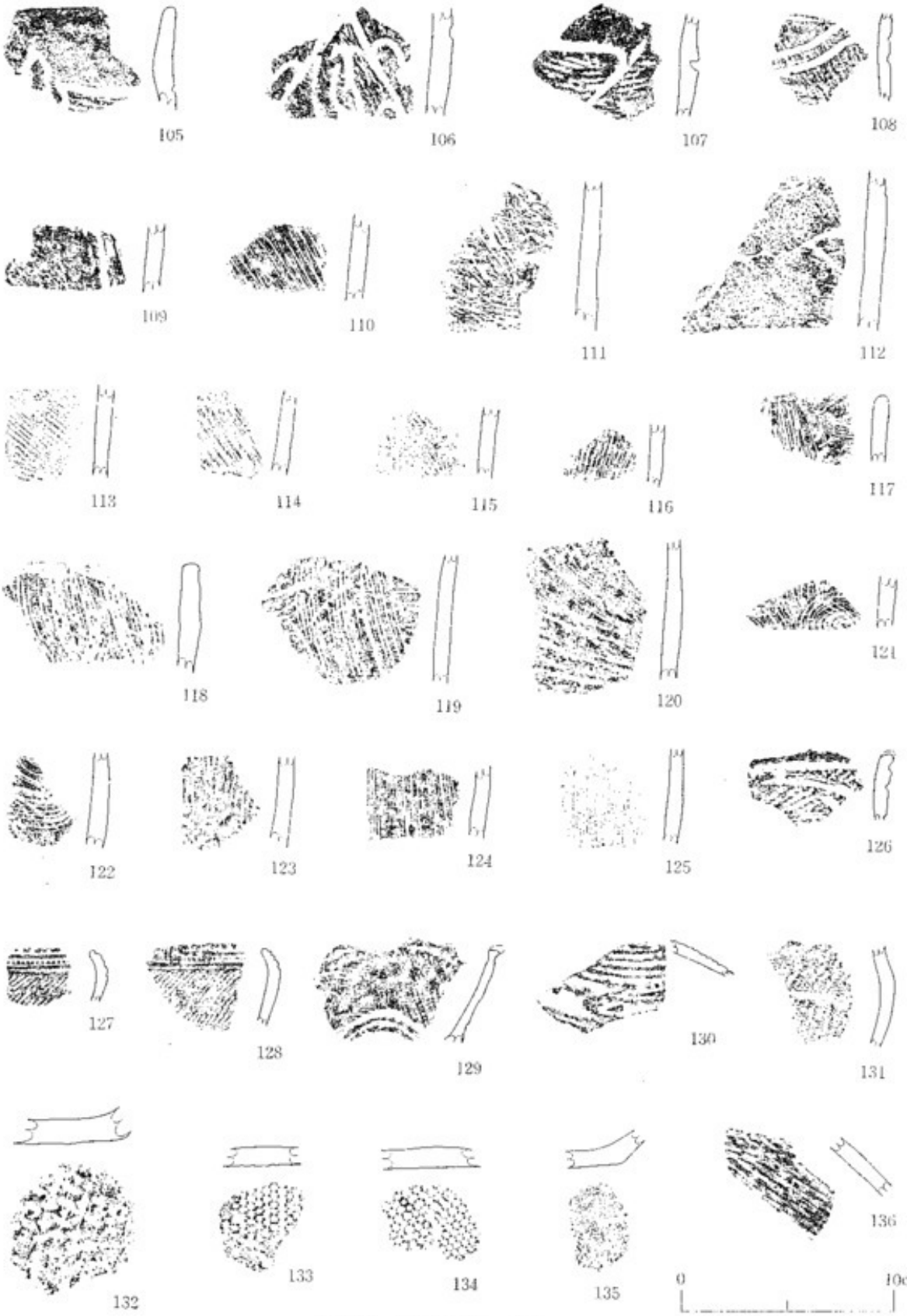
撚糸文を施すもので、全て深鉢形土器である。75は口縁部が直立する深鉢形土器である。胴部にＬＲ単節斜縄文（横位回転）施文後に、網目状撚糸文を３段施している。109、111、112には沈線が認められる。

３類（51～54、57、62、117～125）

条痕文を施すものである。条痕は器面に対して縦位、斜位に施すもので、直線、曲線、弧状をなす。深鉢形土器が主体である。



第28図　遺構外出土土器



第29図　遺構外出土土器

第Ⅴ群土器（第21図68、第23図74、第29図126～130）

入組文、刻目文、沈線文等を施すものである。

1類（126）

入組文を施すものである。126は口縁部が緩く外反する鉢形土器である。口唇部には2個1対の小突起をもち、刻目が施される。地文はＬＲ単節斜縄文（横位回転）である。

2類（127、128）

平行沈線間に刻目文が施されるものである。127、128は同一個体で、口縁部が内湾する鉢形土器である。口唇部にも刻目が施されている。

3類（68、74、129）

平行沈線が巡るものである。68、74は同一個体で、口縁部が緩く内湾する鉢形土器である。口唇部に2個1対の小突起をもち、口縁部に平行沈線が巡る。地文はＬＲ単節斜縄文（横位回転）である。129は台付鉢形土器である。口唇部に小突起をもち、台部付根付近に平行沈線が巡る。地文はＲＬ単節斜縄文（横位回転）である。

4類（130）

工字文を施すものである。130は壺形土器の肩部で、平行沈線間には刻目文が2条認められる。

第Ⅵ群土器（第29図131）

刷毛目調整痕の認められるものである。131は甕形土器の胴部である。刷毛目調整後に地文を施すもので、地文はＬＲ単節斜縄文（横位回転）である。

第Ⅶ群土器（第29図132～134）

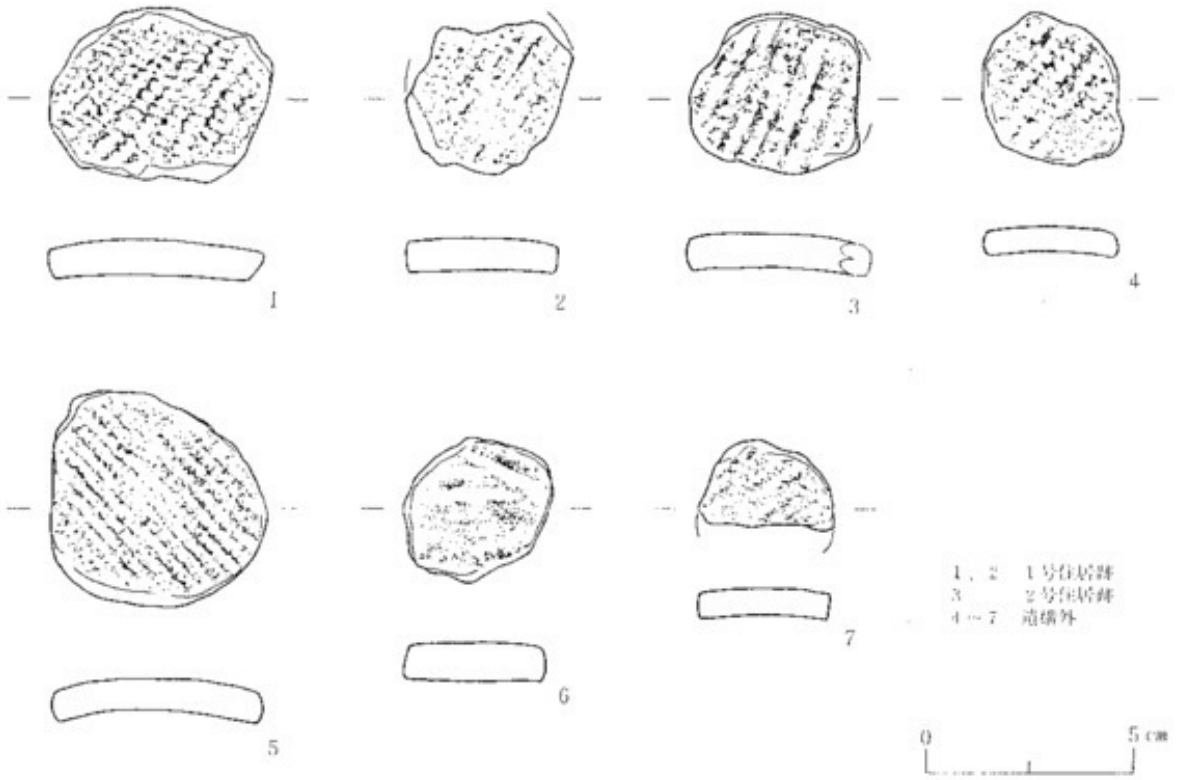
土器底部で、網代痕の認められるものである。これ以外には、15の深鉢形土器の底部に網代痕、58の鉢形土器の底部には笹葉痕が認められる。

第Ⅷ群土器（第14図16、第29図135、136）

赤褐色土器、須恵器である。16、135は赤褐色土器である。いずれも坏で、底部切り離し回転糸切り無調整である。136は須恵器である。甕の肩部で、表面には平行叩き板痕、内面にはロクロ痕が認められる。

土製品（第30図1～7）

1、2は1号住居跡、3は2号住居跡、他は遺構外出土である。全て再利用土製品で、土器片を再利用したものである。円形ないしは楕円形を呈するものである。



第30図　土製品

遺構外出土石器

石匙（第31図21）

横型で、石質は硬質頁岩である。

石槍（第31図22、23）

2点出土している。22は先端部が欠損し、23は中程から折損している。石質はいずれも硬質頁岩である。

ヘラ状石器（第31図24～27）

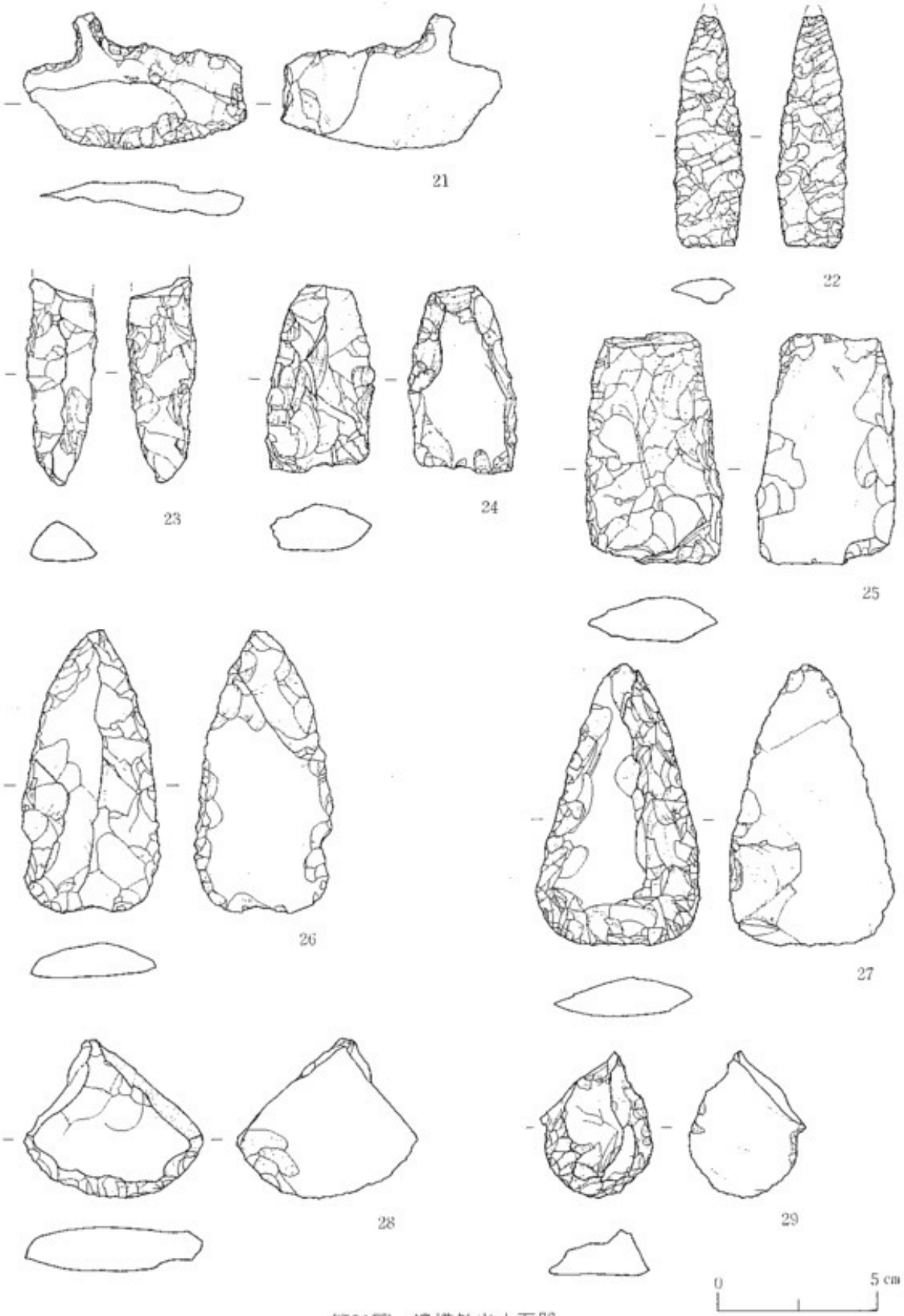
4点出土している。平面形が撥形ないしは短冊形をなすもので、両面調整のものが多い。石質は全て硬質頁岩である。

掻器（第31図28、29）

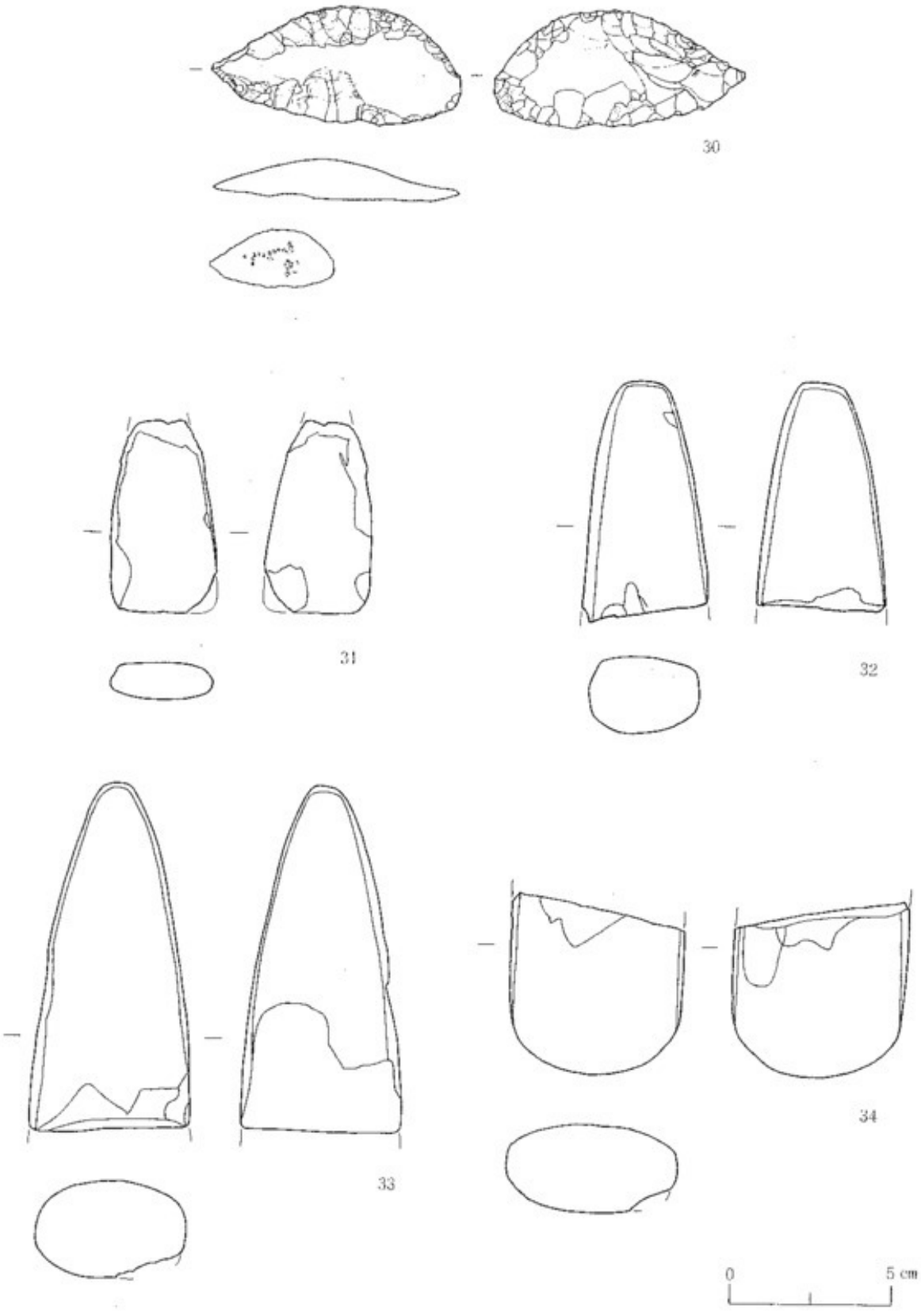
2点出土している。片面調整により刃部を作り出し、石質はいずれも硬質頁岩である。

鋸歯縁石器（第32図30）

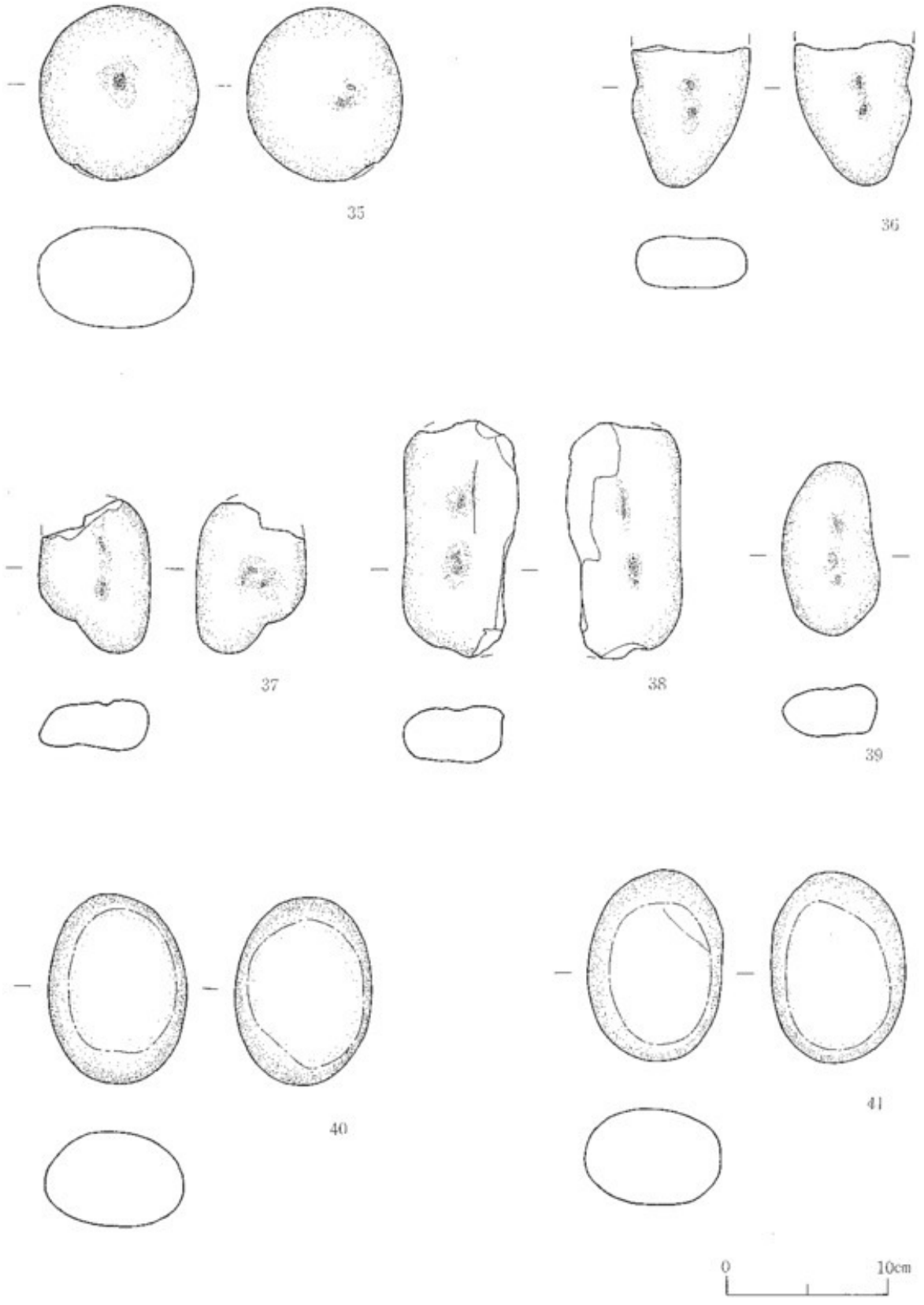
半月形をなすもので、両面調整である。アスファルトの付着が認められ、石質は硬質頁岩である。



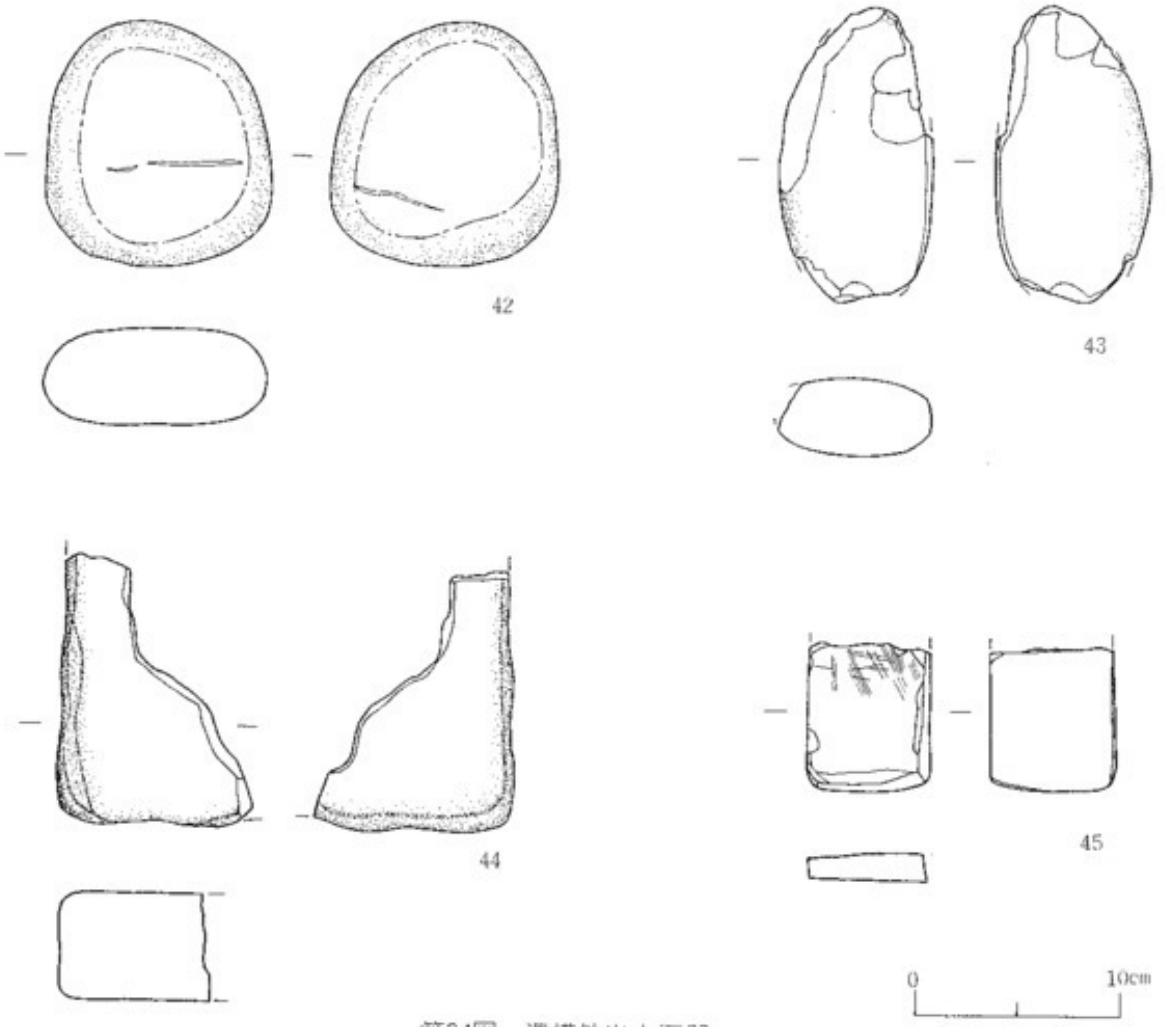
第31図　遺構外出土石器



第32図　遺構外出土石器



第33図　遺構外出土石器



第34図　遺構外出土石器

磨製石斧（第32図31～34）

4点出土している。全て破損しているもので、刃部形状は34が丸みをもつものである。31は小形磨製石斧で、アスファルトの付着が認められる。石質は凝灰岩である。

くぼみ石（第33図35～39）

5点出土している。くぼみ部が数ヶ所認められるもので、39は片面に他は両面に認められる。

磨石、敲石（第33、34図40～43）

4点出土している。両面が磨れるもので、側面に敲打痕の認められるものである。

石皿（第34図44）

破損しており、石質は安山岩である。

砥石（第34図45）

両面が良く磨れ、緩く湾曲している。石質は凝灰岩である。

まとめ

本遺跡は御所野台地の南側、南に面した標高約30mの台地縁辺部に位置する。以下、旧石器時代、縄文・平安時代の遺構と遺物について述べてみたい。

旧石器時代は、調査区の東端部約180m²の範囲より340点出土した。二次加工の認められる剥片が1点のみで、他は剥片であり石器、石核等は認められない。本台地で発掘調査された当該期の遺跡は、「下堤D遺跡」[注1]、「下堤G遺跡」[注2]、「地蔵田B遺跡」[注3]で、「狸崎B遺跡」[注4]は調査中である。また、「下堤A遺跡」[注5]からはナイフ形石器、石刃が各1点ずつ、「坂ノ上F遺跡」[注6]からは縦長剥片が1点出土している。昭和55年の分布調査で石刃が出土している「地蔵田A遺跡」は、平成5年度に発掘調査が予定されている。本遺跡は石器の出土がなく時期の決め手を欠く。隣接する遺跡は「地蔵田B遺跡」であり、現在調査中の「狸崎B遺跡」、平成5年度調査予定の「地蔵田A遺跡」を含めて、今後遺跡の時期、性格を検討する必要がある。

検出遺構は、竪穴住居跡7軒、土壙15基、溝状遺構1基、土器埋設遺構6基、焼土遺構2基である。竪穴住居跡は縄文時代中期が6軒、平安時代が1軒である。縄文時代の住居跡は、規模は径2.8mから4.7mで、1号・3号住居跡は小形、2号・5号住居跡は中形で、4号・6号住居跡は不明である。平面形は1号～3号・5号住居跡は楕円形で、他は不明である。主柱穴は2号・5号住居跡は3個、3号住居跡は4個である。本台地の当該期の主柱穴は4～5個が主体であり、3個のものは少ない。「下堤B遺跡」[注7]19号住居跡、「狸崎B遺跡」1号住居跡は複式炉を有し、類似する形態のものである。炉は1号・6号住居跡は土器埋設部＋掘り込み部、2号・3号・5号住居跡は石囲土器埋設部＋石組部＋掘り込み部からなる複式炉で、4号住居跡は土器埋設炉である。ただし、1号住居跡の炉埋設土器は抜き取られていた。6号住居跡の炉埋設土器は斜位に埋設し、掘り込み部が小規模であることなど本台地で今までに検出されている複式炉と比較すると特異な形態である。本年度調査を実施した「狸崎B遺跡」で1軒確認されたが、検出例が少ないことから今後類例の増加をまって検討する必要がある。本台地の当該期の集落では住居間の切り合いがほとんど認められないのが特徴であり、本遺跡においても重複は認められない。また、拡張、縮小、炉の作り替えなども認められない。ただし、4号住居跡は7号土壙に、5号住居跡は8号・9号土壙にそれぞれ切られており、土壙の方が新しい。住居跡の時期については炉埋設土器及び出土遺物から大木10式期に位置づけられる。本台地開発計画区域内からは31遺跡確認されているが、当該期の遺跡は20遺跡で他の時期と比較すると突出して多い。本遺跡は台地縁辺部に位置し、他の遺跡の立地と同様の形態であり、住居の数は本年度調査を実施した「狸崎B遺跡」同様少ない方である。平安時代の住居跡は1軒のみの検出である。長軸2.8m、短軸2.7mの隅丸方形を呈し、西壁の南側にカマドが付設される形態で、床は貼り床である。時期については煙道部より底部切り離し回転糸切り無調整の赤褐色土器坏が出土しており、9世紀後半から10世紀頃に位置づけられると考えられる。本台地で当

該期の住居跡が検出された遺跡は８遺跡で、「下堤Ｃ遺跡」[注8]からは住居跡が31軒（他に竪穴遺構が８軒）とまとまって検出されているが、他は１～６軒の検出である。「下堤Ｃ遺跡」は中心的な遺跡と推測され、他は数軒単位の検出で、１軒のみの検出は「湯ノ沢Ｂ遺跡」[注9]に次いで２例目である。土壙は15基検出された。12号～15号土壙は覆土に炭化物が多量に認められるもので、12号土壙からは赤褐色土器坏の破片が出土し、７号住居跡と同時期と考えられる。他の土壙は出土遺物や周辺遺構のあり方から縄文時代中期末葉から後期に位置づけられると考えられる。なお、住居跡を切っている７号～９号土壙からは後期前葉の土器が出土している。溝状土壙は１基のみの検出である。縦断面は両端が壁外へ張り出し、横断面は「Ｙ」字状を呈する形態であるが、出土遺物が認められず時期を特定できない。本台地北部の「下堤Ｃ遺跡」で１基、「下堤Ｄ遺跡」で４基検出されている。土器埋設遺構は６基検出された。１号～５号土器埋設遺構は深鉢形土器で、底部穿孔のものも認められ土器棺としての性格が考えられる。埋設土器は縄文地文のみのもので文様は認められず時期を明確にすることはできないが、周辺遺構のあり方から縄文時代中期末葉から後期前葉に位置づけられると考えられる。６号土器埋設遺構は鉢形土器で、磨製石斧が10個（第24、25図）入った状態で検出され、埋設土器は縄文時代晩期の大洞Ｃ$_2$式土器に比定されるものである。

出土遺物は、土器、土製品、石器である。土器は施文様から８群に大別した。第Ⅰ群土器は半隆起線文を施すもので、北陸系の土器である。本台地では「坂ノ上Ｆ遺跡」で多量に出土し、他に５遺跡で少量の出土が認められる。「坂ノ上Ｆ遺跡」２群・７群土器、石川県鹿島町「徳前Ｃ遺跡」[注10]第３群８類土器に類似するもので、縄文時代中期初頭に位置づけられる。第Ⅱ群土器は本遺跡で主体をなす土器で２類に細分した。沈線区画の磨消帯を有するもの、口縁部無文帯のもので、縄文時代中期末葉の大木10式土器に比定されるものである。３号・５号住居跡の炉埋設土器は本群に相当し、他の住居跡についても本群に相当する遺物が出土している。第Ⅲ群土器は数条の沈線によって文様を作り出すもので、沈線文、連鎖状文及び連鎖状「Ｓ」字文等が施される。縄文時代後期初頭から前葉に位置づけられる十腰内Ⅰ式土器、宮戸Ⅰ式土器に併行するものと考えられる。第Ⅳ群土器は地文のみのもので３類に細分した。単節斜縄文、撚糸文、条痕文を施すもので、縄文時代中期末葉から後期前葉に位置づけられると考えられる。第Ⅴ群土器は縄文時代晩期の土器で４類に細分した。１類は大洞Ｂ式土器、２類は大洞Ｃ$_1$式土器、３類は大洞Ｃ$_2$式土器、４類は大洞Ａ式土器にそれぞれ比定されるものである。第Ⅵ群土器は刷毛目調整痕の認められる甕形土器である。本台地「地蔵田Ｂ遺跡」、本市北部の「梵天長根遺跡」[注11]に類例が認められ、弥生時代前期に位置づけられる。第Ⅶ群土器は土器底部で、網代痕の認められるものである。第Ⅷ群土器は赤褐色土器坏及び須恵器甕である。底部切り離し回転糸切り無調整の赤褐色土器坏は「下堤Ｃ遺跡」で多量に出土しており、ほぼ同年代の９世紀後半から10世紀頃と考えられる。

註1　「下堤D遺跡発掘調査報告書」　秋田市教育委員会　1982年3月

註2　「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書　下堤G遺跡」　秋田市教育委員会　1983年3月

註3　「秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書　地蔵田B遺跡」　秋田市教育委員会　1986年3月

註4　「秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書　狸崎B遺跡」　秋田市教育委員会　1992年3月

註5　「小阿地下堤遺跡・坂ノ上遺跡発掘調査報告書」　秋田市教育委員会　1976年3月

註6　「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書　坂ノ上F遺跡」　秋田市教育委員会　1985年3月

註7　「秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書　下堤B遺跡」　秋田市教育委員会　1988年3月

註8　「秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書　下堤C遺跡」　秋田市教育委員会　1987年9月

註9　「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書　湯ノ沢B遺跡」　秋田市教育委員会　1983年3月

註10　「鹿島町徳前C遺跡調査報告書（Ⅳ）」　石川県埋蔵文化財センター　1983年3月

註11　「梵天長根遺跡　秋田変電所増設に伴う緊急発掘調査報告書」　東北電力株式会社秋田支店、秋田市教育委員会　1991年3月

参考文献

秋田県教育委員会：「八木遺跡発掘調査報告書」　秋田県文化財調査報告書第181集　1989年3月

秋田県教育委員会：「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅳ　下田谷地遺跡」　秋田県文化財調査報告書第189集　1990年3月

秋田県教育委員会：「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅷ　小出Ⅰ遺跡、小出Ⅳ遺跡」　秋田県文化財調査報告書第206集　1991年3月

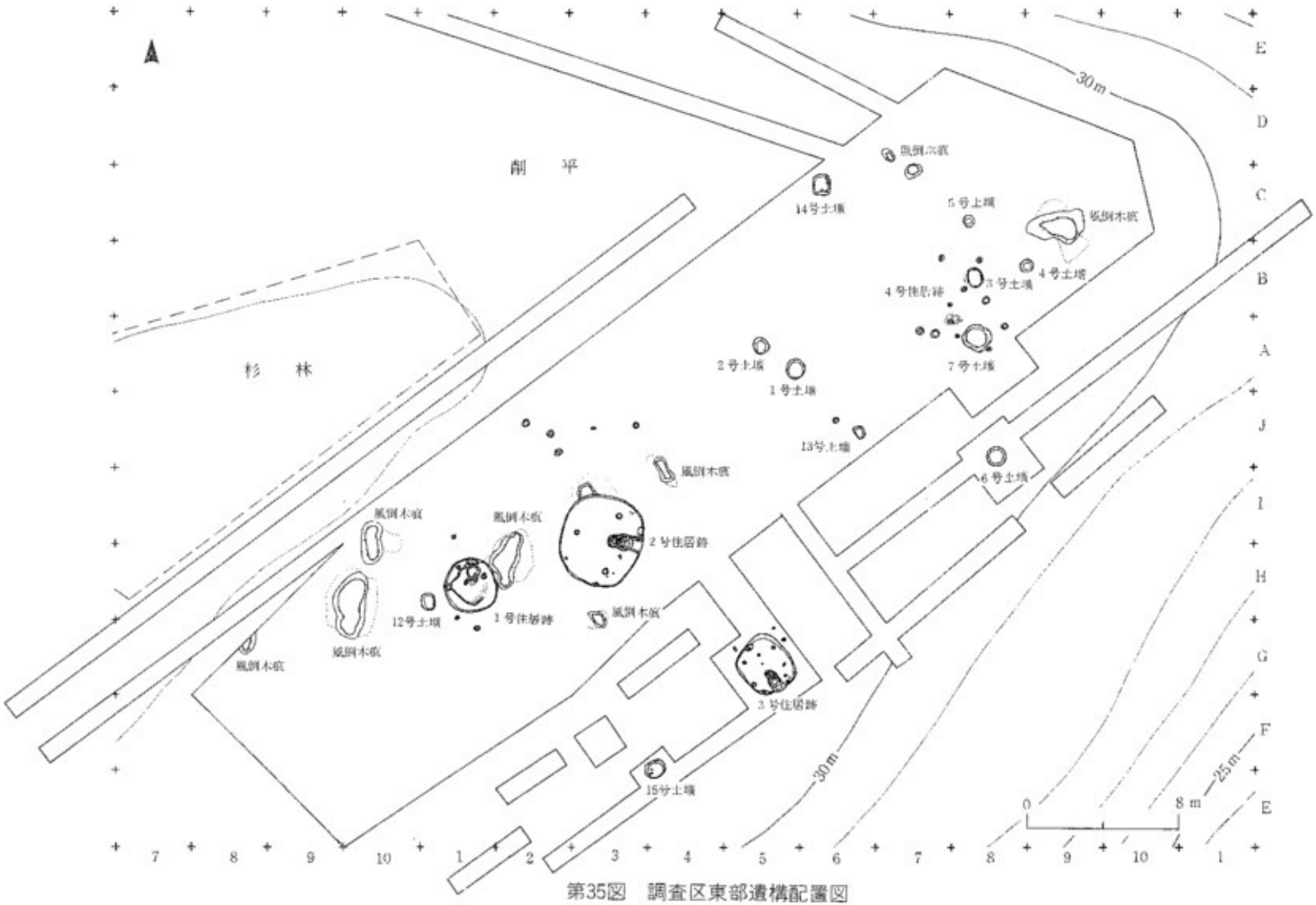
秋田県教育委員会：「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅸ　太田遺跡」　秋田県文化財調査報告書第207集　1991年3月

秋田県教育委員会：「大砂川地区農免農道整備事業に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　上熊ノ沢遺跡」　秋田県文化財調査報告書第213集　1991年3月

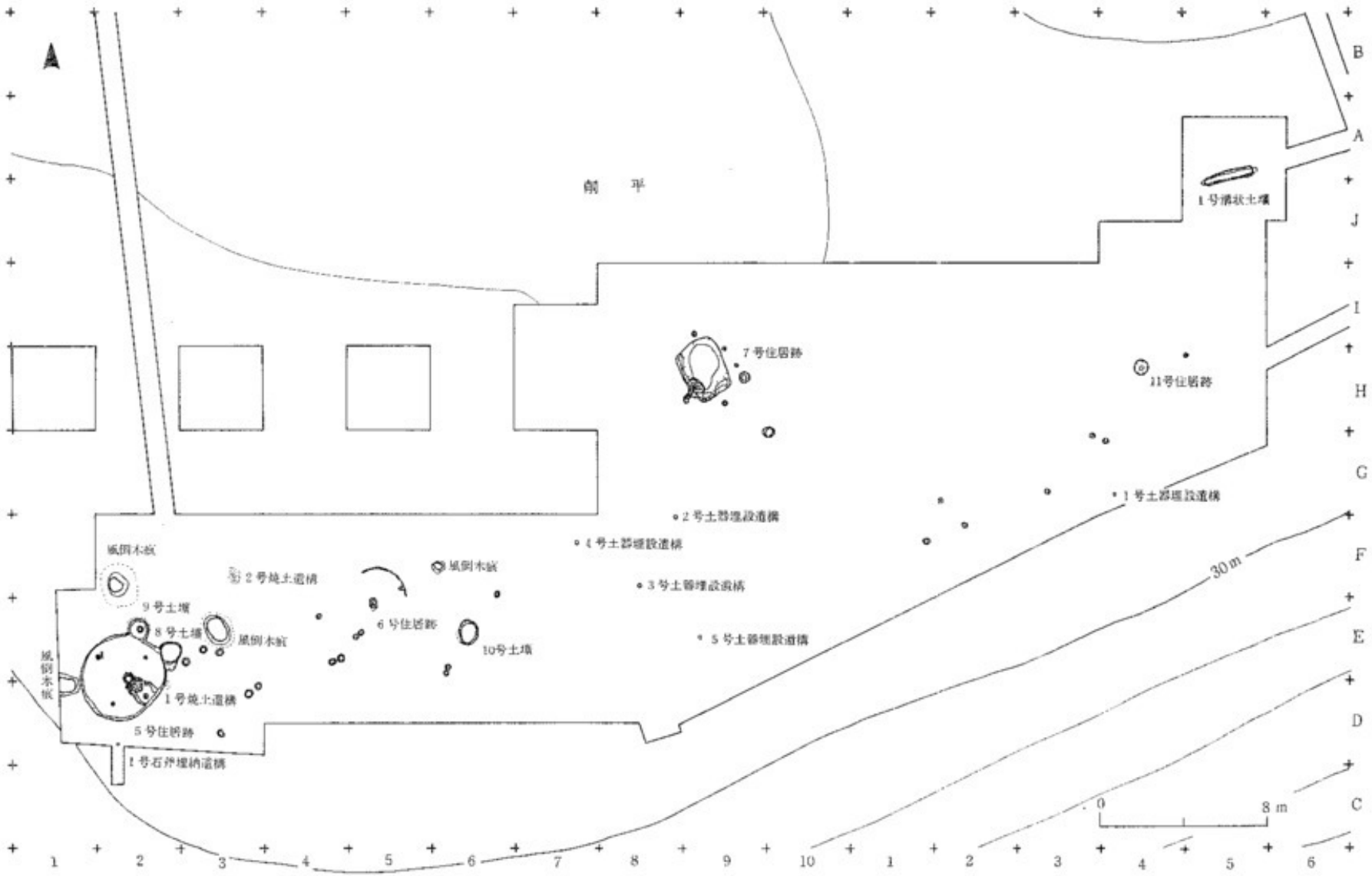
秋田市教育委員会：「秋田城跡」　昭和50年度秋田城跡発掘調査概報　1976年3月

岩手県立博物館：「岩手の土器　県内出土資料の集成」　1982年3月

高橋忠彦：「秋田県の縄文時代後期の土器」　秋田県埋蔵文化財センター研究紀要第4号　1989年8月



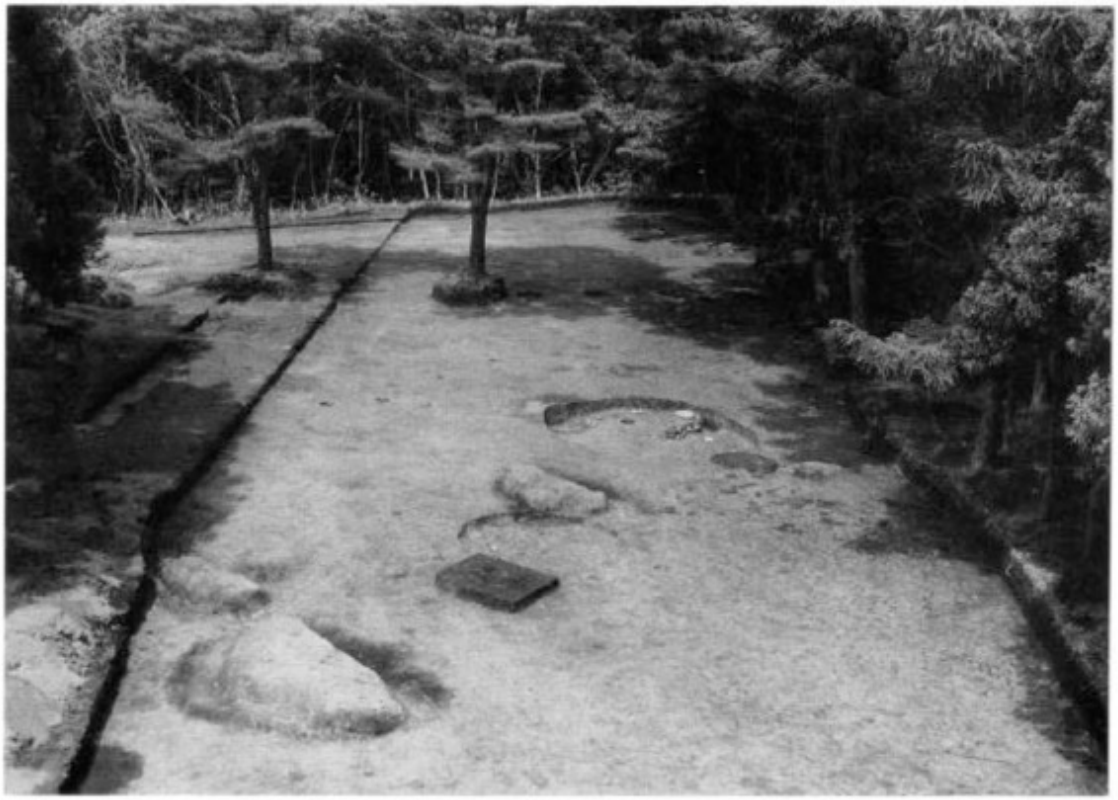
第35図　調査区東部遺構配置図



第36図　調査区西部遺構配置図

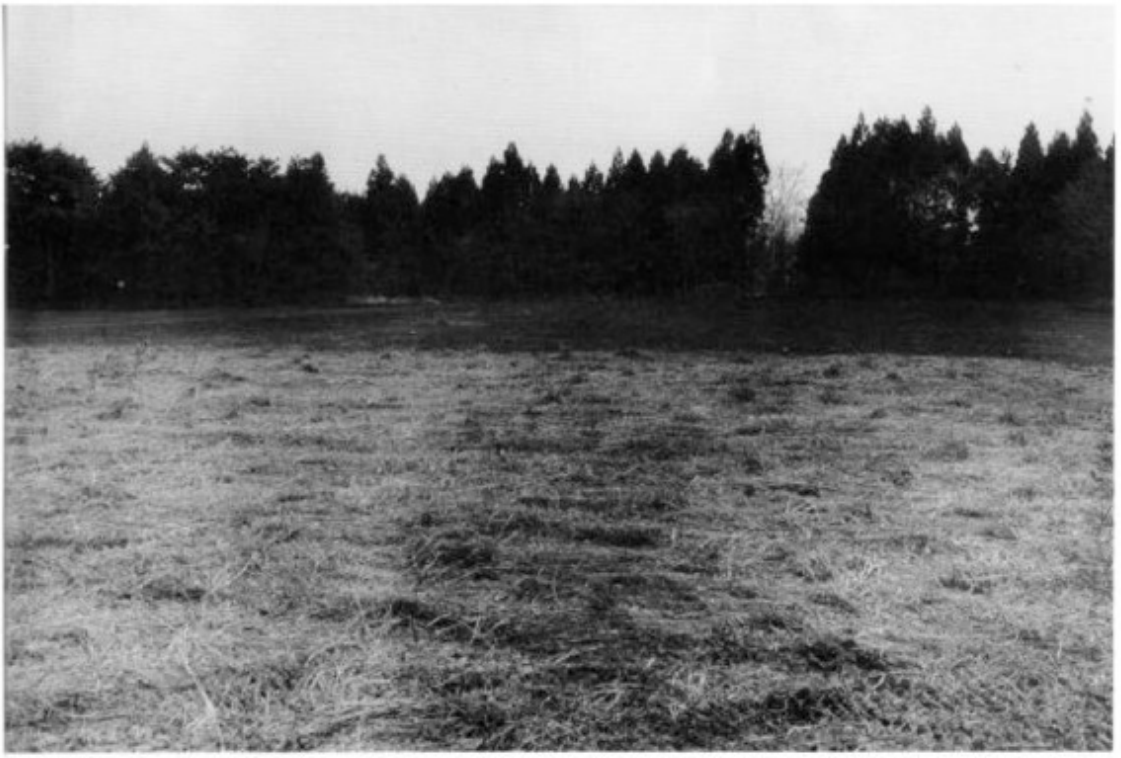
第37図　遺構配置図

調査区東部調査前（東→）



調査区東部遺構検出状況（西→）

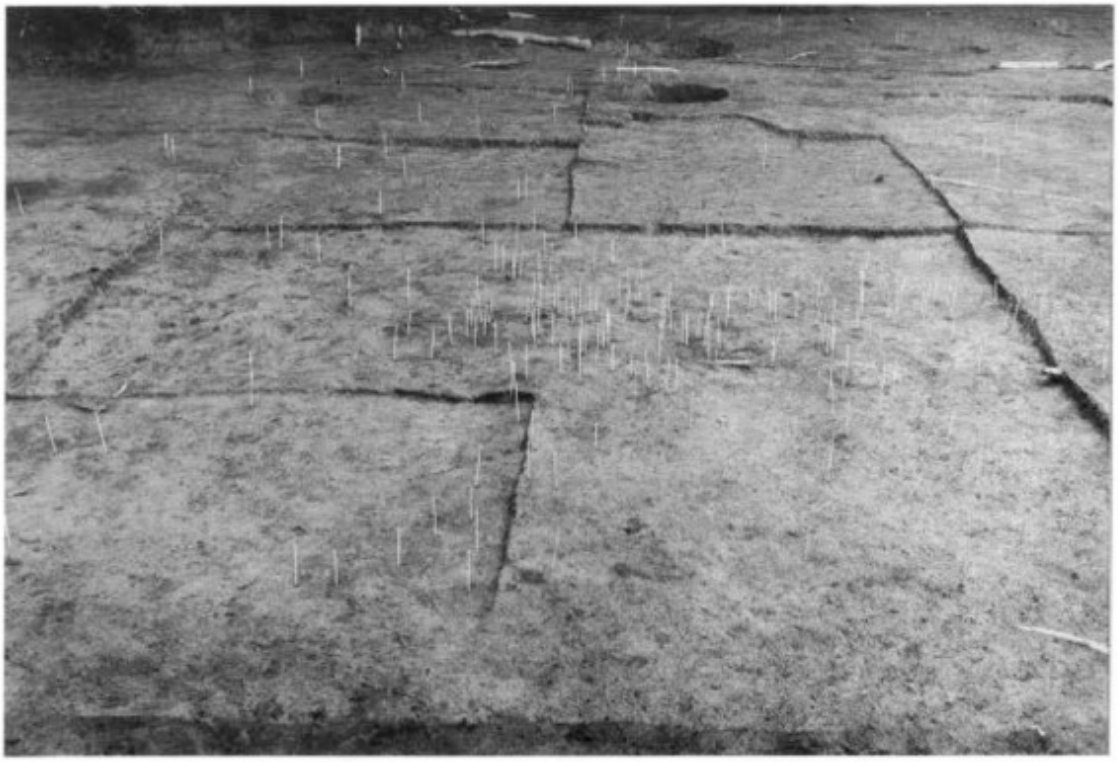
図版 1



調査区西部調査前（北→）

調査区西部遺構検出状況（東→）

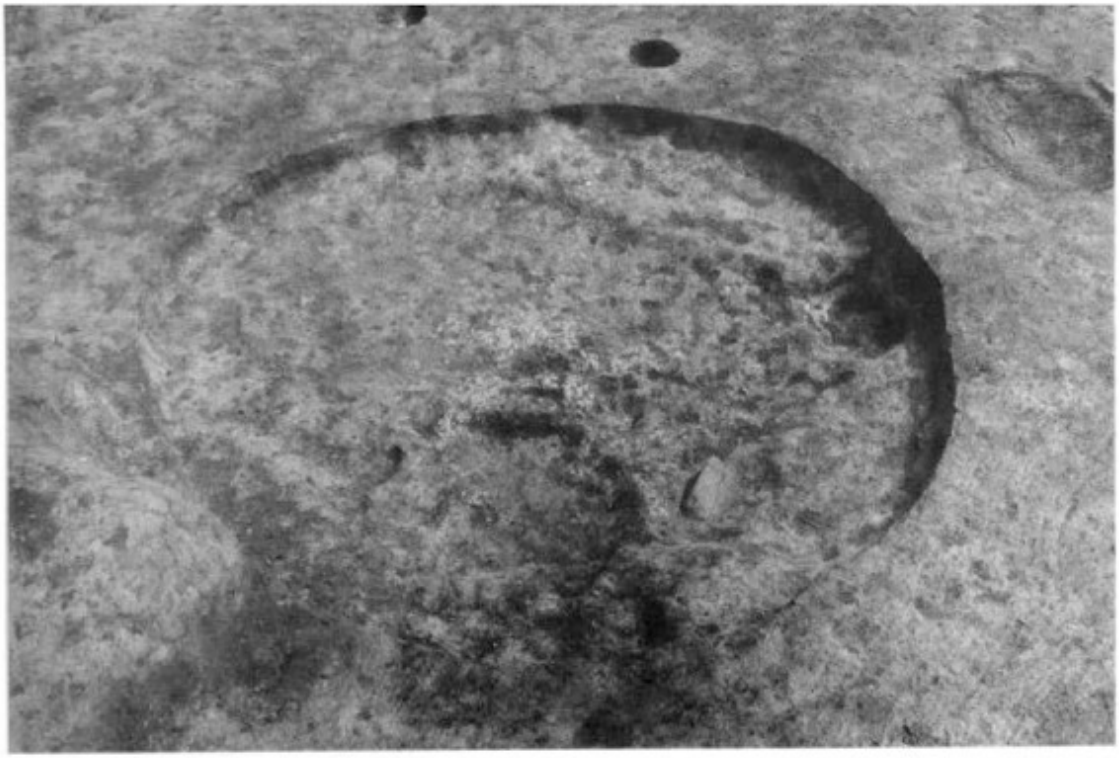
図版 2



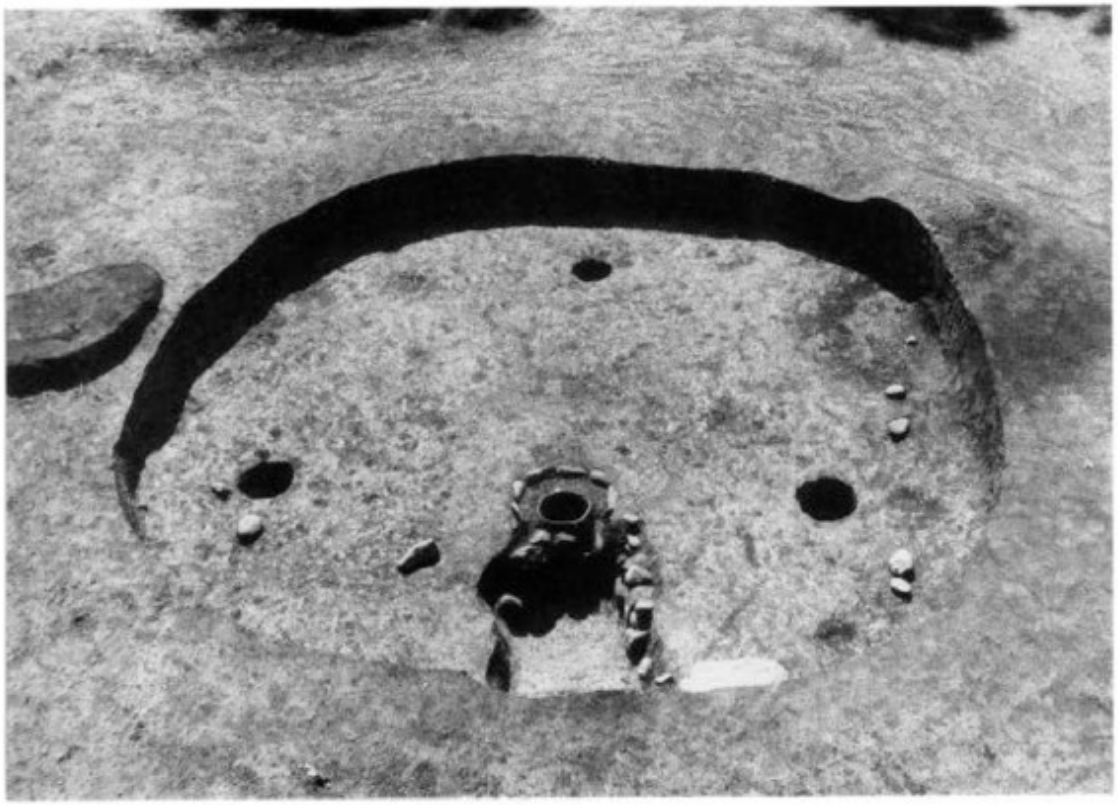
旧石器時代調査状況（北→）

旧石器時代調査区（南→）

図版 3



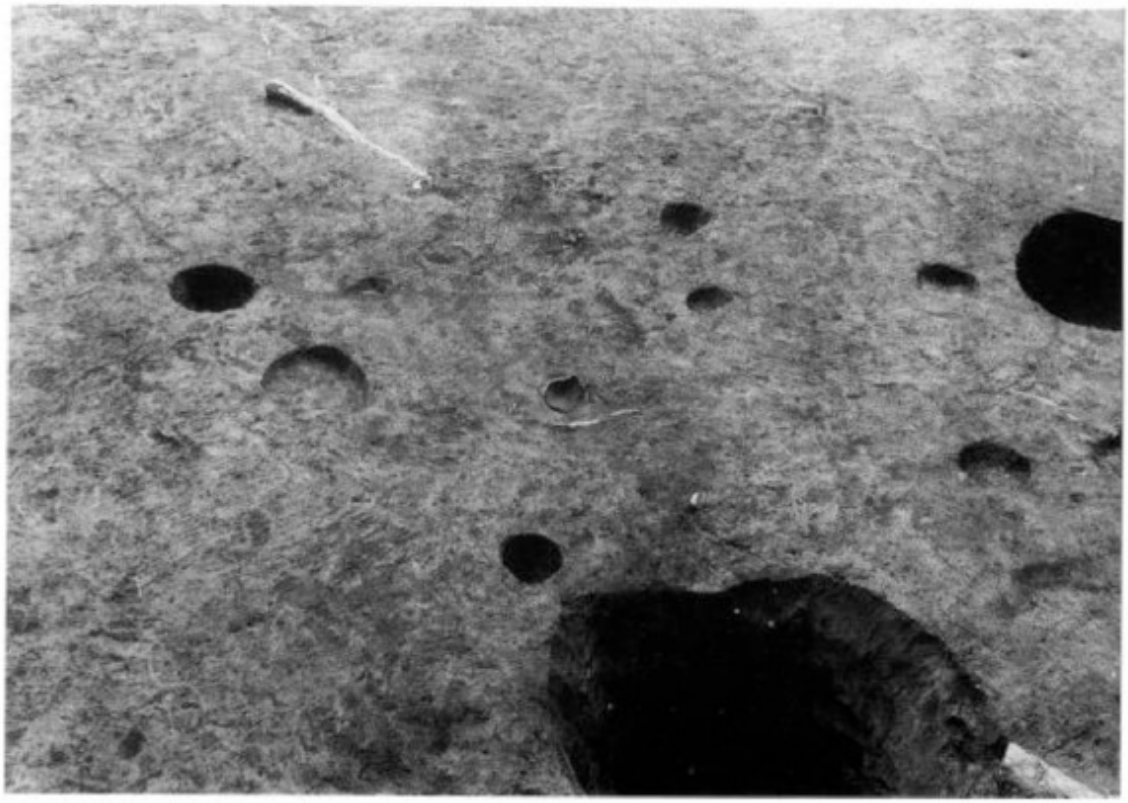
1号住居跡（北→）



2号住居跡（東→）

図版4

3 号住居跡（南→）



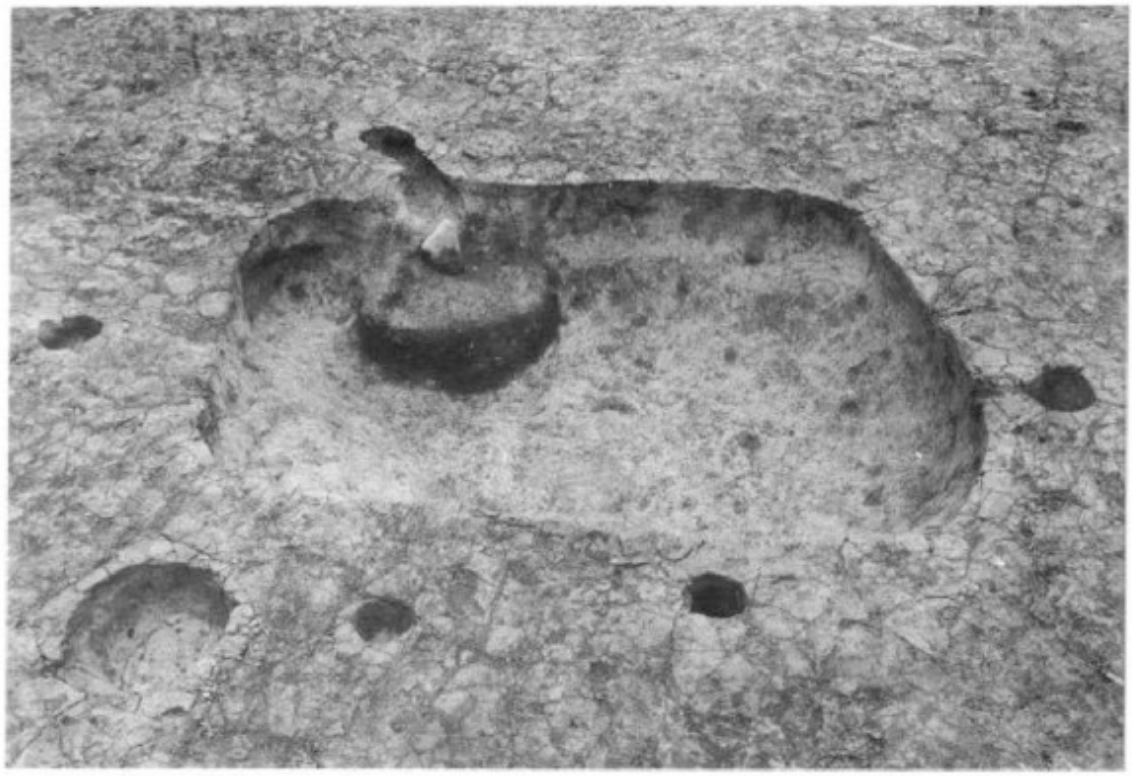
4 号住居跡（南→）

図版 5

5号住居跡（南東→）

6号住居跡（北西→）

図版6



7号住居跡（東→）

2号住居跡炉

2号住居跡炉断ち割り

図版7

3号住居跡炉

3号住居跡炉断ち割り

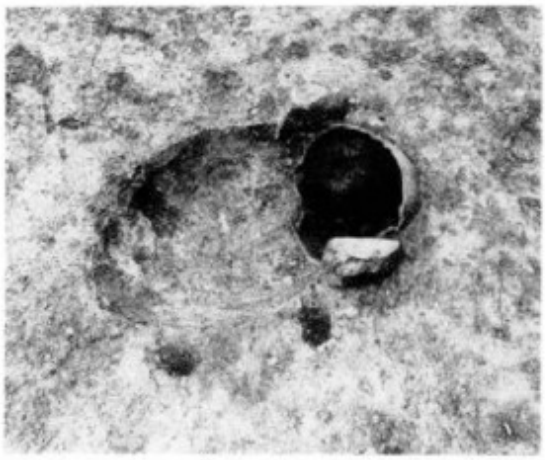
4号住居跡炉

4号住居跡炉断ち割り

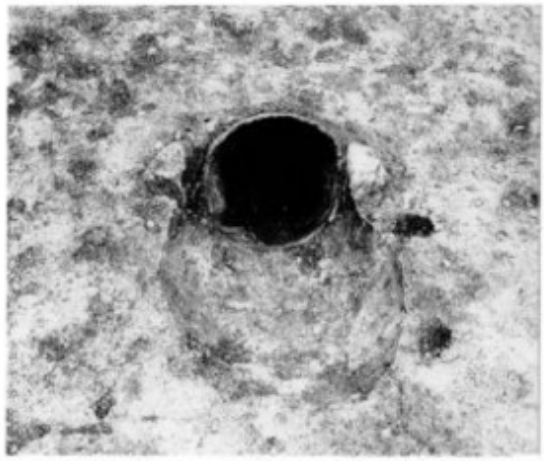
5号住居跡炉

5号住居跡炉断ち割り

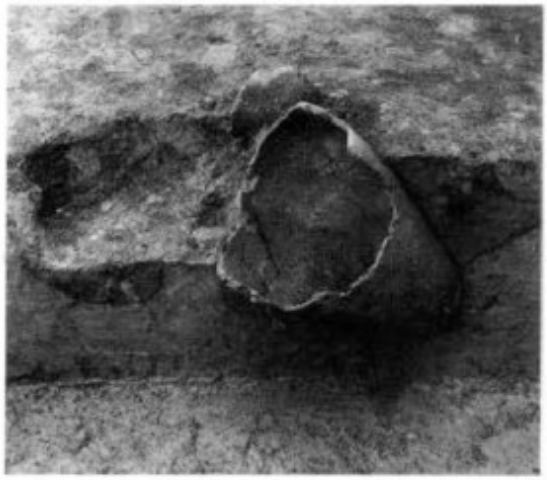
図版 8



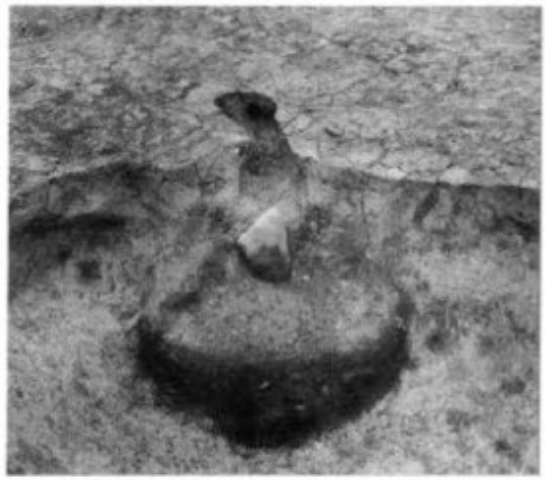
6 号住居跡炉



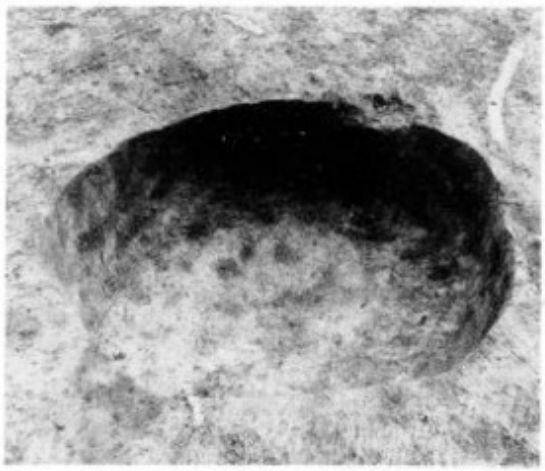
6 号住居跡炉



6 号住居跡炉断ち割り



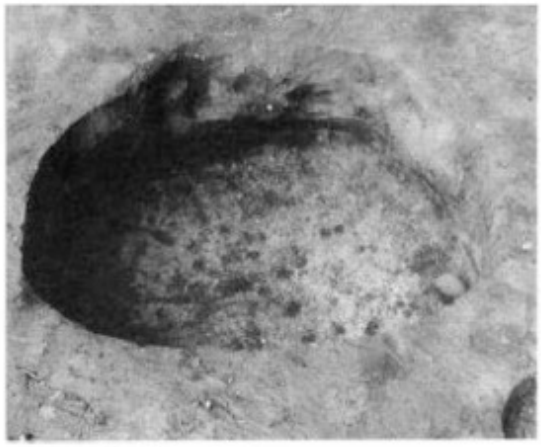
7 号住居跡カマド



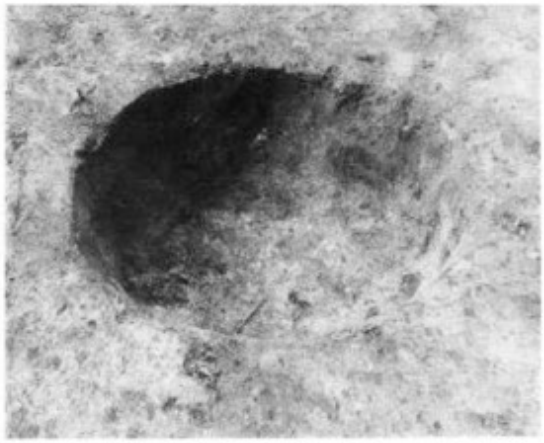
1 号土壙（南東→）

2 号土壙（南東→）

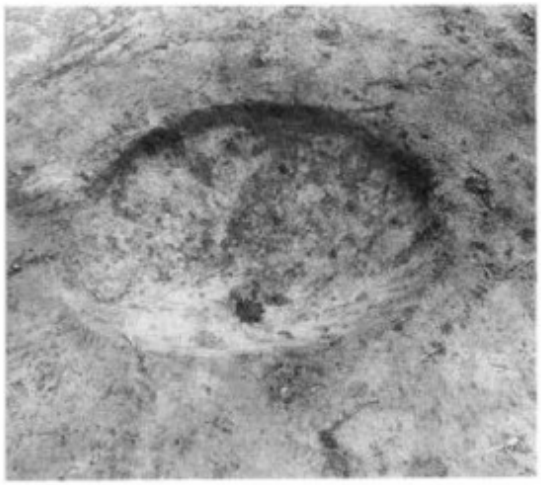
図版 9



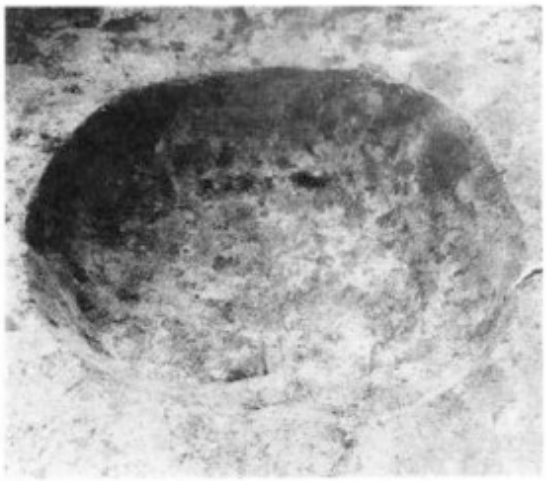
3号土壙（西→）



4号土壙（南→）



5号土壙（南東→）



6号土壙（南→）

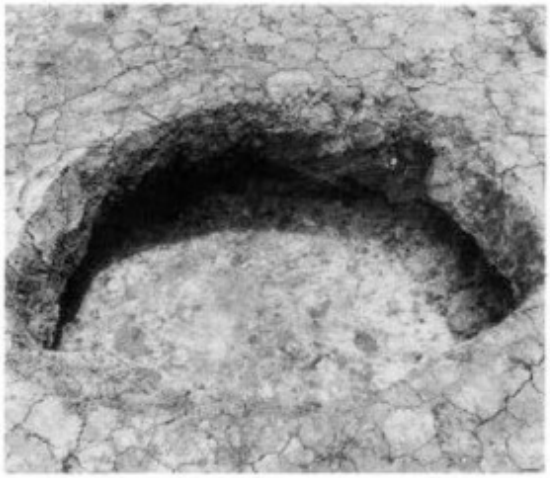
7号土壙（西→）

8号土壙（西→）

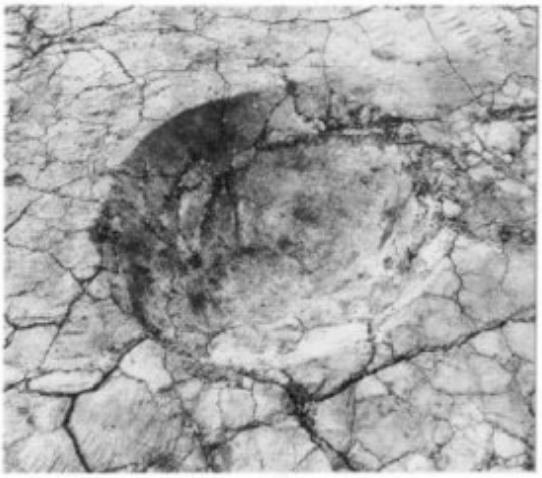
図版10

9号土壙（西→）

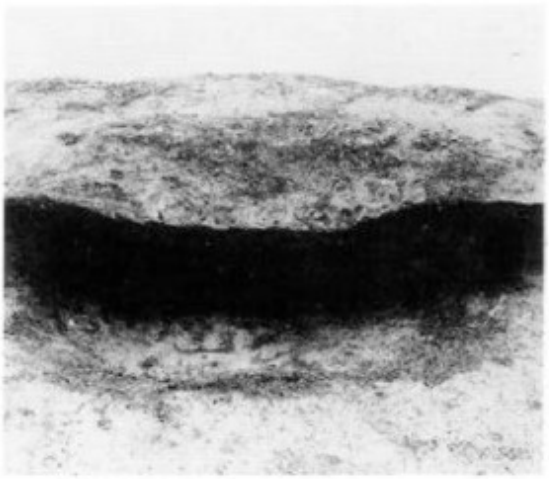
9号土壙土器出土状況



10号土壙（西→）



11号土壙（南→）

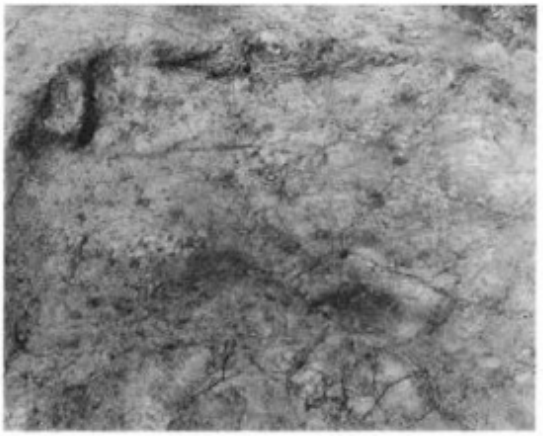


12号土壙土層

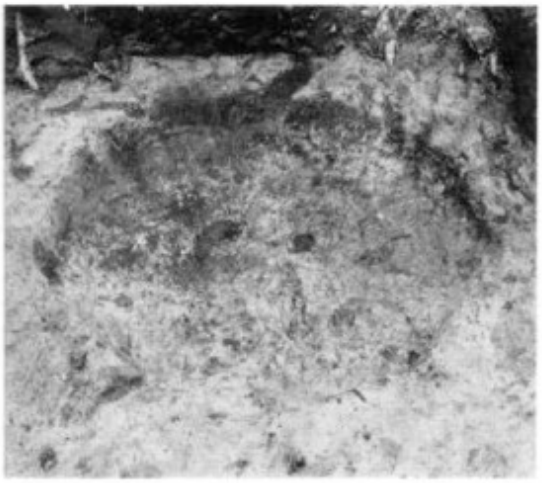
12号土壙（東→）

図版11

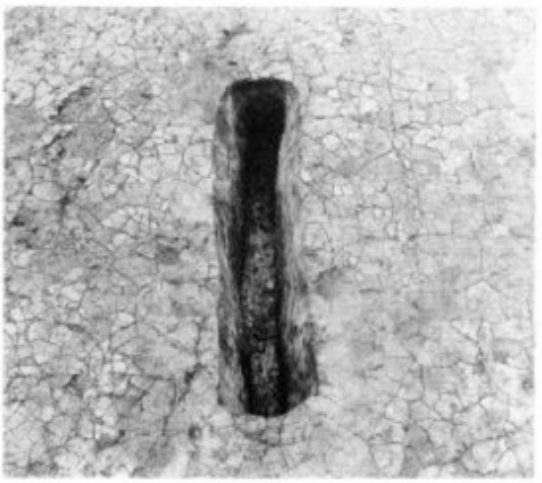
13号土壙（西→）



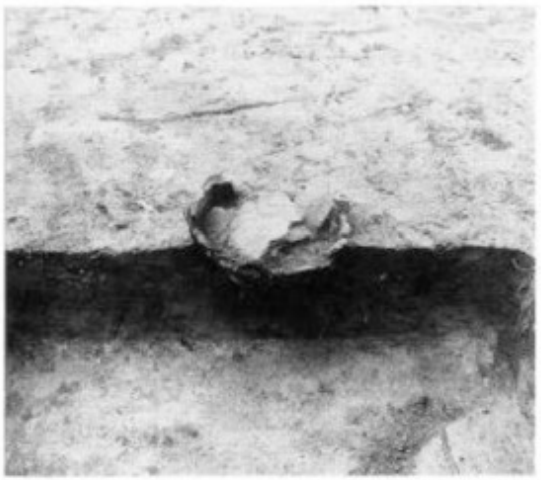
14号土壙（東→）



15号土壙（東→）



1号溝状土壙（西→）



1号土器埋設遺構（南→）

2号土器埋設遺構（南→）

3号土器埋設遺構（南→）

3号土器埋設遺構（南→）

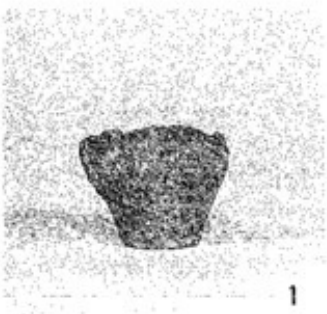
4号土器埋設遺構（南→）

4号土器埋設遺構（南→）

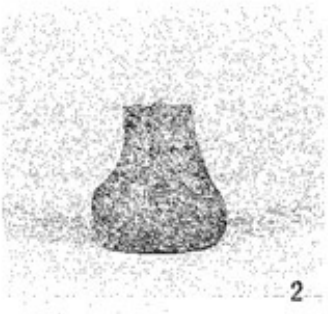
5号土器埋設遺構（南→）

6号土器埋設遺構（西→）

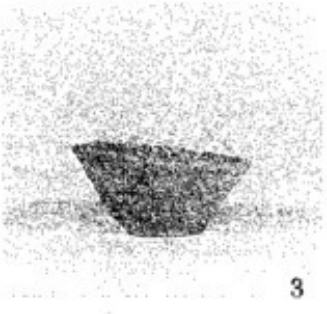
図版13



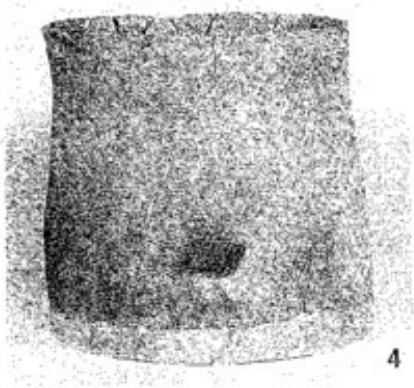
1



2



3

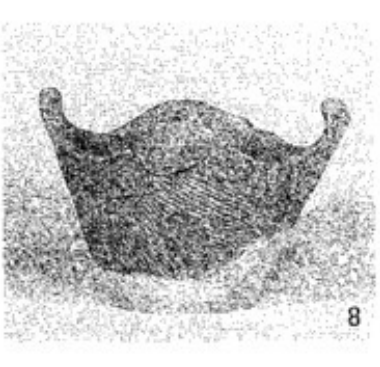


4

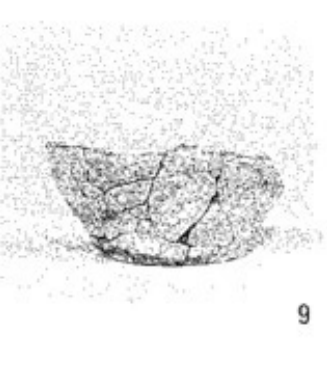
5

6

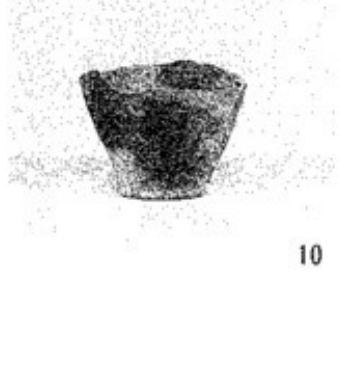
7



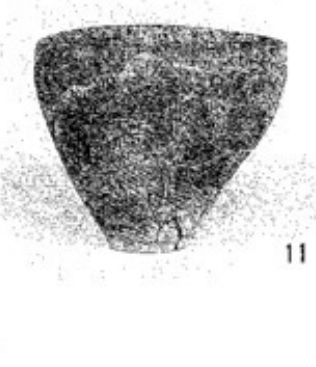
8



9

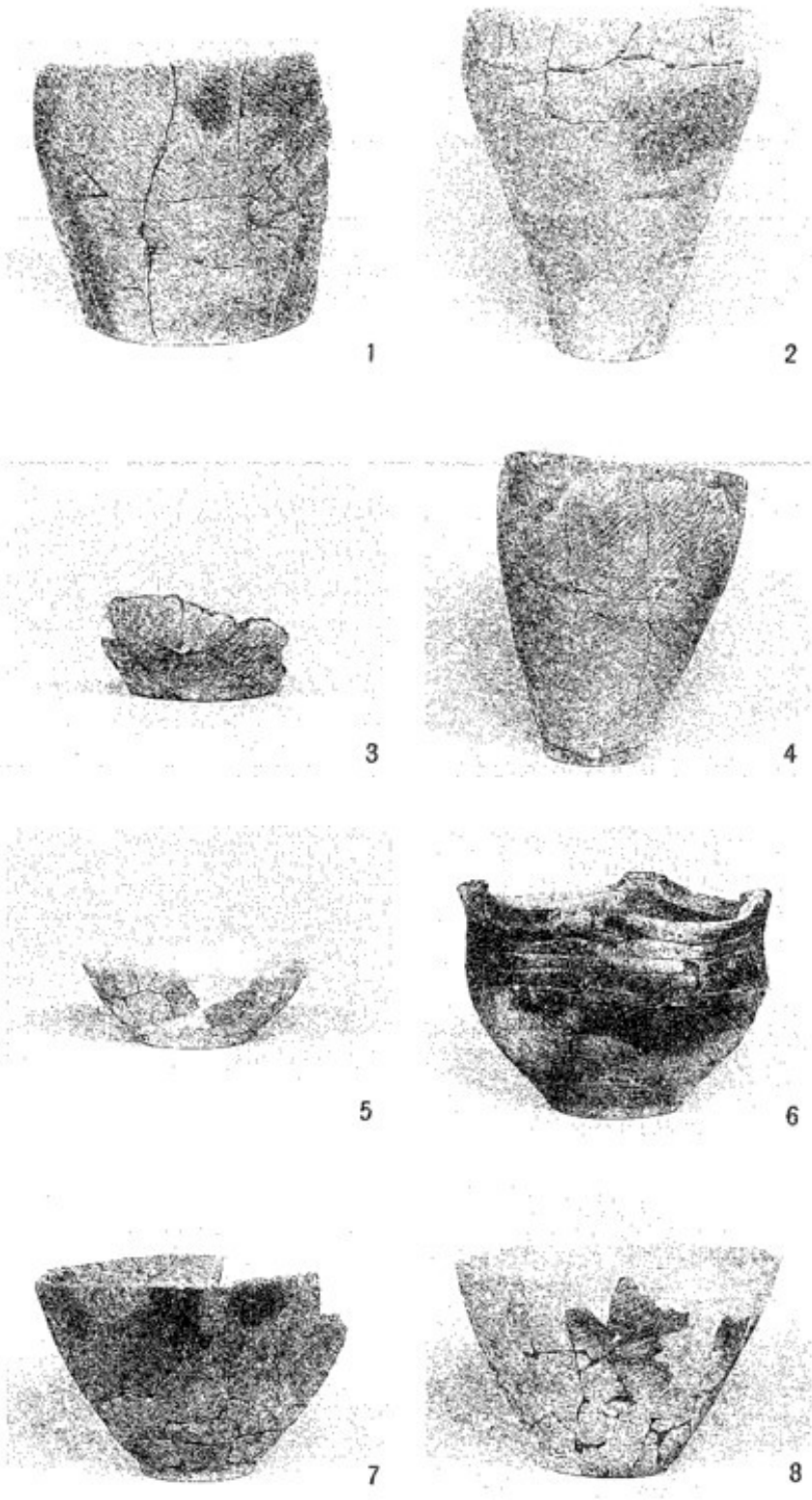


10



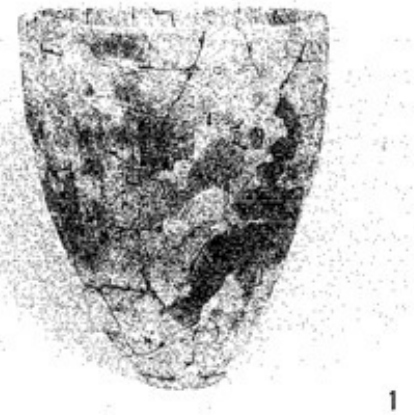
11

1	1号住居跡
2～4	2号住居跡
5～8	3号住居跡
9	4号住居跡
10、11	5号住居跡



1、2　5号住居跡　6　9号土壙
3、4　6号住居跡　7　1号土器埋設遺構
5　7号住居跡　8　2号土器埋設遺構

図版15



1

2

3

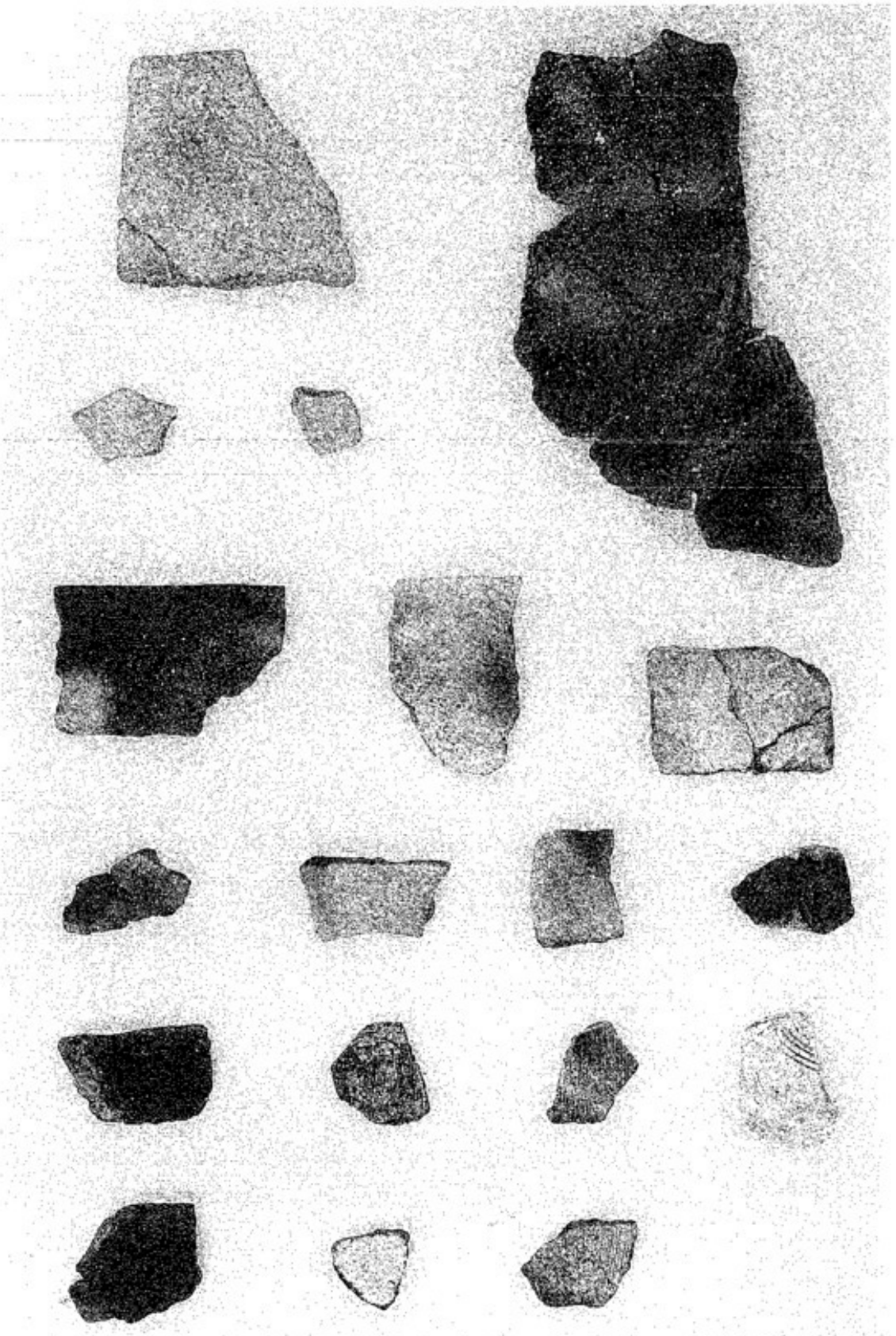
4

5

6

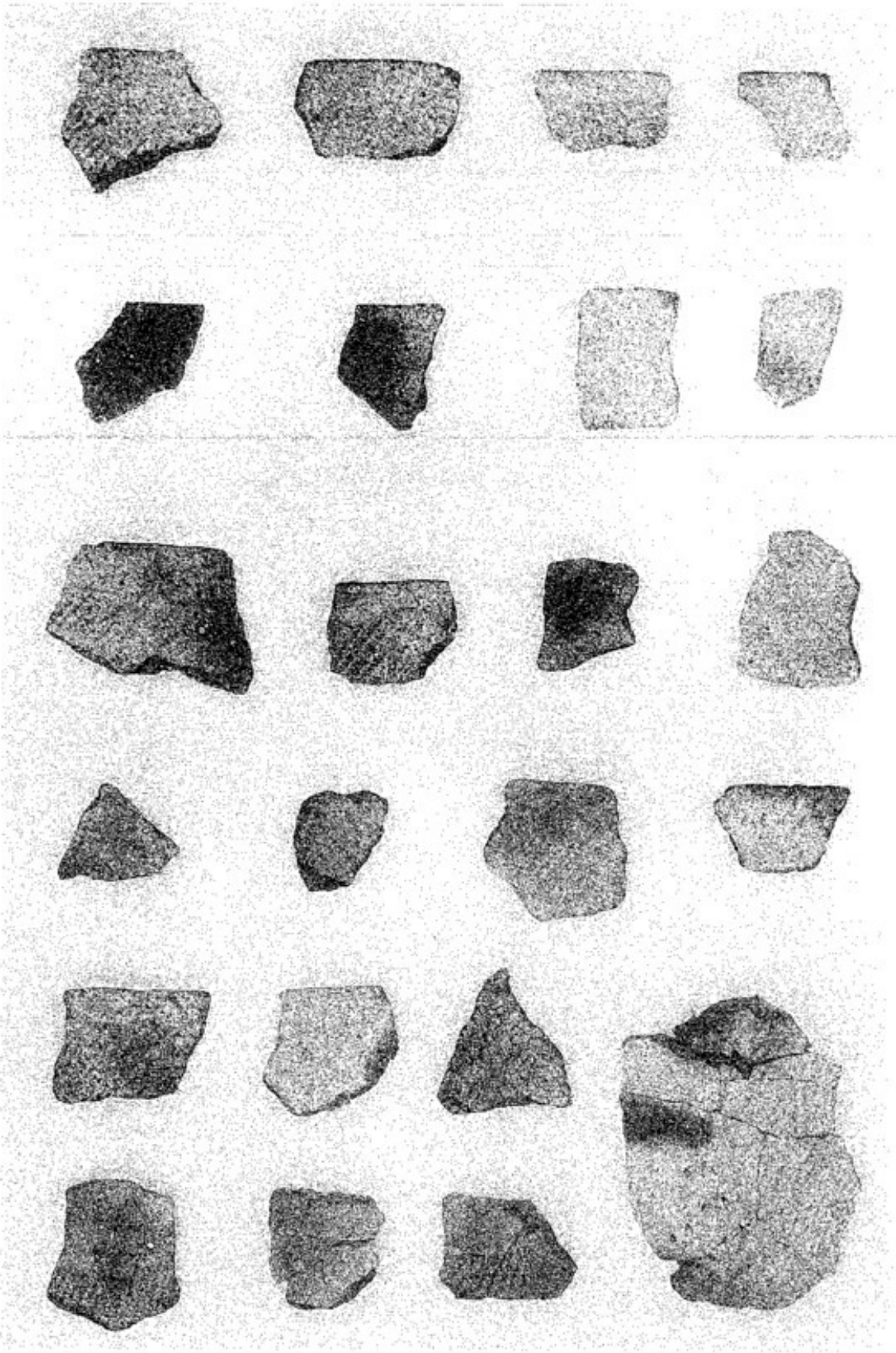
1　3号土器埋設遺構　4　6号土器埋設遺構
2　4号土器埋設遺構　5、6　遺構外
3　5号土器埋設遺構

図版16



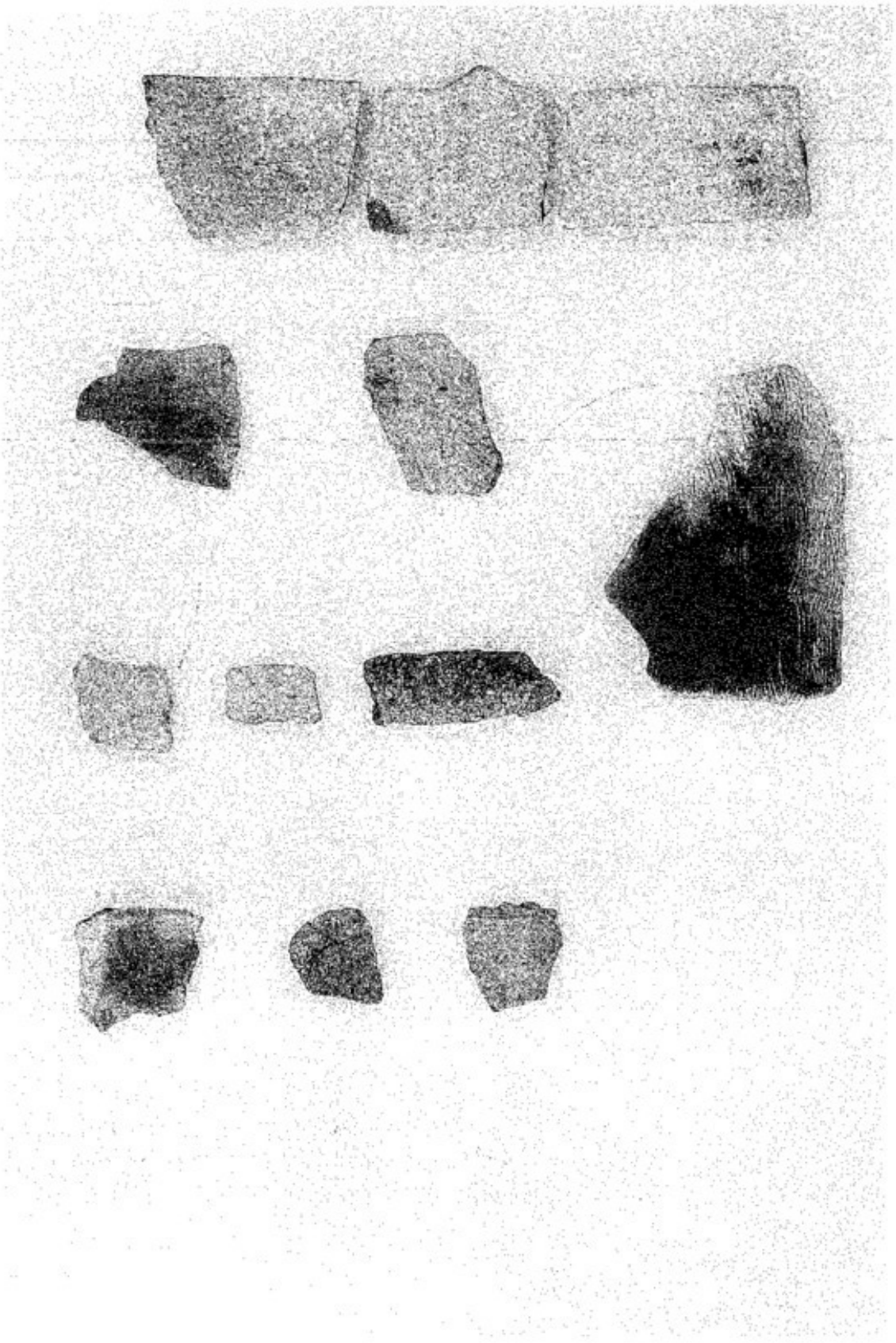
遺構内出土土器

図版17



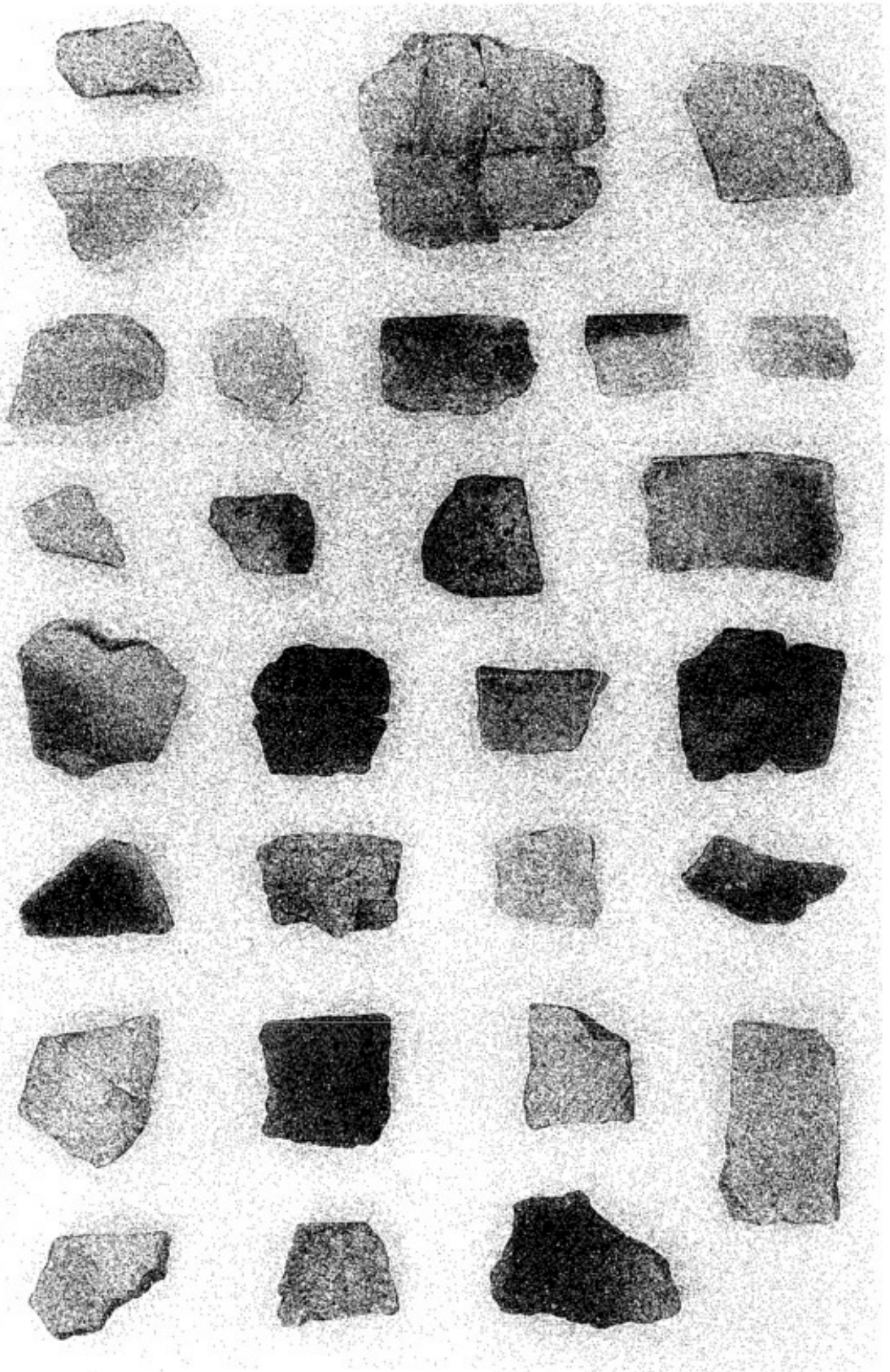
遺構内出土土器

図版18



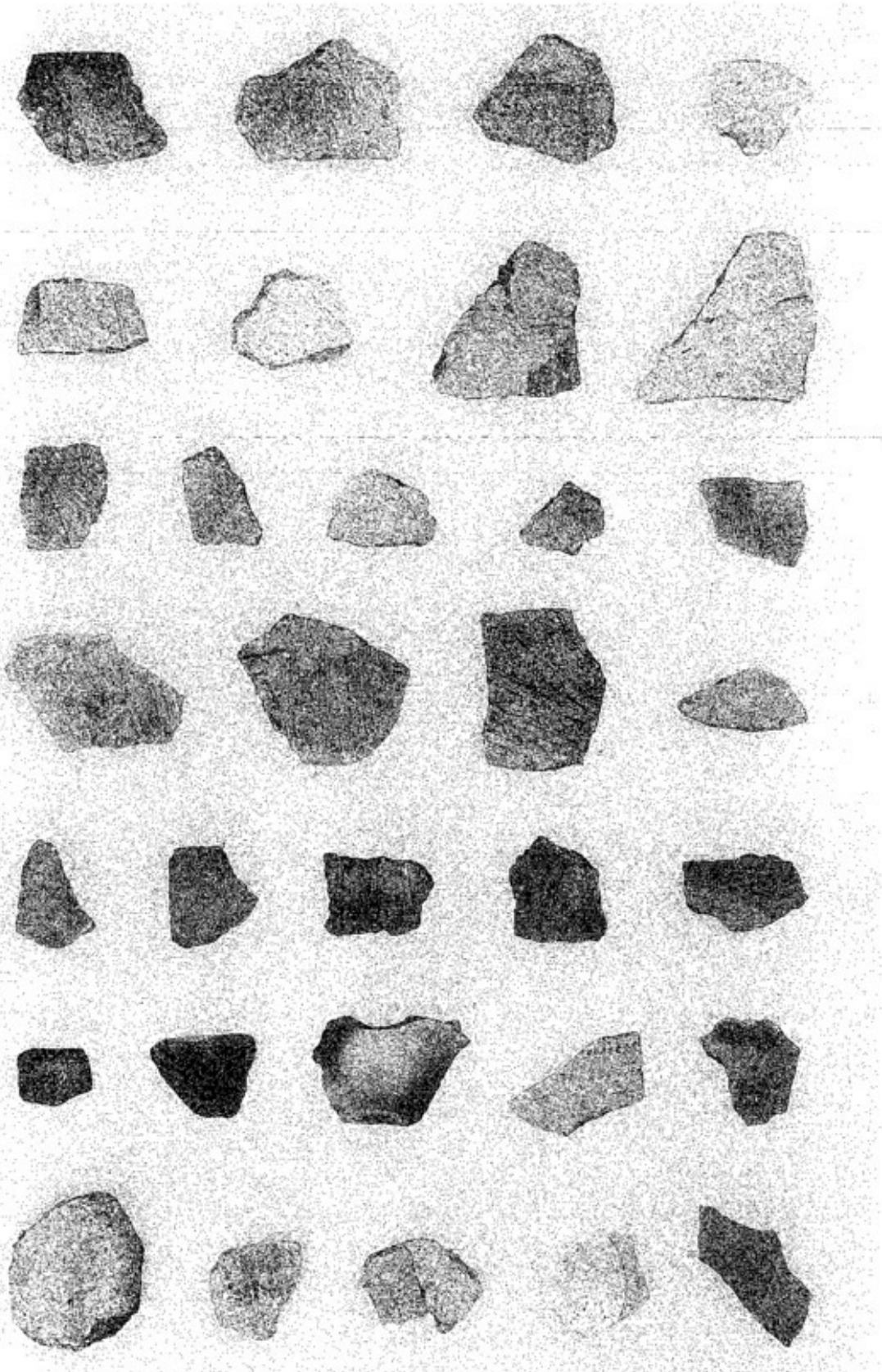
遺構内出土土器

図版19



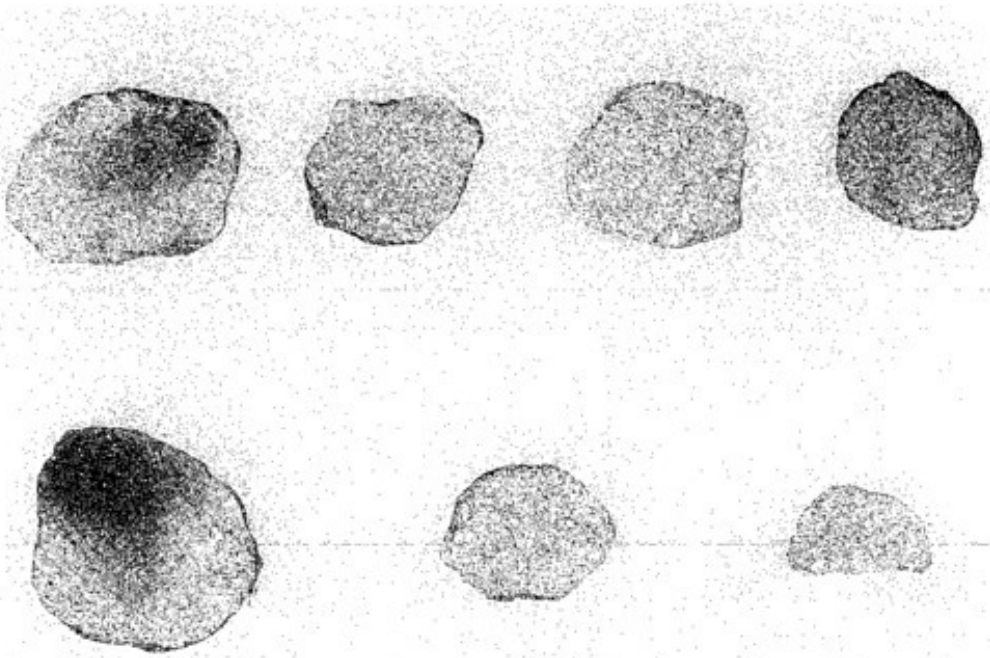
遺構外出土土器

図版20

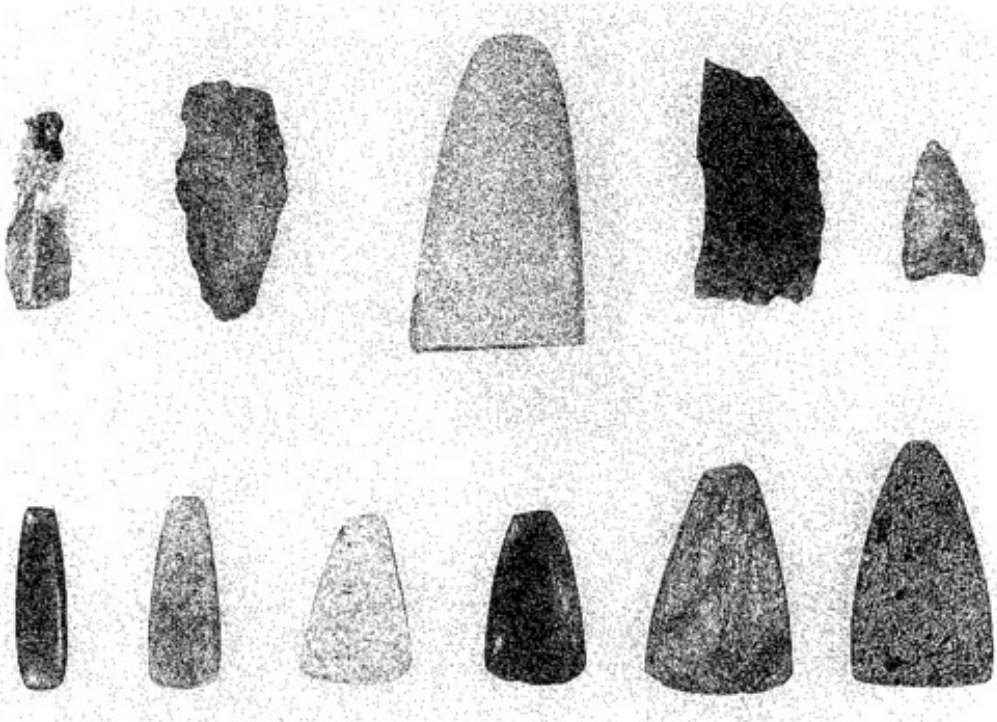


遺構外出土土器

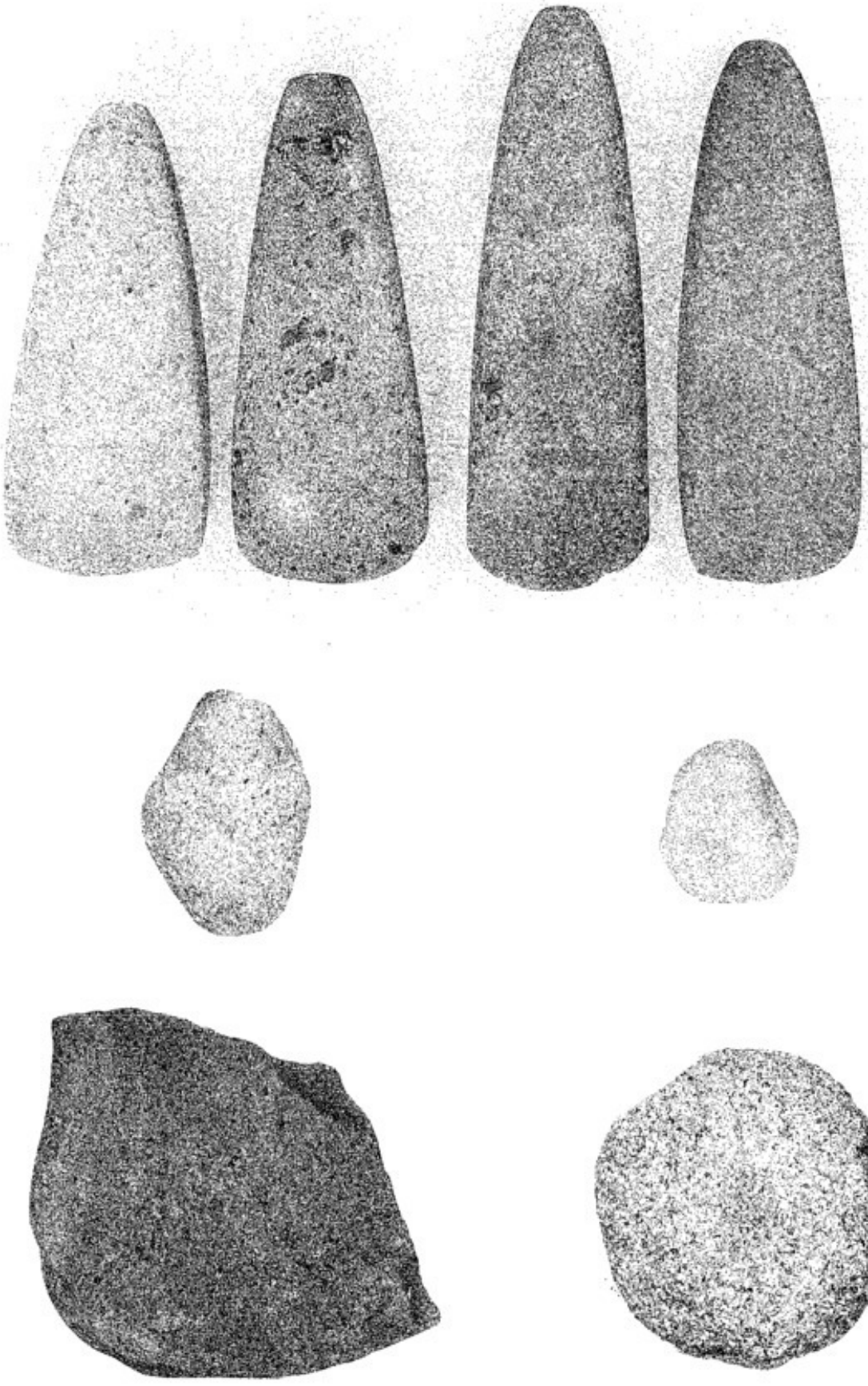
図版21



土製品

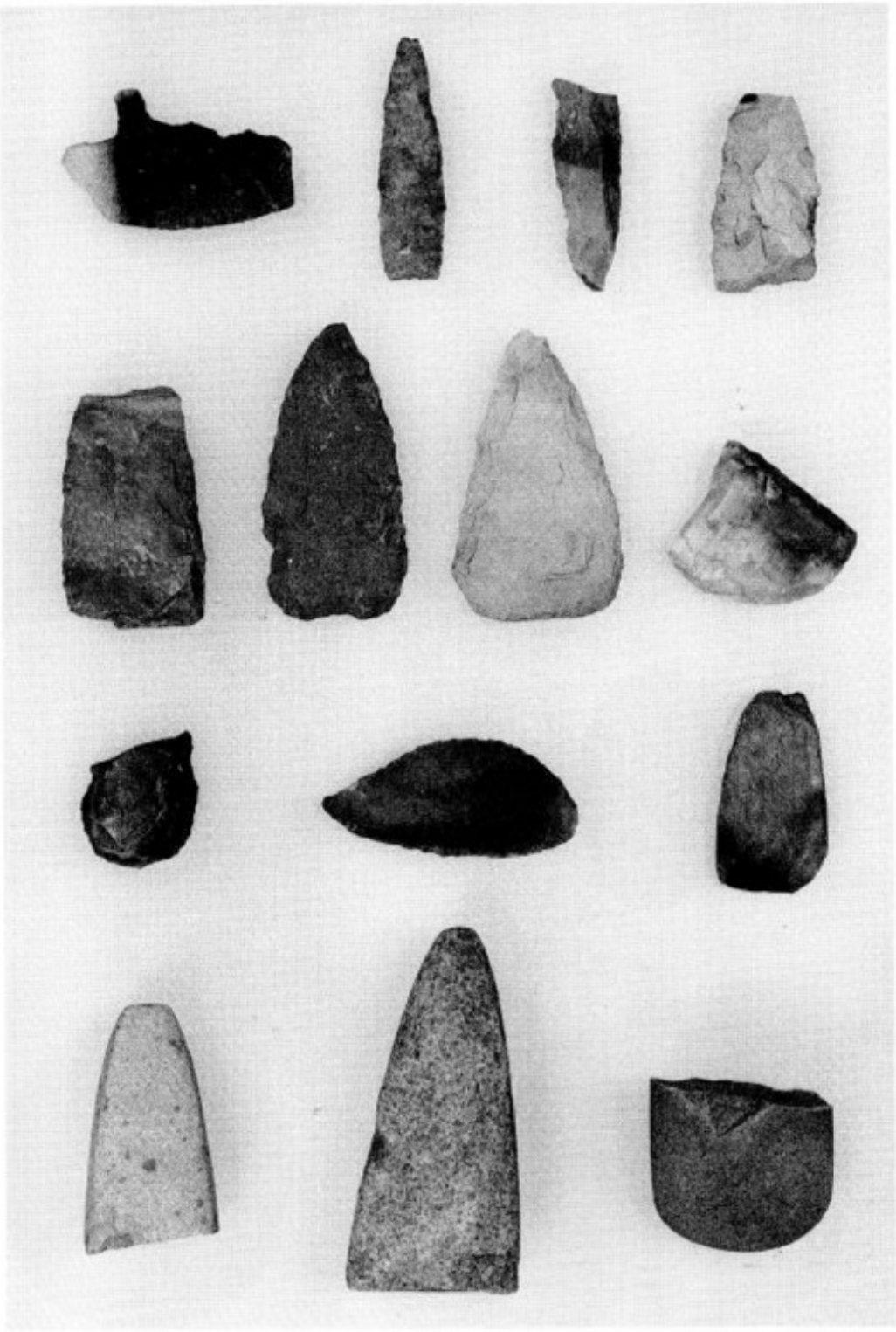


遺構内出土石器



遺構内出土石器

図版23



遺構外出土石器

図版24

遺構外出土石器

図版25

秋田市
秋田新都市開発整備事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成4年3月

発行　秋田市教育委員会

印刷　秋田マイクロ写真印刷(株)